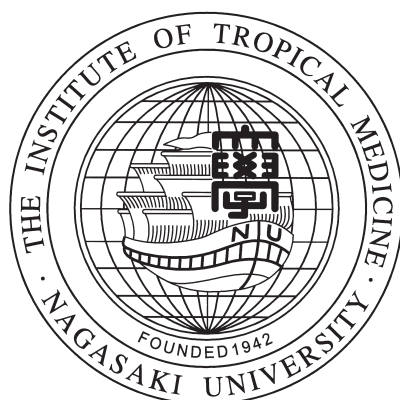


長崎大学熱帯医学研究所

年 次 要 覧

平成20年度
(2008)



長崎大学熱帯医学研究所
平成22年(2010) 2月

長崎大学熱帯医学研究所

総 合 目 標

熱帯地域に存在する複雑多様な自然・社会環境が、熱帯病をはじめとする錯綜した健康問題を引き起こし続けている。国際交流の進展が著しい今日、これらの問題は世界的視野に立って解決されなければならない。

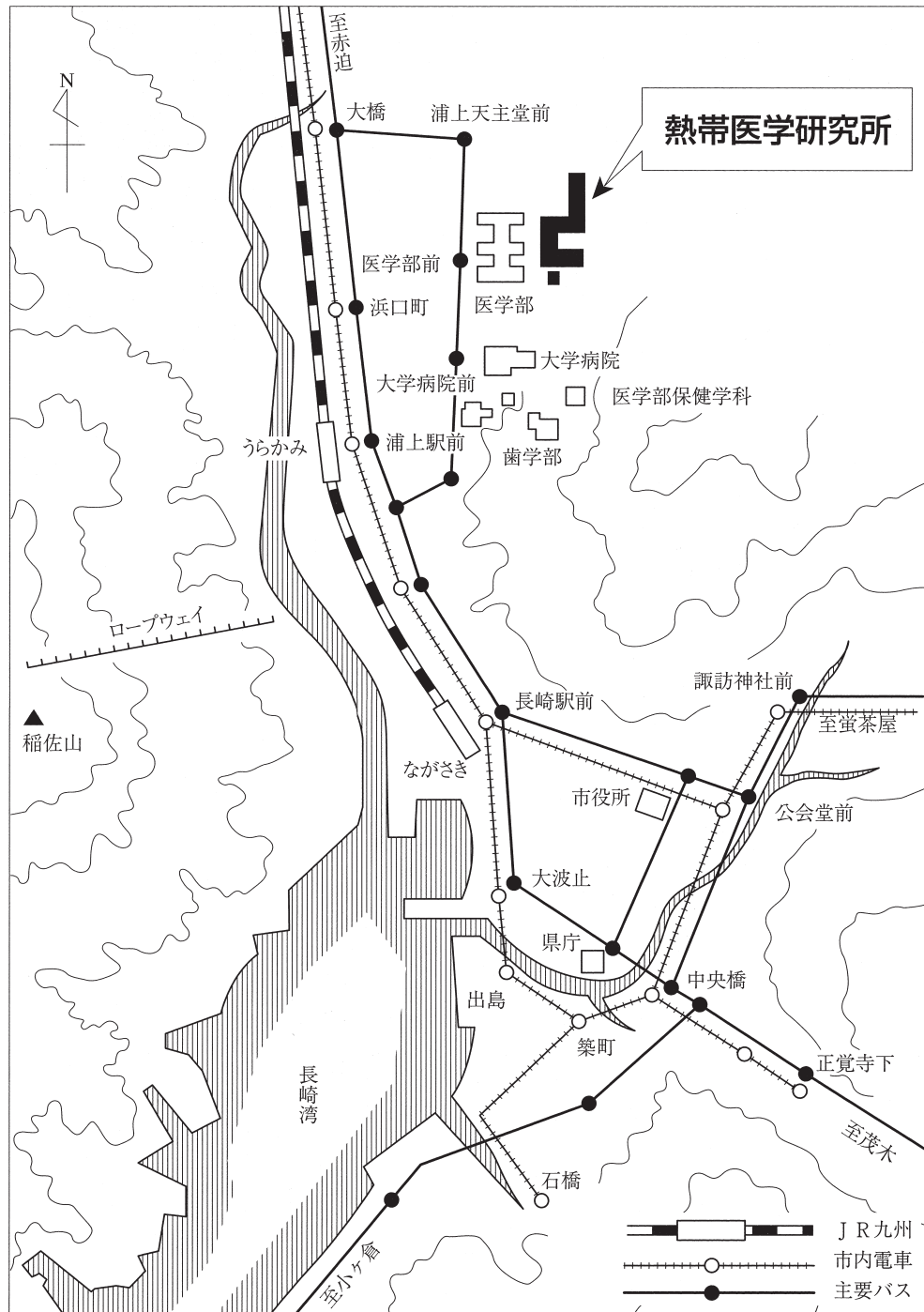
長崎大学熱帯医学研究所は、上述の認識に基づき、熱帯病の中でも最も重要な領域を占める感染症を主とした疾病と、これに随伴する健康に関する諸問題を克服することを目指し、関連機関と協力して以下の項目の達成を図るものである。

1. 熱帯医学及び国際保健における先導的研究
2. 研究成果の応用による熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献
3. 上記に係る研究者と専門家の育成



研 究 所 全 景

長崎大学熱帯医学研究所位置図



所在地 長崎市坂本1丁目12-4(〒852-8523)
 電話 095-819-7800 (総合案内)
 敷地面積 3,305m²
 建物面積 延8,425m²

序

長崎大学熱帯医学研究所は、国立大学法人長崎大学の附置研究所で、創立昭和17年の歴史ある全国共同利用研究所である。

熱帯医学に関する学理及び応用研究を目的としており、研究所のミッションを「先端研究、社会貢献、人材育成」として平成11年度に設定した。その組織は12分野の講座制で、平成20年4月1日現在、教授11、准教授講師7、助教助手19の定員内教員のほか、事務職員6、および技術職員2を擁している。定員外として外部資金などによる有期教員18、有期職員8、非常勤職員47名が雇用され、さらに医歯薬学総合研究科の大学院生約60名が在籍している。

本年次要覧は、平成20年度の研究所の全活動のデータベースとしての記録である。研究所全体としての活動、各分野の活動、付属施設の活動について、研究、教育、社会貢献の各項目について簡潔かつ詳細にまとめられている。我々の目指すところはすでに述べた研究所のミッションを100%果たすことにある。先端研究の目安はあくまで発表論文の質と量および獲得研究費であり、教育の目安は教育システムの高度化と集まる学生の質と修士あるいは博士論文の質により自己評価している。また社会貢献は国内における貢献および世界保健における貢献に大別して評価している。これら进行评估する情報を網羅することを意図し年次要覧を作製しているつもりである。読者の方々の忌憚のないご叱責が今後の研究所の発展に必須であると考えている。

なお平成20年度に特記すべきものとして挙げられるのは以下のものである。

1. グローバルCOEプログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」の採択（平成20年8月28日）
2. グローバルCOEと長崎シンガポール協会の共催によるNagasaki Symposium on Tropical and Emerging Infectious Diseasesの開催（平成20年10月10～11日）
3. 国立科学博物館における特別展示「熱帯感染症とたたかう長崎大学」（平成21年3月7日～15日）

平成22年2月1日

熱帯医学研究所 所長 平 山 謙 二

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧 平成20年度（2008）

目 次

総合目標

長崎大学熱帯医学研究所位置図

序

1	沿革	1
2	組織及び規模	
2. 1	組織	3
2. 2	職員	4
2. 3	経費	11
2. 4	敷地と建物	11
3	共同利用研究	
3. 1	共同研究	12
3. 2	研究集会	15
4	研究活動	
4. 1	ウイルス学分野	16
4. 2	細菌学分野	18
4. 3	原虫学分野	19
4. 4	寄生虫学分野	22
4. 5	分子疫学分野－外国人客員	23
4. 6	臨床医学分野（熱研内科）	23
4. 7	感染生化学分野	25
4. 8	病理学分野	26
4. 9	エイズ・感染防御分野	28
4. 10	生態疫学分野	29
4. 11	国際保健学分野	31
4. 12	国際健康開発政策学分野	33
4. 13	病害動物学分野	35
4. 14	免疫遺伝学分野	37

5	附属施設	
5. 1	アジア・アフリカ感染症研究施設	40
5. 2	熱帯性病原体感染動物実験施設	40
5. 3	熱帯医学ミュージアム	44
5. 4	共同研究室	44
6	特別事業費による事業	
6. 1	グローバルCOEプログラム	47
6. 2	熱帯医学研修課程	49
6. 3	ケニアプロジェクト拠点	52
6. 4	ベトナムプロジェクト拠点	55
6. 5	フィジープロジェクト拠点	58
7	外部資金による研究	
7. 1	文部科学省科学研究費補助金（平成20年度）	62
7. 2	厚生労働省科学研究費補助金（平成20年度）	63
7. 3	受託研究費等（平成20年度）	64
8	海外活動	66
9	外国人研究者の受け入れ	
9. 1	熱帯医学研究コース	80
9. 2	平成20年度に受け入れた外国人研究者	82
10	研究成果の発表状況	
10. 1	研究業績	84
10. 2	学会発表演題	95
10. 3	国際会議における研究発表	109
10. 4	報告書等印刷物	120
11	講演会	
11. 1	熱帯医学研究所における所外講師による講演	122
11. 2	熱帯医学研究所教員による講演	125
12	主要な研究設備	130
13	刊行物	131

1 沿革

昭和17年 3 月	長崎医科大学附属東亜風土病研究所設立	昭和55年 3 月	本館の第二次増築竣工
昭和20年 8 月	原爆投下により研究所建物及び研究資料消失	昭和58年 4 月	国際協力事業団（JICA）の集団研修コース「熱帯医学研究コース」開設
昭和21年 4 月	長崎医科大学風土病研究所に改称	昭和59年 4 月	原虫学部門の増設
昭和21年 5 月	諫早市に移転し，研究活動再開	昭和60年 8 月	本館の第三次増築竣工
昭和24年 5 月	新制長崎大学に附置され，長崎大学附置風土病研究所に改称	昭和62年 4 月	病害動物学部門の増設
昭和32年 7 月	諫早大水害により，施設，機器，研究資料等に壊滅的な被害	平成元年 4 月	熱帯医学研究所は共同利用研究所に改組
昭和34年 3 月	長崎市興善町の元長崎大学医学部附属病院外来患者診療所跡に移転	平成 3 年 4 月	感染生化学部門の増設
昭和36年 3 月	長崎市坂本町に新庁舎竣工	平成 6 年 3 月	本館の第四次増築竣工
昭和36年 4 月	新庁舎に移転	平成 6 年 4 月	大部門制に改組（3 大部門12 研究分野）
昭和39年 4 月	疫学部門の増設	平成 7 年 4 月	世界の最先端の学術研究を推進する卓越した研究拠点（COE）の研究所に指定
昭和40年 4 月	寄生虫学部門の増設	平成 8 年 4 月	病原体解析部門に分子疫学分野（外国人客員分野）の新設
昭和41年 4 月	ウイルス学部門の増設	平成 9 年 4 月	附属熱帯医学資料室の廃止・転換に伴い，附属熱帯病資料情報センターの新設
昭和42年 2 月	本館の第一次増築竣工	平成13年 4 月	附属熱帯病資料情報センターの廃止・転換に伴い，附属熱帯感染症研究センターの新設
昭和42年 6 月	風土病研究所が熱帯医学研究所に改称	平成15年 3 月	本館の第五次増築（熱帯性病原体集中研究管理棟）竣工
昭和42年 6 月	熱帯医学研究所内科として，医学部附属病院に設置	平成17年 9 月	ナairoビ研究拠点 設置
昭和49年 4 月	附属熱帯医学資料室設置	平成18年 3 月	本館の改修工事竣工
昭和49年 4 月	病原細菌学部門の増設	平成20年 4 月	附属熱帯感染症研究センターの廃止・転換に伴い，附属アジア・アフリカ感染症研究施設及び熱帯医学ミュージアムの新設
昭和53年 3 月	感染動物隔離実験棟竣工		
昭和53年 4 月	防疫部門（客員部門）の新設		
昭和53年 4 月	熱帯医学研修課程の新設		
昭和54年 4 月	感染動物隔離実験棟が熱帯性病原体感染動物実験施設に昇格		

歴 代 所 長

(長崎医科大学附属東亜風土病研究所)

角	尾	晋	自 至	昭和17年 (1942) 昭和20年 (1945)	5月4日 8月22日
古	屋	宏	自 至	昭和20年 (1945) 昭和23年 (1948)	12月22日 1月23日
高	瀬	清	自 至	昭和23年 (1948) 昭和23年 (1948)	1月24日 8月31日
登	倉	登	自 至	昭和23年 (1948) 昭和24年 (1949)	9月1日 5月30日

(長崎大学風土病研究所)

登	倉	登	自 至	昭和24年 (1949) 昭和33年 (1958)	5月31日 8月31日
大	森	南三郎	自 至	昭和33年 (1958) 昭和38年 (1963)	9月1日 11月30日
福	見	秀雄	自 至	昭和38年 (1963) 昭和42年 (1967)	12月1日 5月31日

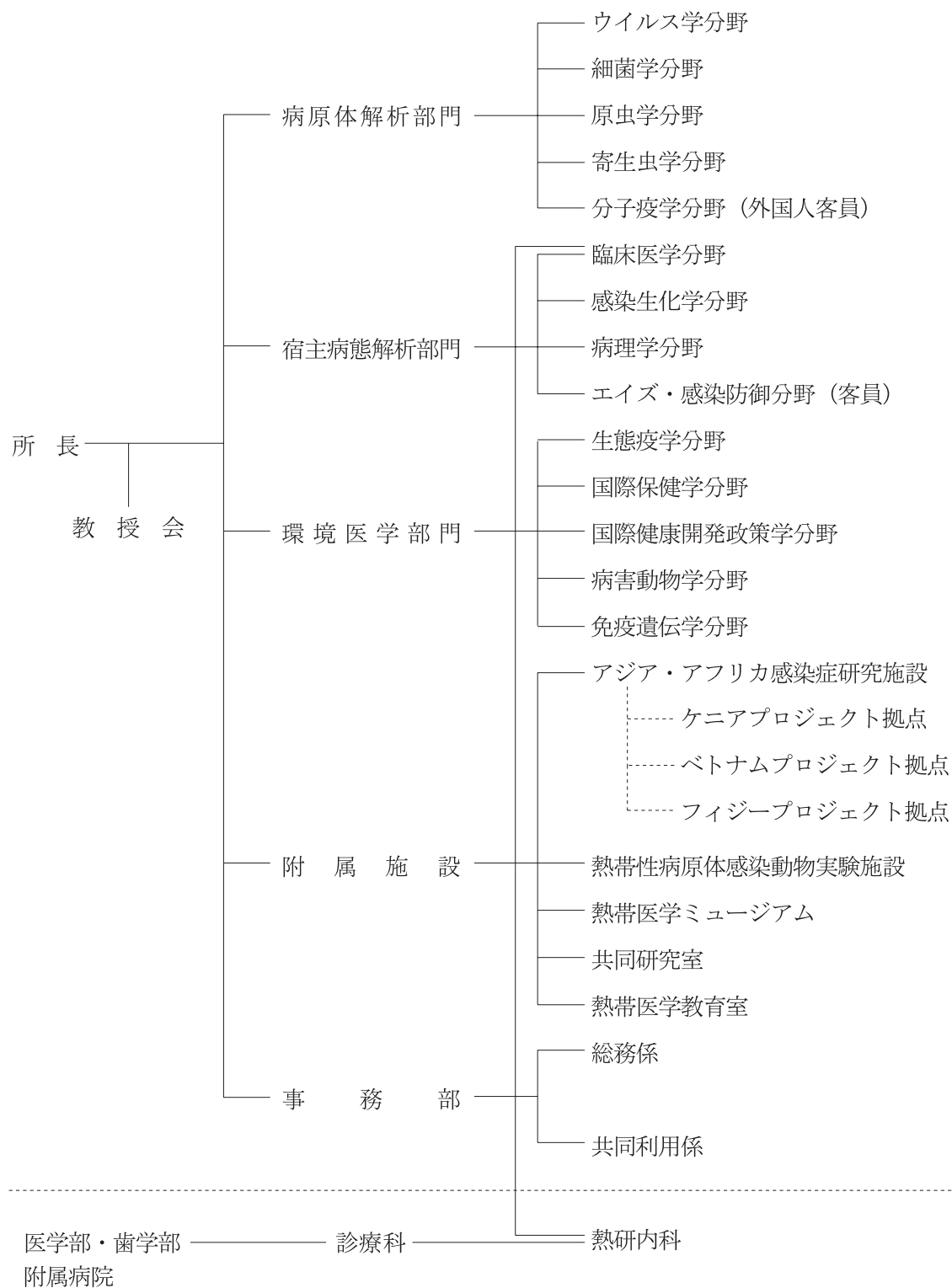
(長崎大学熱帯医学研究所)

福	見	秀雄	自 至	昭和42年 (1967) 昭和44年 (1969)	6月1日 11月30日
片	峰	大助	自 至	昭和44年 (1969) 昭和48年 (1973)	12月1日 11月30日
林		薫	自 至	昭和48年 (1973) 昭和52年 (1977)	12月1日 11月30日
内	藤	達郎	自 至	昭和52年 (1977) 昭和54年 (1979)	12月1日 11月30日
片	峰	大助	自 至	昭和54年 (1979) 昭和56年 (1981)	12月1日 4月1日
松	本	慶藏	自 至	昭和56年 (1981) 平成3年 (1991)	4月2日 4月1日
板	倉	英吉	自 至	平成3年 (1991) 平成5年 (1993)	4月2日 4月1日
小	坂	光男	自 至	平成5年 (1993) 平成9年 (1997)	4月2日 4月1日
五十嵐		章	自 至	平成9年 (1997) 平成13年 (2001)	4月2日 3月31日
青	木	克己	自 至	平成13年 (2001) 平成19年 (2007)	4月1日 3月31日
平	山	謙二	自 至	平成19年 (2007) 現	4月1日 在

2 組織及び規模

2.1 組織

平成20年4月1日



2. 2 職 員

平成20年4月1日

1) 定員内職員

区 分	教 員						そ の 他 の 職 員	合 計
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	計		
現 員	(7) 11	(2) 4	3	(9) 16	3	(18) 37	(8) 8	(26) 45

※ () は有期雇用職員で外数

2) その他の職員

非常勤講師 20名 外国人研究員(客員教授) 1名 客員教授 1名
 客員准教授 1名 産学官連携研究員 5名 プロジェクト研究員 1名
 科学研究費補助金技術支援員 1名 研究支援員 1名
 研究支援推進員 7名 研究機関研究員 1名 事務補佐員及び技能補佐員 28名

3) 教職員・大学院学生等氏名

平成20年4月1日 現在

所	長 (命)教 授	医 学 博 士	平 山 謙 二
副 所 長	(命)教 授	医 学 博 士	高 木 正 洋
ウ イ ル ス 学 分 野	教 授	医 学 博 士	森 田 公 一
	教授(有期雇用)	医 学 博 士	山 城 哲
	(兼)教 授		長 谷 部 太
	准教授(有期雇用)	医 学 博 士	マリア デル カルメン パルケット
	助 教	獣 医 学 博 士	井 上 真 吾
	(兼)助 教		久 保 亨
	助教(有期雇用)	医 学 博 士	余 福 勲
	助教(有期雇用)	農 学 博 士	鍋 島 武
	助教(有期雇用)	医 学 博 士	上 地 玄 一 郎
	技 能 補 佐 員		城 臺 和 美
	研究支援推進員		山 口 知 美
	事務職員(有期雇用)		メ ル バ ギ ダ ヤ
	事 務 補 佐 員		増 田 美 紀
	大 学 院 生		木 下 一 美
	大 学 院 生		ギィエルモ ポサダス ヘッラ
	大 学 院 生		ディン テュアン デュク
	大 学 院 生		ムラオ ライア アニー エスパード
	大 学 院 生		グエン ドングツウ
	大 学 院 生		岡 本 健 太
	大 学 院 生		吉 川 亮

細菌学分野	教 授	農 学 博 士	平 山 壽 哉
	講 師	理 学 博 士	和 田 昭 裕
	助 教 員	医 学 博 士	江 原 雅 彦
	技 術 職 員		岩 見 守
	研 究 支 援 員	医 学 博 士	久 恒 順 三 代
原 虫 学 分 野	技 術 支 援 員		前 田 香
	教 授	医 学 博 士	金 子 修
	講 師	薬 学 博 士	上 村 春 樹
	助 教	医 学 博 士	中 澤 秀 介
	助 教	薬 学 博 士	矢 幡 一 英
	助教(有期雇用)	P h D	リチャード カレトン
	技 能 補 佐 員		木 下 美 紀
	大 学 院 生		紗羅知 明子 クリスティーナ
	大 学 院 生		津 守 陽 子
寄 生 虫 学 分 野	大 学 院 生		モラコット カエタマソーン
	教 授	医 学 博 士	青 木 克 己
	助 教	医 学 博 士	渡 部 幹 次
	助 教 員	医 学 博 士	三 井 義 則
	技 術 職 員		三 浦 光 政
	技 能 補 佐 員		富 永 佐 登 美
	研 究 支 援 推 進 員		林 田 昌 子
	大 学 院 生		大 木 智 春
	大 学 院 生		阿 部 眞 由 美
分 子 疫 学 分 野	外国人研究員(客員教授)	医 学 修 士	陳 紅 根
	事 務 補 佐 員		小 松 要
臨 床 医 学 分 野	教 授	医 学 博 士	有 吉 紅 也
	教授(有期雇用)	医 学 博 士	野 内 英 樹
	准 教 授	医 学 博 士	森 本 浩 之 輔
	助 教	医 学 博 士	宮 城 啓
	助教(有期雇用)	医 学 博 士	吉 田 レイ ミント
	助教(有期雇用)	医 学 士	鈴 木 基
	助 手		渡 邊 貴 和 雄
	研究機関研究員		陳 蒙
	技 能 補 佐 員		切 江 満 代
	技 能 補 佐 員		白 水 里 奈

	事務補佐員			野	川	理	加
	大学院生			土	屋	菜	歩
	大学院生			ブ	ティ	トゥ	フォン
	大学院生			森		正	彦
	大学院生			山	下	嘉	郎
	大学院生			大	池	貴	行
	大学院生			鋤	崎	利	貴
	大学院生			興	座	嘉	康
	大学院生			大	間	敬	太
感 染 生 化 学 分 野	教 授	医 学 博 士	中	村	三	千	男
	准 教 授	医 学 博 士	栗	林			太
	助 教 員	医 学 博 士	藤	井	仁		人
	技 能 補 佐 員		田	中	香		苗
病 理 学 分 野	助 教 員	医 学 博 士	千	馬	正		敬
	大 学 院 生		入	江	寿	美	子
診 療 科	科 長 (命) 教 授	医 学 博 士	有	吉	紅		也
(熱 研 内 科)	副 科 長 (命) 准 教 授	医 学 博 士	森	本	浩	之	輔
	講 師	医 学 博 士	土	橋	佳		子
	助 教 員	医 学 博 士	古	本	朗		嗣
	助 教 員	医 学 博 士	石	田	正		之
	医 員		小	山	和	由	彦
	医 員		寺	田	真		美
	医 員		原	田	義		高
	医 員		田	中	健		之
	医 員		松	木			啓
	医 員		氏	家	無		限
	助 教 員		本	田	章		子
	事 務 補 佐 員		市	瀬	久		美
エイズ・感染防御分野	客 員 教 授	医 学 博 士	山	本	直		樹
	客 員 准 教 授	理 学 博 士	佐	藤	裕		徳
	助 教 員	医 学 博 士	久	保	嘉		直
	技 能 補 佐 員		山	谷	尚		美
生 態 疫 学 分 野	教 授		嶋	田	雅		暁
	教授(有期雇用)		堀	尾	政		博

	教授(有期雇用)			金 子 聰
	教授(有期雇用)			一 瀬 休 生
国 際 保 健 学 分 野	教 授	保 健 学 博 士	山 本 太 郎	
	准 教 授	医 学 博 士	本 田 純 久	
	助 教	医 学 博 士	砂 原 俊 彦	
	助 教	医 学 博 士	橋 爪 真 弘	
	研究支援推進員		崎 谷 恭 子	
	技 能 補 佐 員		江 口 克 之	
	事 務 補 佐 員		白 石 さ つ き	
	大 学 院 生		駒 澤 大 佐	
	大 学 院 生		赤 羽 桂 子	
	大 学 院 生		Kounnavong Sengchanh	
国 際 健 康 開 発 政 策 学 分 野	教 授	医 学 博 士	溝 田 勉	
	助 教	工 学 博 士	後 藤 健 介	
	助 教	医 学 博 士	依 田 健 志	
	研究支援推進員		牛 谷 梨 恵	
	技 能 補 佐 員		中 山 栄 美	
	大 学 院 生		峰 松 和 夫	
	大 学 院 生		畑 岸 悦 子	
	大 学 院 生		浜 田 芳 樹	
	大 学 院 生		Mgaywa Gilbert Mjunga Damas Magafu	
	大 学 院 生			
病 害 動 物 学 分 野	教 授	医 学 博 士	高 木 正 洋	
	教授(有期雇用)	理 学 博 士	皆 川 昇	
	講 師	医 学 博 士	川 田 均	
	助 教	医 学 博 士	比 嘉 由 紀 子	
	助教(有期雇用)	学 術 博 士	角 田 隆	
	産学官連携研究員	地球環境科学博士	高 野 宏 平	
	プロジェクト研究員	農 学 博 士	二 見 恭 子	
	事 務 補 佐 員		上 野 俊 子	
	研究支援推進員		園 田 友 理	
	事 務 補 佐 員		酒 本 淳 子	
	大 学 院 生		前 川 芳 秀	
	大 学 院 生		杉 浦 正 昭	
	大 学 院 生		都 築 謙 中	
	大 学 院 生			
免 疫 遺 伝 学 分 野	教 授	医 学 博 士	平 山 謙 二	

	教授(有期雇用)	医学博士	安波道郎
	准教授	医学博士	大渡伸
	(兼)講師	医学博士	菊池三穂子
	助教	学術博士	グエン フィ ティエン
	助教(有期雇用)	医学博士	柴田宏樹
	産学官連携研究員	医学博士	シュアイブ モハマド ナシル
	産学官連携研究員	医学博士	パンデイ キショール
	技能補佐員		早嶋順子
	技能補佐員		堀江仁美
	技能補佐員		丈下真紀
	事務補佐員		岡本麻貴子
	大学院生		高木明子
	大学院生		エクラス ハメド アデル ハーフィズ アドゥ
	大学院生		グエン ティ フォン ラン
	大学院生		山崎朗子
	大学院生		ヘレッシベ ギデオン コフィ
	大学院生		エデルロイザ セレグレ メンドゥーサ
	大学院生		デルプエルト ロダス ラモナ フロレンシア
	大学院生		トラン ティ グオック ハ
アジア・アフリカ感染症 研究施設 (ケニア拠点)	拠点リーダー(命)教授	医学博士	嶋田雅暁
	教授(有期雇用)	医学博士	一瀬休生
	教授(有期雇用)	理学博士	皆川昇
	教授(有期雇用)	医学博士	金子聰
	教授(有期雇用)	医学博士	堀尾政博
	事務職員(有期雇用)		本田志保子
	プロジェクト研究員	農学博士	二見恭子
アジア・アフリカ感染症 研究施設 (ベトナム拠点)	拠点リーダー(命)教授	医学博士	森田公一
	教授(有期雇用)	医学博士	山城哲
	(兼)教授(有期雇用)		長谷部太
	教授(有期雇用)	医学博士	野内英樹
	助教(有期雇用)		角田隆
	助教(有期雇用)		鈴木基
	助教(有期雇用)		上地玄一郎
	事務職員(有期雇用)		古矢佳男
	秘書		ブイ テウー チャ
	助教(有期雇用)		アラム モハメッド マハブブ

	産学官連携研究員	医 学 博 士	滝	沢	直	己
	産学官連携研究員	社 会 医 学 博 士	佐	藤	尊	範
アジア・アフリカ感染症 研 究 施 設 (フィジー拠点)	拠点リーダー(命)教授	医 学 博 士	森	田	公	一
	(兼)教授(有期雇用)		神	谷	保	彦
	准教授(有期雇用)	M a s t e r	塚	越	達	彦
	技 術 職 員		笹	川	健	造
	事 務 職 員		大	澤		裕
熱帯医学ミュージアム	館 長		平	山	謙	二
	教授(有期雇用)		堀	尾	政	博
	研究支援推進員		荒	木	一	生
	技 能 補 佐 員		須	田	清	美
	事 務 補 佐 員		清	水	洋	治
熱帯性病原体感染動物 実 験 施 設	施設長(命)教授	医 学 博 士	中	村	三 千 男	
	助 手	医 理 農 医 科 学 学 修 主 主 主	柳		哲	雄 子
	技 能 補 佐 員		川	嶋	順	
共 同 研 究 室	室長(命)教授	医 学 博 士	森	田	公	一
	助 手		一 ノ	瀬	昭	豊
	研究支援推進員		千	葉	多 賀	子
非 常 勤 講 師	大分大学・教授		牧	野	芳	大
	琉球大学・教授		森		直	樹
	長崎県環境保健研究センター・ 専 門 研 究 員		吾	郷	昌	信
	千葉大学・教授		野	田	公	俊
	おおり医院・院長		大	利	昌	久
	三和中央病院・部長		坂	本		信
	長崎大学医歯薬学 総合研究科・教授		由	井	克	之
	赤司医院・院長		前	川	知	之
	東京都立墨東病院・部長		大	西	健	児
	大阪大学・教授		大	石	和	徳
	亀田総合病院・部長		岩	田	健 太	郎
	長崎大学医歯薬学 総合研究科・教授		増	崎	英	明
	東京医科歯科大学・教授		太	田	伸	生
	国立国際医療センター研究所・部長		狩	野	繁	之
	スウェーデンカロリンスカ研究所・准教授		金	子		明
	大阪市立大学・教授		脇	村	孝	平

事 務 部	群馬大学・准教授 外務省国際協力局 国際緊急援助室・室長										中 佐 鈴 門	澤 野 木 司	浩 和	港 明 博 彦	
	総合地球環境学研究所・教授														
	事 務 長	事 務 職 員	古 林	川 田	俊 武	博 信									
	総 務 係 長	事 務 職 員	山 村	友 直	佳 幹										
	総 務 主 任	事 務 職 員	長 橋	友 口	佳 文	織 子									
	総 務 主 任	事 務 職 員	橋 本	田 宅	文 志	保 子									
	総 務 係 員	事 務 職 員	大 石	川 理	志 直	陽 恵									
	総 務 係 員	事 務 職 員	太 田	田 悦	直 純	美 世									
	総 務 係 員	C O E 事 務 員	内 末	田 永	悦 純	世 子									
	総 務 係 員	事 務 補 佐 員	松 山	尾 下	明 み	日 ゆ									
	総 務 係 員	事 務 補 佐 員	山 長	谷 川	み い	ゆ づ									
	総 務 係 員	事 務 補 佐 員	野 松	川 本	英 由	み 光									
	共同利用係長	事 務 職 員													
	共同利用係員	事 務 補 佐 員													

2. 3 経 費

年度別歳出決算額

年度 \ 区分	人 件 費	物 件 費	合 計
平 成 11 年	471, 498, 613 円	307, 109, 233 円	778, 607, 846 円
〃 12 年	450, 088, 155	307, 804, 552	757, 892, 707
〃 13 年	448, 975, 931	443, 188, 323	892, 164, 254
〃 14 年	436, 287, 495	446, 435, 378	882, 722, 873
〃 15 年	436, 856, 514	329, 800, 442	766, 656, 956
〃 16 年	566, 026, 173	352, 687, 470	918, 713, 643
〃 17 年	513, 548, 151	483, 922, 022	997, 470, 173
〃 18 年	511, 113, 217	468, 421, 412	979, 534, 629
〃 19 年	497, 314, 948	371, 067, 760	868, 382, 708
〃 20 年	504, 882, 109	415, 336, 115	920, 218, 224

2. 4 敷地と建物

所在地 長崎市坂本1丁目12-4

敷 地 長崎大学医学部構内 3,305m²

建 物

建 物 名 称	構 造	建面積(m ²)	延面積(m ²)	備 考
本 館	鉄筋コンクリート 3 階, 一部 4 階建	1,763	6,454	昭和36. 3 建築 昭和42. 2 増築 昭和55. 3 増築 昭和60. 8 増築 平成6. 3 増築 平成18. 3 改修
熱帯性病原体 集中研究管理棟	鉄筋コンクリート 4 階 建	329	1,328	平成15. 3 建築
熱帯性病原体 感染動物実験 施 設	鉄筋コンクリート 3 階 建	190	490	昭和53. 3 建築 昭和63. 3 増築
薬 品 庫	ブ ロ ッ ク 建	20	20	昭和47. 3 建築
保 管 庫	プレハブハウス	133	133	平成16. 3 建築
計		2,435	8,425	

3 共同利用研究

3. 1 共同研究 (◎は研究代表者)

1. ベトナムにおける地理情報システム (GIS) と出生情報を活用した地域データベース構築

長崎大・熱研	◎野内 英樹, 高木 正洋, 後藤 健介
新潟大・国際保健	鈴木 宏
順天堂大・医	丸井 英二
立命館アジア太平洋大・アジア太平洋学部	谷村 晋
ベトナム保健省衛生疫学研	Dang Duc Anh, Vu Dinh Thiem
東京大・医 大学院生	大田 えりか

2. ケニアに於ける非中間宿主員のミラシジウム誘引力を利用した新しい住血吸虫対策法, 図 員の開発

鹿児島大・多島圏研究センター	◎野田 伸一
福岡大・医学部	波部 重久
長崎大・熱研	青木 克己

3. サルモネラ・エンテロトキシンの多型と下痢原性発現機構の解明

長崎大・熱研	◎平山 壽哉
帯広畜産大・畜産学部	倉園 久生, 山崎 英樹
千葉大・医学研究院	野田 公俊
大阪府立大・生命環境科学研究科	山崎 伸二
長崎大・工学部	畠山 智充
マヒドール大・熱帯医学部	マナス・コンサヌアン

4. ヒトgp91^{phox}の構造と機能の相互解析とその応用

長崎大・熱研	◎栗林 太, 前川 知之
東京大・医科学研	大海 忍
ファルマアクセスKK	勝部 幸輝, 濱田 賢作
長崎大・共同研究交流センター	真木 俊英

5. Establishment of a rodent malaria isolate library at NEKKEN

長崎大・熱研 ◎カレトン・リチャード・レイトン
エジンバラ大・免疫・感染症研究所 カーター・リチャード

6. 中国の住血吸虫症の予防および慢性合併症対策に関する共同研究

東京医科歯科大 ◎太田 伸生
産業医科大 金澤 保
江蘇省寄生虫病研 Yu Chuanxin
浙江省医学アカデミー寄生虫病研 Lu Shaohong
順天堂大 奈良 武司
東京医科歯科大・大学院生 関 丈典
国立秩父学園 池田 正行
長崎大・外国人客員研究員 ソウ ウットモン
長崎大・国際研究戦略本部 菊池 三穂子
長崎大・熱研 平山 謙二

7. 肝細胞期マラリア原虫の培養系の確立

長崎大・熱研 ◎金子 修, 矢幡 一英,
カレトン・リチャード・レイトン
在タイ米国防軍医学研究所 Jetsumon Sattabongkot, Ratawan Ubalee,
Chakri Kiattibutr
長崎大・医 大学院生 津守 陽子

8. 14-3-3分子結合能を有するトリパノソーマ原虫新規プロテイン フォスファターゼの分子機構の解明及び薬剤ターゲットとしての可能性の検討

久留米大・医学部 ◎井上 雅広
University of Edinburgh Achim Schnauffer
Institute of Immunology & Infection Research

9. ヘリコバクター・ピロリのVacA毒素の多型と毒性発現

長崎大・熱研 ◎平山 壽哉
長崎大・医 磯本 一
神戸大・医学研究科 東 健

10. デングウイルス感染阻害物質の検索

長崎大・熱研

◎森田 公一

静岡県立大・薬

鈴木 隆, 左 一八

琉球大・医

只野 昌之

国立感染症研究所

高崎 智彦

11. 寄生原虫の宿主適応と遺伝子発現

長崎大・熱研

◎上村 春樹

関西医科大・医学部

藤井 茂

久留米大・医学部

井上 雅広

12. マラリア原虫におけるインスレーター領域の同定と応用

長崎大・熱研

◎矢幡 一英, 金子 修

理化学研究所

前島 一博

3. 2 研究集会

1. 医学研究における倫理に関する国際セミナー

開催日：平成20年6月30日～7月2日

場 所：長崎大学熱帯医学研究所（長崎大学ポンペ会館）

代表者：免疫遺伝学分野 平山 謙二

コースディレクター：Reidar Lie(ベルゲン大学), 松井健志(東京大学), 平山謙二(熱研)

発表者：(1) 医学研究の倫理とは。その歴史的背景と原理

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

(2) 研究への参加の意思決定：インフォームドコンセント

東京大学 助 教 松井 健志

(3) 保存された組織サンプルの研究

NIH 部 長 David Wendler

東京大学 助 教 松井 健志

(4) リスクと利益の評価

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

(5) 小児あるいは社会的な弱者を対象にした研究の倫理

国立成育医療センター 室 長 中村 秀文

NIH 部 長 David Wendler

(6) 臨床研究と日常診療の境界

東北大学 田代 志門

(7) 治験システムと倫理審査委員会

昭和大学 内田 英二

(8) 報酬と勧誘

韓国ウルサン大学 准教授 Young-Mo Koo

(9) 薬理遺伝学と倫理

東京大学 教 授 津谷 喜一郎

(10) コミュニティー基盤研究と倫理

長崎大学・熱研 教 授 平山 謙二

(11) 国際共同研究における倫理問題、標準的な治療、研究が終わった後の利益

ベルゲン大学 教 授 Reidar K. Lie

4 研究活動

4. 1 ウイルス学分野

I. 熱帯ウイルス病の疫学研究

- 1) 日本脳炎ウイルスが、東南アジアと東アジアの大陸部から日本へ伝播する、という仮説を立て、アジアの日本脳炎ウイルスの生態行動を明らかにする研究を行っている。日本とベトナムにおいて日本脳炎ウイルスを分離し、遺伝子解析の手法によりサブクラスターに分類した。それぞれのクラスターのウイルスが見つかった場所と年を地図上にプロットしたところ、ベトナムと中国南部の日本脳炎ウイルスが、中国内陸部と東沿岸部、さらに日本へ飛来していることを示唆する結果が得られた (Nabeshima, et. al., *J Gen Virol.* 2009)。
- 2) ネパールではデングウイルス感染症に関するデータが少ない。そこで、今後同国においてデングウイルス感染症の制御計画が作成される時に備えて、2006年以降、Tarai地方の感染状況に関し、血清疫学的研究を行っている。2008年度は、同地方の8つの病院で、デングウイルス感染症の疑いのある入院患者と外来患者の双方から、355体の血清標本を採り、そのうちの230標本についてIgM捕捉ELISA法による実験室診断を行った。
- 3) ミャンマーの重症デングウイルス感染症の特徴を明らかにするため、ウイルス分離とウイルス感染の血清学的研究を継続した。
- 4) ベトナム・ホーチミン市のデング出血熱患者から、表現型の異なる2種類のデング熱ウイルス2型が同定された。この患者の体内で、異なる細胞指向性を持つ2種類の株の2型ウイルスが循環していることが明らかになった。さらに、1種類の株がある特定の細胞において、もう一方より優位に数が多くなるということから、蚊と人間の間で、ウイルスの個体数の切り替わりが起こっていることが示唆された。
- 5) フィリピンで2006-2007年にデング熱患者から採取した血液から、フローサイトメリー法により感染細胞を同定した。予備的研究では、CD19+とCD16+細胞はデングウイルス抗原陽性であった。さらに、ウイルスの特徴解析を行ったところ、5種類の3型ウイルスを同定した。シーケンスを継続している。
- 6) ケニア西部において、黄熱の現状を調べるため、血清学的サーベイランスを行った。その結果、調査対象人口の約3%の人の血清が過去の罹患を示し、現地で風土病的に黄熱が存在することが明らかになった。
- 7) ベトナムで見られる原因不明の季節性の脳炎に、バンナウイルスとナムディンウイルスがなんらかの関係を持つのかどうかを明らかにするため、ヒトの血清学的サーベイランスを目的として、両方のウイルスについて単一クローン株を得た。これを精製濃縮し、マウ

スへの感染力と病原性試験を行った。さらに、血清学的試験のため、ウサギ抗体を作成した。現在、哺乳類由来の細胞系への感染性試験を行っている。

- 8) ベトナムにおいて、コウモリを対象に、ELISA法と血清中和試験による、SARSコロナウイルスとニパウイルスの血清学的サーベイランスを行っている。2008年度は、Hoa Binh地方の住民に対して質問紙調査を行い、コウモリ・ハンター、食堂でコウモリを調理する料理人、およびコウモリ肉と血液を食する客のリスク評価を行った。その結果、コウモリ・ハンターはコウモリの体液、尿、糞便に直接触れ、コウモリから咬まれ、また引っかかることがあるので、コウモリからの感染リスクに暴露されていることが分かった。

II. ウイルス学的研究

- 1) フラビウイルス複製において、ウイルスおよび宿主の果たす役割とお互いの関係について研究した。第一の目的は、非構造的タンパク質NS1の役割を明らかにすること、さらに第二の目的は、フラビウイルス感染時のウイルス-宿主の間の相互作用を調べることである。第一の点については、日本脳炎ウイルスとデングウイルスNS1が細胞内局在をしており、それゆえ、異なって処理されている、或いは異なった機能を持つのではないかという示唆が得られた。第二の点については、LLCMK2細胞系の病巣形成について日本脳炎とデングウイルスとは対照的な性質を持つことが明らかになった。デングウイルスが大きな病巣を形成するのに対し、日本脳炎ウイルスはこの細胞系での病巣形成は限定的であった。
- 2) K562細胞系クローンからのデングウイルス2型の感受性レセプターの同定を行っており、数個の関連分子を同定した。
- 3) 日本脳炎ウイルスの全長cDNAクローン形成と部位特異的突然変異誘発法による解析を行った。

III. WHO協力センターとしての活動

- 1) 2005年2月に始まった、独立行政法人国際協力機構(JICA)の大洋州諸国の予防接種強化事業である、「Japanese support to the Pacific Immunization Programme Strengthening (J-PIPS)」における技術実施機関としてWHOと協力しており、このプロジェクトにおいて当研究分野の森田公一教授はチーフ・アドバイザーを勤め、定期的に現地を訪れてプロジェクトの進行に積極的に関与した。
- 2) 2008年2月25日から29日まで長崎市において、WHO西太平洋事務局と共催で、第一回GOARN National Training Course by WHO/WPRO and Nagasaki Universityを開催した。この研修には、6カ国から21人の参加者が参加した。
- 3) 2008年6月17日から19日までオーストラリアで、WHO西太平洋地域のGlobal Outbreak

Alert and Response Network(GOARN) Partners会議が開かれ，森田公一教授が参加した。

4. 2 細菌学分野

細菌学分野は熱帯地に蔓延または熱帯地から伝播される細菌感染症とその原因細菌に関する研究，とくに感染成立に関与する種々の病原因子の研究を展開している。

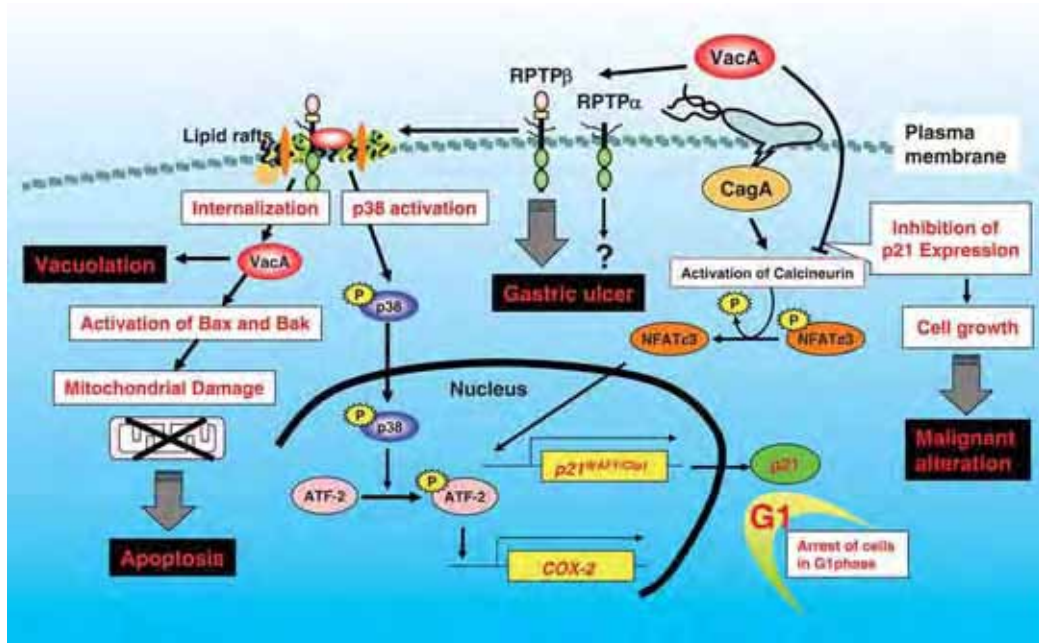
- 1) ヘリコバクター・ピロリは消化性潰瘍，MALTリンパ腫，胃癌などの原因細菌であり，熱帯地域を含む発展途上国においては20歳前に約80%のヒトが感染している。本菌の病原性について，空胞化毒素VacAおよび4型分泌装置で宿主に注入されるエフェクター分子，CagAの感染における役割を解析している。

VacAは空胞変性のみならずミトコンドリア障害(1)によるアポトーシス(2)など多様な毒性を発揮する。とくに細胞接着に重要なGit 1のリン酸化(3)およびp38MAPキナーゼ / ATF-2経路の活性化は空胞変性とは関係しない(4)。VacAの宿主受容体蛋白は2種の受容体型チロシンフォスファターゼ (RPTP α と RPTP β) である事を明らかにした(5, 6, 7)。興味深いことにVacAが胃炎や胃潰瘍などの胃粘膜障害を引き起こすためにはRPTPとの結合が必須である(3)。VacAが上記の毒性を発現するためには受容体との結合を介して脂質ラフトに集積することが必要であることも分かった(8)。とくにVacAによるp38MAPキナーゼ / ATF-2経路の活性化はCOX-2の発現を促しPGE2の産生を促進することが判明した(9)。

加えて，本菌感染時に，VacAおよびCagAが宿主転写因子(ATF-2やNFAT)の本来の機能を攪乱することが分かっている(10)ので，これら病原因子の相互作用を調べている。

(参考文献：(1) Microb. Pathog. 31:29-36, 2001, (2) J. Biol. Chem. 281, 11250-11259, 2006, (3) Nat. Genet. 33:375-381, 2003, (4) J. Biol. Chem. 279, 7024-7028, 2004, (5) J. Biol. Chem. 278:19183-19189, 2003, (6) J. Biol. Chem. 279:51013-51021, 2004, (7) Cell Microbiol 7, 1285-293, 2005, (8) Infect Immun. 74, 6571-6580, 2006, (9) Infect Immun. 75, 4472-4481, 2007, (10) Proc. Natl. Acad. Sci. USA. 102, 9661-9666, 2005.)

- 2) コレラ菌線毛がワクチンとして有効であるかを調べている。



ヘリコバクター・ピロリが産生するVacA毒素の毒性発現

4. 3 原虫学分野

金子修が教授として着任して2年目を迎えた。モラコット・カエタマゾーンが4月から大学院博士課程に入学した。6月に唐建霞が産学官連携研究員として、7月にティップワン・スンカポンが外国人客員研究員、朱晓彤が研究支援員として分野に参加した。10月からジーン・アレキサンダーが大学院博士課程に入学し、また、芳本忠教授を指導教員として生命薬科学専攻修士課程に入学したジョー・ムトゥンギが、当分野にて共同研究を開始した。熱帯医学修士課程学生のパンパディット・サンサヤラート、河越なぎさ、五十棲理恵が当分野に配属された。12月には坂口美亜子が客員研究員として分野に参加した。一方、キショール・パンディーは平成20年3月に博士課程を修了し、唐建霞は3月末に帰国した。

I. マラリアに関する研究

1) マラリア原虫の赤血球侵入分子機構

感染赤血球表面とメロゾイト表面に局在していたSURFIN_{4.2}とは異なり、SURFIN_{4.1}が主としてメロゾイト表面に局在していることを見出し、この分子がメロゾイトの赤血球侵入にも関与している可能性を提唱した (Malaria J 7:116. 2008/Jul)。また、赤血球侵入型メロゾイトのロプトリー頸部に局在するタンパク質であるRON 2 がワクチン候補抗原であるAMA1 と複合体を形成することを明らかにした (Parasitol Int 58:29-35. 2009/Mar)。スンカポンは、

SURFIN相同体である三日熱マラリア原虫PvSTPについて、流行地三日熱マラリア患者の血清の組換えPvSTPタンパク質への反応性を解析し、第78回日本寄生虫学会大会（東京、2009/Mar）にて成果を発表した。また、コムギ胚芽無細胞タンパク質合成系により作成した組換えタンパク質により、複雑な立体構造を持つ原虫由来のタンパク質を正しく認識できる抗血清を作成することができ、この方法がマラリア原虫のタンパク質を発現することに適していることを報告した（*Infect Immun* 76(4):1702-8. 2008/Apr）。

2)新規マラリア原虫赤血球認識分子（候補）の集団遺伝学的解析

カエタマソーンは、SURFIN_{4.2}の集団遺伝学的解析の結果を9月に韓国済州島で開催されたICTM2008にて口頭で発表した。サンサヤラートはタイの流行地株を用いてSURFIN_{4.1}の集団遺伝学的解析を行った。朱は三日熱マラリア原虫PvSTP 1の多型解析を行い、第43回日米医学協力研究会・寄生虫疾患専門部会日米合同会議（東京、2009/Jan）にて成果を発表した。唐とアレキサンダーは、熱帯熱マラリア原虫SURFINの全メンバーの多型解析とRhopH 1 /Clagの多型解析の結果を第78回日本寄生虫学会大会にて発表した。

3)三日熱マラリア培養株の樹立

実用的な培養系が確立していない三日熱マラリア原虫の培養系の確立に関するプロジェクトをタイの研究者とともに継続して行った。

4)マラリア原虫の転写制御の分子基盤

矢幡はマラリア原虫の転写制御の一端を明らかにするため、インスレーター領域に着目し研究を行い、鳥類由来のインスレーター等がマラリア原虫では効果がないことを見出した。他生物のインスレーターと相同性を有する遺伝子領域がマラリア原虫ゲノムに見出されないため、マラリア原虫のインスレーターはユニークな構造を持つことが示唆された。

5)都市化がマラリア原虫集団に与える影響の研究

カレトンと津守は、アフリカで急速に進む都市化がマラリア原虫集団に与える影響について、コンゴ共和国での解析を継続している。結果の一部をICTM2008にてポスターで発表した。カレトンは、西アフリカ・中央アフリカで採集した多数のマラリア標本を検査したが、三日熱マラリア原虫の流行は認められなかった（*Malaria J* 7 : 174. 2008/Sep）。

6)マラリア原虫の薬剤治療と再燃

中澤は、マラリア原虫の薬剤治療によるreduction rateを検討した。さらに、そのreduction rateに相当する原虫数のマラリア原虫が薬剤治療によって根絶するか否か調べた。

7)マラリア原虫のガメトサイトキャリアーの検出

中澤は、熱帯熱マラリア原虫感染血液のろ紙サンプルからRT-PCRによりガメトサイト期原虫のRNAを検出する方法を構築し、発表した（*Acta Trop* 107 : 121-7. 2008/Aug）。また、熱帯熱マラリア原虫ガメトサイトの迅速診断キット開発を目的として、Pfs16の組換え

タンパク質を作成し、企業との共同研究で、Pfs16に対するモノクローナル抗体を作成した。

8) 熱帯熱マラリア原虫の薬剤耐性遺伝子の研究

カレトンはピリメサミン耐性がアフリカの複数の地域を起源とすることを見出し、報告した(J Antimicrob Chemother 63:252-5. 2009/Feb)。上村と五十棲は、東南アジアの様々な地域で採集した熱帯熱マラリア原虫標本を用いて、薬剤耐性に関する遺伝子の地域による違いの解析を行った。ベトナムの一地域における2001年から2007年の薬剤耐性に関連する遺伝子多型の変化について、五十棲が第78回日本寄生虫学会大会で発表した。

II. リーシュマニアに関する研究

パンディーは、ネパールで採集したサシチョウバエを解剖せず、体全体からサンプルを調整し、リーシュマニア原虫のDNAを検出する方法を構築した(Parasitol Res 103(2):293-7. 2008/Jul)。また、Anogeissus leiocarpus由来のCastalaginがリーシュマニア原虫に対する殺滅作用があることを明らかにした(Parasitol Res 103:1333-8. 2008/Nov)。

III. アメリカ・トリパノソーマ原虫に関する研究

Trypanosoma cruzi 原虫は生活環によって異なる構造のトランスシアリダーゼ(TS)を発現している。原虫株によって異なるが、一つの原虫がトリポマスチゴート(TCT)で発現しているTS遺伝子を120程度、メタサイクリクトリポマスチゴート(MT)で発現しているTS遺伝子を40程度も持っている。MTで発現しているTS活性は非常に低いが、原虫が哺乳動物に感染して細胞に侵入した時Parasitophorous vacuoleから逃れる際に重要である(2006年に発表)。上村はMT-TSにおけるアミノ酸置換の酵素活性との関連を調べており、発現する時の温度によって活性の異なる置換、遺伝子産物があることを認めた。先にみられたpHによって活性の異なる置換があることと一緒に考えると、MT-TSにおけるこれら種々のアミノ酸置換は、原虫が種々の環境で増殖し種々の動物に感染する際に重要であることを示唆している。

IV. 海外における研究活動

上村は熱研のケニア拠点を、中澤はベトナム拠点を利用しマラリアに関する海外共同研究を行った。金子はタイのマヒドン大学や在タイ米国陸軍医学研究所、中国の中国医科大学、江蘇省血住虫研究所、シンガポールのナンヤン工科大学とマラリアに関する共同研究を継続している。また、金子はベルンハルト・ノッホ熱帯医学研究所(6月)、カロリンスカ研究所(6月)、北京協和医学院基礎学院(9月)を訪問し将来の共同研究について協議を行った。

4. 4 寄生虫学分野

熱帯地域で猛威を振るっている糸状虫症，住血吸虫症，土壌伝播線虫症に関する研究を行った。平成20年度の研究成果を下記する。

I. 糸状虫（症）に関する研究

1) 凍結保存ミクロフィラリアを用いた糸状虫の実験室内生活環の維持法の開発

実験室内で効率的に糸状虫の生活環を維持するために，*Brugia pahangi* ミクロフィラリアの凍結保存法と蚊の人工吸血法の改良を行っている。昨年度，Lowerie (1983) 提唱のDMSOとビニールピロリドンの組み合わせ保存法により解凍後10%のミクロフィラリア生存率が得られたこと，このミクロフィラリアをRutledge (1964) の人工吸血装置により *Ae.aegypti* に摂取させると，わずかであるが感染幼虫が得られたことを報告した。20年度に凍結保存法を改良した結果，解凍後の生存ミクロフィラリア率は20%に引き上げられ，多くの感染幼虫が得られた。この感染幼虫はスナネズミへ摂取されると成虫に発育することも確認された。

2) *Brugia pahangi* 感染幼虫の走化性運動に関する研究

我々 (2003) は *Brugia pahangi* 感染幼虫が血清に対して走化性運動を示すことを報告して以来，感染幼虫に走化性運動を惹起させる物質の検索を行っている。Saferら (2007) により *Strongyloides stercoralis* 感染幼虫がurocanic acidに走化性運動を示すことが報告されたので，*B. pahangi* 幼虫がurocanic acidに走化性運動を示すか否かを観察した。*B. pahangi* 幼虫はurocanic acidに走化性運動を示した。しかしurocanic acidの溶解剤のtrisにも走化性活性がみられたので，Urocanic acidの*B. pahangi* 幼虫の誘因活力は明らかでない。

II. 住血吸虫（症）に関する研究

1) 坑住血吸虫薬の開発研究

坑マラリア剤として使用されてきたアモジアキンの坑住血吸虫効果をin vitroで調べた結果，強い坑成虫作用があることが解った。(Journal of Helminthology, 2009)

2) 新しい住血吸虫症対策法としての罔貝の研究

罔貝は中間宿主貝へ侵入するミラシジウム数を減少させるので，対策計画への住民参加率が低い開発途上国に於いては効果的な新しい対策法として期待される。ミラシジウムは中間宿主貝の分泌物に強い走化性運動を示すことから，ケニア・クワレ地区のビルハルツ住血吸虫症の流行地に生息する淡水産貝7種の分泌物へのミラシジウムの走化性運動を測定した。*Bellamya* と未同定種貝の一種の分泌物は中間宿主の *Bulinus globosus* の分泌物とほぼ同じ強力なミラシジウム誘引力を示した。これらの貝類は罔貝として利用可能かもしれない。

3) 住血吸虫症対策としての安全水供与の研究

ケニア・クワレ地区のビルハルツ住血吸虫症の流行地にNGOにより供与された安全水施設による住民の再感染阻止効果を観察した。村全体では安全水供与の効果は明らかでないが、安全水施設の近くに住む子供では再感染予防効果が観察された。800m以内に安全水施設がないと住民は川の水を使用し再感染する危険性が高まることも明らかになった。(Tropical Medicine & Health, 2009)

Ⅲ. 土壌伝播線虫（症）に関する研究

ベトナム、ハノイ郊外で野菜や生活水の土壌伝播線虫卵による汚染状況を調査した。ワサビとキュウリを除く13種の野菜が回虫など5種の虫卵に高率に汚染されていた。汚染は特に乾期に高かった。生活水（家庭や学校の生活水と池や側溝水）も7種の虫卵に汚染されていた。特に池の水は高率に汚染されていた。池の水の汚染の頻度は季節による変動はなかった。住民が人と動物の尿尿を下肥として使用することが、このように高率に人々の生活環境が寄生虫卵に汚染されている原因である。(Tropical Medicine & Health, 2009, Nepal Medical Journal, 2009)

4. 5 分子疫学分野－外国人客員

I. 住血吸虫ワクチンの開発研究

中華人民共和国江西省寄生虫病研究所の陳紅根所長が一年間滞在し、上記のタイトルにより研究を行った。中国に広く蔓延する住血吸虫症は人獣共通感染症で水牛や家ブタなどにも感染し、安定した生活環を形成している。ヒトを対象にした集団治療を繰り返してもある一定の感染率より改善させることが困難であることがこれまでに証明されている。そこでこの状況を改善するために家畜あるいはヒトを対象とするワクチン開発が期待されている。しかし、ぜん虫と言われる寄生虫に対するワクチン開発はこれまでに成功しておらず、研究者人口も極端に少ない。この状況を改善するために陳教授は、これまでに当研究所の免疫遺伝学分野で同定した不活化セルカリアワクチンの主要抗原3種のDNAワクチンを作製し、これをマウスの実験モデルで検証した。その結果、そのうちの一種が統計的に優位な防御効果を示すことを証明した。

4. 6 臨床医学分野（熱研内科）

当分野においては、呼吸器感染症とエイズにおける伝播様式や発生機序、病態生理を解明し、

その予防戦略の構築をめざして、臨床疫学および動物実験による研究を展開している。

I. 呼吸器感染症に関する研究

国内外において従来から一貫して呼吸器感染症における研究を継続している。

平成19年より、呼吸器感染症に関連する疫学研究をベトナム中部の都市ニャチャンで本格化させた。当地において従来から行っていた小児呼吸器感染症の研究において、小児咽頭拭い液から分離した肺炎球菌の53株を検討した結果、73.6%にペニシリン耐性遺伝子がされ、その多くは血清型19Fと23Fであり薬剤耐性菌の世界的拡大を確認した (Watanabe et al., 2008)。また同地において先に行われていた疫学研究と帯同し、同地における重症肺炎球菌感染症とインフルエンザ桿菌タイプb 感染症の重要性と感染症疫学研究におけるPCR法の意義を指摘した (Anh et al., 2009)。

肺炎球菌は最も重要な呼吸器起炎微生物であるが、古本らは国内臨床研究において、23価肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンを組み合わせることで、インフルエンザワクチンのみの接種と比較して、慢性閉塞性肺疾患患者の急性増悪を減少させることを見いだした。しかしこの効果は接種後2年目には消失し、23価肺炎球菌ワクチンの効果と問題点を示す結果となった (Furumoto et al., 2008)。

II. デング熱の血小板減少の機序に関する研究

デング熱の血小板減少の機序については依然不明な点が多く、当教室でも研究を続けてきた (Saito et al., 2004, Clin Exp Immunol, Dimaano et al., 2007, Am J Trop Med Hyg) が、本田らは、急性期の患者血小板は回復期においてより、有意にTHP-1細胞 (ヒト単球) に貪食されやすいことをflow cytometerを用いて示した。これにより、マクロファージにより積極的に貪食されることが同疾患における血小板減少の1つの要因であることを証明した (Honda et al., 2009)。

III. 呼吸器病学における研究

臨床面においては、2003年から参加した肺胞蛋白症の全国調査の集積データが公表された。6年間にわたり248名を調査し、これまで特発性とされていたほとんどの症例が自己免疫性であることを改めて確認し、自己免疫性肺胞蛋白症としてその疫学的特徴と共に報告した (Inoue et al., 2008)。

近年注目されている慢性閉塞性肺疾患においては、呼吸不全に伴う運動耐用能の低下が問題であるが、鋤崎らは中等症から軽症の患者において運動前の短時間作用型 β 2刺激薬が歩行距離を延長することを示し、日常生活やリハビリテーションへの応用の可能性を示唆した (Sukisaki et al., 2008)。

また、基礎研究の分野では、肺胞マクロファージのアポトーシス細胞の貪食に、サーファクタント蛋白が抑制的に働き、これがRho GTPaseを介する作用であることを共同研究によって証明した (Janssen et al., 2008)。

IV. HIV/エイズに関する研究

北タイランパン病院におけるHIV感染者コホート研究をベースに多角的側面からHIV・エイズに関する臨床疫学研究を継続している。平成20年度は、近年タイ国内に普及したジェネリック薬による抗HIV薬治療(GPOvir)を開始した407名のコホート患者を対象に追跡調査を実施し、24カ月時点における治療失敗と関連するリスク因子として、これまで報告された薬剤投与歴や薬剤服用率に加えて、薬の自己負担や子供の有無といった社会的因子が治療失敗に関与することを発表した (Tsuchiya et al., 2009)。また、少なくとも一方の配偶者がHIVに感染した夫婦を対象とし、夫婦間の性行動を含むHIV夫婦間伝搬リスクに関する横断的および縦断的研究を行った。その結果、特に結婚歴が2年以上の夫婦においてHIVに明らかに何度も暴露されながら感染していない配偶者が蓄積していることが判明した (Rojanawiwat, 2009)。

V. ベトナムにおけるバースコホート研究

上述したベトナム中部の都市ニャチャンにて、将来バースコホート研究を立ち上げる予定であるが、その準備としてベトナム人に適した妊婦の身体活動レベルを定量的に評価するシステムを完成させた [Ota et al., 2008]。

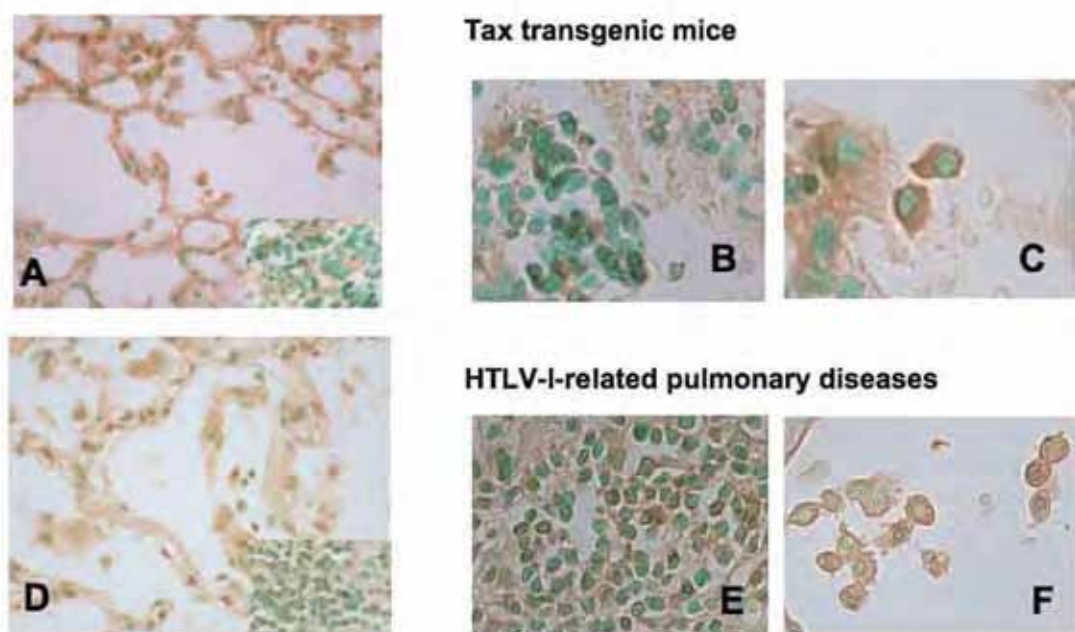
4. 7 感染生化学分野

食細胞 NADPH oxidase 遺伝子発現機構を研究する過程で偶然に発見した新規なG/TミスマッチDNA結合タンパク質 (nGTBP) が、転写因子FOXK 2である事を明らかにした。FOXK 2は一定の周辺配列を要求してG/TミスマッチDNAに選択的に結合する。FOXK 2のG/TミスマッチDNAへの結合アフィニティは、すでに報告のある転写調節領域の'マッチ'DNAへのアフィニティよりも高かった。高い選択性と親和性は、生物学的意義を強く示唆する。また、A/TおよびG/Cの脱アミノ化により生成するhypoxanthine/TおよびG/uracilにもG/Tと同等に結合した。DNAの脱アミノ化はさまざまなストレスにより高率に起きる変異である。FOXK 2によるミスマッチDNA認識の生物学的な意義は不明であるが、G/TミスマッチDNAおよび脱アミノ化DNAの修復を開始するセンサーであると予想され、修復活性への関与を検討した。

4. 8 病理学分野

I. ヒトT細胞白血病ウイルスHTLV-1は、ヒトの肺上皮細胞に感染して、サイトカイン、ケモカイン、細胞接着分子遺伝子発現の誘発に関する研究

ヒトT細胞白血病ウイルスHTLV-1は、肺疾患と関係していて、気管支肺胞の中のリンパ球増加によって特徴づけられる。これらのことは、HTLV-1のキャリアのプロウイルスのDNAと相關する。HTLV-1のTaxは、T細胞の中で炎症性サイトカインとケモカインを生産して、肺疾患の発現に関与していると考えられている。しかしながら、肺上皮細胞がHTLV-1感染によってこれらの遺伝子の誘導についてほとんど何も知られていない。我々は、肺胞上皮細胞A549と気管上皮細胞NCI-H292の細胞系をMT-2(HTLV-1に感染させたT細胞)と共培養によって、HTLV-1の感染による肺上皮細胞を研究した。細胞遺伝子の発現の変化は、逆転写-ポリメラーゼ連鎖反応法、酵素結合免疫吸着検定法と流動細胞計測法によって評価された。MT-2細胞による共培養は、結果的に肺上皮細胞に感染することを、プロウイルスのDNA、HTLV-1によるTax発現とHTLV-1によるp19の発現の検出によって確認した。感染は、さまざまなサイトカイン、ケモカインと細胞接着分子のmRNA発現の誘導と関係していた。NF- κ BとAP-1は、HTLV-1に感染した肺上皮細胞で活性化された。生体内での研究では、マウスおよびHTLV-1に感染したヒトの肺疾患患者の肺上皮細胞の中にTaxタンパク質の発現を認めた。我々の結果は、NF- κ BとAP-1の誘導を通してサイトカイン、ケモカインと細胞接着分子が産生されて、HTLV-1が肺上皮細胞に感染することを示した。これらの変化は、HTLV-1感染関連の肺疾患の臨床像の解析に貢献することができる。



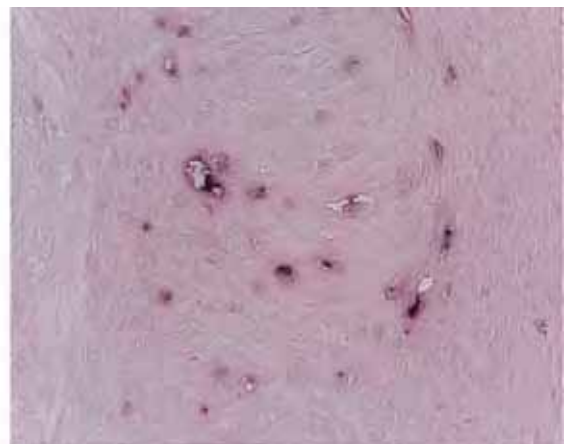
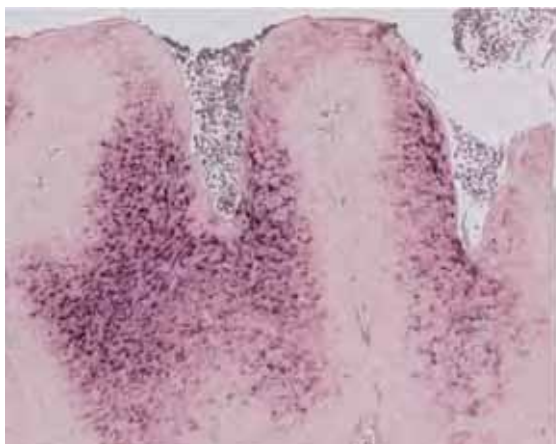
免疫組織化学法によるTaxタンパク質の検出。Taxトランスジェニックマウス (A-C) の肺組

織とHTLV-1関連した肺疾患(D-F)患者において、免疫組織化学的染色では、肺上皮細胞(A&D)の細胞質、浸潤しているリンパ球およびマクロファージの中にTaxタンパク質が発現している。

(文献：Teruya H, Tomita M, Senba M, Ishikawa C, Tamayose M, Miyazato A, Yara S, Tanaka Y, Iwakura Y, Fujita J, Mori N. Human T-cell leukemia virus type I infects human lung epithelial cells and induces gene expression of cytokines, chemokines and cell adhesion molecules. *Retrovirology*. 2008 Sep 22;5:e86 (9 pages).) IF:4.042

Ⅱ. 口腔の疣状癌とヒトパピローマウイルス感染：ウイルスのジェノタイプの分析およびp53の発現に関する研究

疣贅癌(VC)は、扁平上皮癌のまれなサブタイプで、大部分は口腔粘膜に発生する。VC腫瘍形成でヒトパピローマウイルス(HPV)の役割を明らかにするために、我々は、口腔のVCの中にHPVとp53発現の局在およびジェノタイプを検索した。我々は、23例のVCのパラフィン包埋標本を研究した。コントロールは、10例の口腔粘膜で非腫瘍性病変を用いた。HPV感染、HPVジェノタイプとp53発現を研究するために、我々は、インサイット・ハイブリダイゼーション(ISH)法、PCR・塩基配列分析法、および免疫組織化学法を用いた。23例のVC標本のうち、11例(48%)はHPV-DNA(PCR法)が存在していた。6例(26%)は、扁平上皮で核内にHPV(ISH法)が存在していた。11例のPCR陽性検体の内の9例は、低リスクと高リスクのHPVに多重感染を示した。HPV-16感染は、検出されなかった。HPV-6とHPV-18がPCR・塩基配列の検索によって検出された。このように、低リスクと高リスクのHPVによる多重感染と過剰角化は、急速なウイルスの複製が、口腔のVCの組織形成に関与する可能性がある。口腔のVC腫瘍形成は、HPV感染を伴うことにより、p53の不活性化の可能性はある。



口腔のVC(症例No.21)におけるインサイット・ハイブリダイゼーション法によるHPVの局在。HPV-DNAは、主に扁平上皮の上部に存在する(a)、核の中に存在する(b)。(文献：Fujita S, Senba M, Kumatori A, Hayashi T, Ikeda T, Toriyama K. Human papillomavirus infection in oral verrucous carcinoma : genotyping analysis and inverse correlation with p53 expression. *Pathobiology*.

Ⅲ. ラオス国における新種のB型肝炎ウイルスの同定に関する研究

我々は、ラオス国由来のB型肝炎ウイルス19株を用いて系統発生分析を行った。新しいジェノタイプIは、2つ下のジェノタイプに属していた。この新しいジェノタイプは、東南アジア以外で進化したものと思われる。今回見出された新しいB型肝炎ウイルスのジェノタイプは、混合感染によって、地理的に限定されていた株が組換えを起こして出来たと考えられた。

(文献 : Olinger CM, Jutavijittum P, Hubschen JM, Yousukh A, Samountry B, Thammavong T, Toriyama K, Muller CP. Possible new hepatitis B virus genotype, southeast Asia. Emerg Infect Dis. 2008 Nov ; 14 (11) : 1777-1780.) IF : 5. 775

4. 9 エイズ・感染防御分野

当分野では、エイズの原因ウイルスであるヒト免疫不全症ウイルス1型 (HIV-1) の感染を制御する新規宿主因子の同定と、その解析を行っている。加えて、HIV-1と同じレトロウイルスに属し、遺伝子治療における遺伝子の運び屋として最も多く使われているマウス白血病ウイルス (MLV) の感染機構の研究も行っている。平成20年度の研究内容は以下の通りである。

I. エズリン、ラジキシン、モエシン (ERM) 蛋白質はHIV-1 感染に関与する

HIV-1が標的細胞に結合すると、HIV-1の感染受容体CD4, CXCR4, CCR5が、細胞骨格アクチンに依存して、HIV-1結合部位に集合することが知られている。しかし、HIV-1感染受容体とアクチンが直接結合している証拠はなく、これらの蛋白質をつなぐリンカー蛋白質の存在が考えられていた。我々は、ICAM-1やCD44等の細胞接着因子とアクチンをつなぐリンカー蛋白質として機能することが既に知られているエズリン、ラジキシン、モエシン蛋白質 (ERM) のHIV-1感染における役割を解析した、これらERM蛋白質は、お互いに相同性が高く、同様な働きを持っていると考えられている。ドミナント・ネガティブ変異体による機能抑制やsiRNAによる発現抑制により、HIV-1感染が影響を受けることを発見し、ERM蛋白質がHIV-1感染に関与することを明らかにした (Y. Kubo et al. Virology 375, 130-140 (2008))。

Ⅱ. MLV感染から防御するための感染受容体の進化

以前、我々は、ラットMLV感染受容体CAT1の糖鎖付加がMLV感染を抑制することを報告した (Y. Kubo et al. Virology 303, 338-344 (2002))。マウスCAT1も、ラットCAT1と同様に糖鎖

付加を受けるが、マウスCAT1の糖鎖付加はMLV感染に影響しない。ラットCAT1上の222～225番目の4アミノ酸の挿入が、糖鎖付加によるMLV感染抑制の原因であることを、以前、我々は明らかにした(Y. Kubo et al. Virology 330, 82-91 (2004))。また、野生ネズミ *Mus dunni* 由来細胞においても、ラット細胞と同様に、糖鎖付加がMLV感染を抑制することが知られていた。しかし、*Mus dunni* CAT1は、ラットCAT1において見られたアミノ酸挿入が存在せず、ラットCAT1とは異なったメカニズムによってMLV感染を抑制することが示唆された。今年度、我々は、*Mus dunni* CAT1上の236番目の1アミノ酸挿入が、糖鎖付加によるMLV感染抑制の原因であることを発見し、報告した(H. Yoshii et al. J. Gen. Virol. 89, 297-305 (2008))。ヒトCAT1は、ラットCAT1と *Mus dunni* CAT1の両方のアミノ酸挿入を持っており、MLV感染から防御するための宿主進化の道筋が示唆された。

Ⅲ. SDF-1-EnvキメラによるCXCR4標的化MLVベクターの検討

我々は、理化学研究所の天沼博士との共同研究において、SDF-1ケモカインとMLVエンベロープ蛋白質(Env)とのキメラ蛋白質が、SDF-1の受容体であるCXCR4を介して感染することを、以前、報告した(M. Katane et al. EMBO rep. 3, 899-904(2002))。より感染効率の高いSDF-1-Envキメラ蛋白質を構築するため、Env蛋白質と融合させるSDF-1の領域を検討した。作成した様々なSDF-1-Envキメラ蛋白質の中で、SDF-1全長をEnvに挿入したキメラ蛋白質が、最も感染効率が高いことがわかった(K. Miyakawa et al. J. Gen. Virol. 89, 3137-3143 (2008))。

4. 10 生態疫学分野

平成19年度末を以て熱帯感染症研究センターは解体され、生態疫学分野がその一部を受け継いだ。しかし、生態疫学分野に所属する研究者はいずれもケニア拠点または熱帯医学ミュージアムの活動(ケニア拠点支援も含む)に専念しており、日本国内には研究室も無く、部門としての実態はなかった。

従って、活動の詳細は本年次要覧の「ケニアプロジェクト拠点」ならびに「熱帯医学ミュージアム」の項でも報告する。

【研究活動】

I. Demographic Surveillance System (DSS) の構築と運用および疫学的研究への応用

2006年8月に開発と同時に稼働させていたDemographic Surveillance System (DSS) の問題点を洗い出し、修正と追加開発とその実装を行った。

- 1) プロジェクト地域において、民間組織を設立し、同組織経由で、調査員に対する保険、年金、税金の支払いが出来る仕組みを確立した。これによりケニア国内法に準じた労働環境を整えることが出来た。
- 2) PDA (Personal Digital Assistance : ハンディ・コンピュータ) を用いたデータ収集システムとグローバル・ポジショニング・システム (GPS) を連動させ、家屋の緯度経度を自動記録するシステムを開発した。さらに、調査地域(162km²)を100m四方のグリッドに分け、各グリッドに番号を与え、GPS情報から得た緯度経度により各家屋にグリッド番号から、家屋番号を自動で発行するシステムを開発し、実装した。
- 3) 疾病罹患・死亡のリスクファクターに関するいくつかの調査内容が、PDAによる通常調査に追加して自動的に立ち上げるシステムを開発した。2009年1月より同システムの稼働を開始し、今年度に関しては、水源・水の利用調査、蚊帳の利用状況調査、医療受動行動調査を実施した。

II. 熱帯地における下痢原因菌の病因および疫学的研究

連携融合事業によるケニア研究教育拠点のインフラ構築はP3 ラボを含めたラボの整備をもって昨年末にほぼ終了した。2008年度は現地スタッフの養成を行いながら、細菌、ウイルスなどの検査機能の向上をはかり、ラボの整備を行なった。

ケニアでの乳児下痢症の実態を知るためにキアンブ地区の病院で下痢症の病因学的検索を地域住民の協力を得て、2008年8月から2009年の3月までの8ヶ月間行ってきた。この間に登録したキアンブ病院の5歳以下の下痢症患者は757例、下痢症患者の性、年齢に対応する対照例432例、カルリ診療所からは下痢症187例、対照171例であった。

便検体からの細菌学的検査及びDHL等から分離した大腸菌の3コロニーからマルチプレックスPCRを用いて病原大腸菌の診断を行い、下痢原因菌の推定を行った。下痢患者及び対照からの下痢起因菌の分離率は24%、主な病原菌は病原性大腸菌、毒素原性大腸菌、腸管付着性大腸菌であった。しかし赤痢菌、サルモネラ菌、エロモナスなどは分離されず、分離菌については先進国並みの急速なスペクトラムの変化が示唆された。下痢起因菌の病因学的意義の詳細については現在検討中である。

一方、コレラ等の集団下痢症発生に際して、ケニア保健省の協力要請を受けて急性下痢症の原因究明および分離菌の性状検査とくに薬剤感受性試験等を行い、公衆衛生当局に情報提供をしながら、流行収束に向けた支援を行っている。

これまでの急性下痢症のほとんどの原因菌はコレラ菌あるいはエロモナス菌であった。2007年末からスバ、ブンゴマ、イシオロ、マーサビッツ、ナイバシャの各県から採取したコレラ疑いの検体226検体から74株の稲葉型コレラ菌が検出された。生物型に関する分子生物学的分析

についてはすでに報告した。また分離コレラ菌のテトラサイクリン等に対する薬剤感受性は一部の菌を除き感受性であるが、高度耐性株も散見されるため、現在、その耐性遺伝子についてバングラデシュなどアジア諸国から分離される耐性株との比較分析を行っている。

熱帯地では最も死亡率が高い敗血症の病因学的研究は、そのフィールドを設定中である。

なお、外部資金による事業として、gCOE「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」に参画、科研費基盤研究(B)「熱帯地における下痢原因菌の病因論とその疫学的研究」を実施している。

【教育活動・社会貢献】

ケニア拠点における活動や教育活動、国立科学博物館「上野の山発シリーズ」「アフリカの自然・開発・そこに住む人々」の準備、実施に協力するなどの社会活動については、「ケニア拠点」ならびに「熱帯医学ミュージアム」の項を参照のこと。JICA草の根技術協力事業（草の根パートナー型）を実施している。

（文責：嶋田雅暁）

4. 11 国際保健学分野

I. 病原体の分子進化、感染自然史

1) 東アジアにおけるHTLV-1の地域偏在性の系統地理学的背景

東アジアのHTLV-1の空間的広がりとは系統分化の過程の解明に取り組んでいる。岩手、高知、平戸（長崎）、熊本、加計呂麻島（奄美群島）、そして沖縄本島由来のHTLV-1約200株についてenv領域のRFLP解析およびLTR領域塩基配列に基づく系統解析を行った。日本列島内では中心部から周縁部に向けて、HTLV-1フリーの地域、JPN系統流行地域、JPN系統とTC系統が共存する地域という分布構造が見られた。また、系統解析からは広域に分布しているTCの内群としてJPNが分岐したという関係は示されなかった。これらの結果は、JPN系統が日本で起源し、本土を中心に広まったというよりは、TC系統とJPN系統の分化が大陸で起こり、それぞれの陽性ヒト集団が異なる時代に日本に渡来したと考えるほうが妥当であることを示している。

2) STLV-1の感染自然史

HTLV-1に近縁なサルT細胞白血病ウイルス（STLV-1）の感染自然史の解明を目指している。これまでに得られた疫学情報の分析から、群によっては陽性率がしばしば50%を超

えることが明らかとなり、さらに、HTLV-1とは異なり、母子感染よりも性成熟以降の水平感染によって高い陽性率が維持されている可能性が示唆された（論文執筆中）。

II. 環境や気候変動と感染症

1) バングラデシュにおける気象と下痢症および総死亡

地球温暖化がコレラなど下痢症に対して及ぼす影響を明らかにするため、過去20年間の降雨量および気温と患者数のデータを用い時系列統計解析を行った。週平均降雨量の増加によりコレラ患者数は14%増加し、コレラ以外の下痢症は5%増加することが明らかとなった。逆に、平均降雨量が減少してもコレラ患者数が増加することも明らかとなった。

2) 東アフリカ高地における気象とマラリア流行

90年代に東アフリカ高地で起きたマラリア流行は、従来エルニーニョが原因と考えられていたが、インド洋の東西で海面水温の極端な差が生じる「インド洋ダイポールモード現象」と関連があることを、マラリア患者数の時系列データを統計解析することにより示した。

III. 感染症流行の生態学的解析

1) マラリア伝播における微小スケールでの空間構造の重要性

マラリアは、媒介蚊であるハマダラカが人を探索して吸血し水たまりへ戻って産卵するというサイクルを繰り返すことで伝播するので、流行の動態や維持機構を明らかにするためには媒介蚊の行動を理解することが不可欠である。マラリア流行地で観察された蚊の分布から、媒介蚊に吸血されるリスクはひとつの村の中でさえ大きく変動し、それは蚊の発生源からの距離と家の周辺数百メートル以内の人口から予測できることが明らかになった。このような蚊の分布と行動を考慮した数理モデルを用いた解析により、マラリアを無くすために最も効率のよいコントロールの重点ターゲットの特定を試みている（論文準備中）。

2) デング熱およびデング出血熱の大流行の早期予測システムの開発

デング熱およびデング出血熱は主にネッタイシマカによって媒介されるウィルス疾患で、熱帯地域において近年増加している。多くの流行地で患者の発生に季節的な周期が見られるとともに数年に一度の不規則な間隔で大流行が発生する。大流行の可能性を事前に知ることが出来れば医療体制の整備や大規模な予防キャンペーンの可能性が開けるため、デング大流行の早期予測システムの実現が望まれている。我々は過去数年間のデング熱およびデング出血熱の月別患者数と気象データから、流行の動態を左右するパラメータを決定し、流行のごく初期にその年の流行の規模を予測する数理モデルの開発を試みている。このモデルにより患者数の予測のみならず殺虫剤噴霧やワクチンなどのコントロールの有効性についても評価が可能になる（論文準備中）。

4. 12 国際健康開発政策学分野

広範囲にわたる的確な知識と経験によって対処しなければならない感染症の問題は、もはや保健・医療分野だけではなく、地球環境や国際平和といった「人間の安全保障」にかかる的確な知識と経験も重要となる。当分野では、熱帯地域を中心とする開発途上諸国・地域のさまざまな社会環境が、いかに保健・医療や民生福祉の問題に関わり、どのような問題を生み、あるいはどのような影響を与えているか、について社会科学および人文科学を含む学際的接近を図る研究を行い、政策立案に供している。

また、開発途上国を対象とした国際協力の手法が、二国間および各国間を問わず、いかに研究所全体における各分野の有機的つながりに寄与し得るかについても、学術交流協定等を介し種々の取り組みを実施している。とりわけ行政機関や国連関連の地域研究センターを通した情報・資料の集積や活用および、それらに対する専門的解析や対応が中心である。

I. 研究活動概要

当分野においては、地域保健・医療領域におけるPHCや国際保健の向上に資するさまざまな研究活動がなされてきた。具体的には以下に掲げる諸テーマのもとに、基礎研究および応用研究がなされ、現在それぞれに関する種々のケーススタディと、そのフォロー・アップを行っている。

- 1) 熱帯における疾病の出現頻度、範囲、組み合わせなどを規定する社会的背景に関する解析研究
- 2) 熱帯地域における人間社会環境による疾病への影響及び効果的予防法の究明
- 3) 「人間の安全保障」に関する栄養、経済コスト、教育、環境の視点からの尺度、標準化
- 4) 地域医療および国際保健事業の実施面からみた感染症対策に関する研究
- 5) 日本政府ODAにおける医療サービス事業の量的、質的特徴に関する研究
- 6) 熱帯医学に関する情報集積システムの開発（地域別、疾病別、行政形態別）
- 7) 危機管理を含む熱帯地域派遣者のための医学研修プログラムの改善に関する調査・検討
- 8) 熱帯アジアにおける感染症の疫学と行政対応の比較研究（SARSおよび鳥インフルエンザを例として）
- 9) 衛星データを用いたリモートセンシング、および簡易GIS手法による環境変動と感染症との関係に関する研究

特に、リモートセンシングとGISを用いた研究では、先端技術を用いた、疫学的、人文科学的調査・解析を行っている。例えば、リモートセンシングによる研究では、ベトナムにおける衛星データを用いた土地被覆分類、植生指標や温度分布などの環境指標解析による疾病対策の検

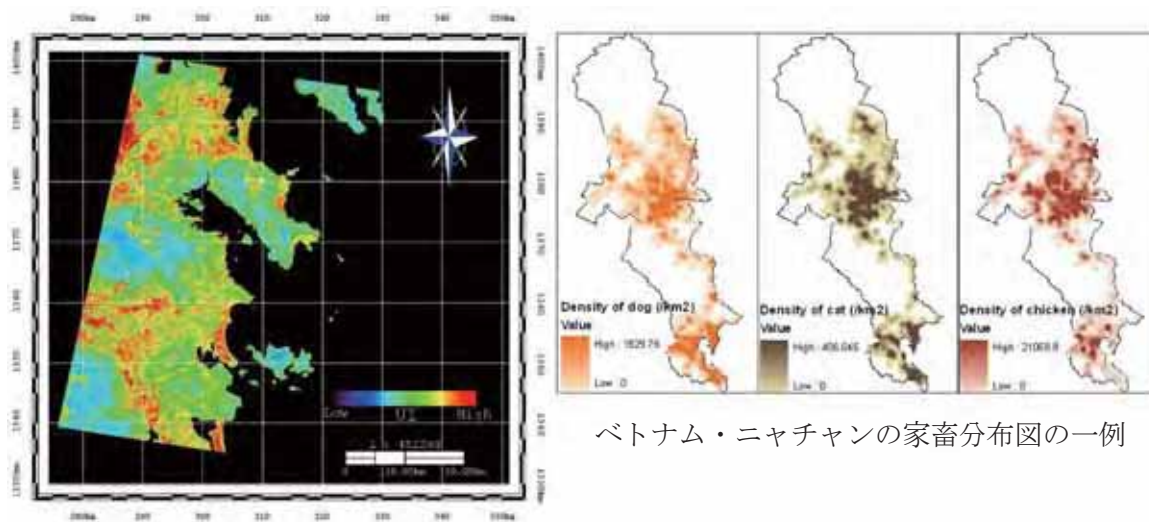
討など、新しい技術の保健・医療分野への応用研究を積極的に行っている。

II. 共同研究

当分野は、社会環境や国際保健医療などの幅広い分野を網羅している分野であり、様々な研究分野の研究者とともに共同研究を進めている。特に、GISやリモートセンシングを適用した新しい解析手法や研究成果について、他分野の専門家などと意見や情報の交換を行いながら、保健・医療分野への応用研究を進めている。

例えば、疾病は人々が生活している空間で発生し、その疾病対策を考えるためには、疾病と社会環境の変化との関係を知ることが重要となるが、生活空間の広がりであり、かつ疾病と関わる生物との関係を大きく変化させる都市化を数値化することは難しく、特に発展途上国などの地図がない国や、ベトナムのような経済発展が著しい国においては、都市化を定量的に調べることは大変困難である。そこで、都市化を容易に定量的に算出することを目的として、衛星データから都市化の指標を算出できる都市化指標UI (Urban Index) の有用性や問題点などについて調査している。

また、ベトナムにおいて、家畜と疾病との関連について、GISを用いて研究解析を進めている。この研究では、家屋レベルで家畜情報(種類、飼育数など)を収集し、そのデータを疾病情報や人口密度などを含むGISデータとリンクさせ、家畜と小児下痢症や小児肺炎などの疾病データとの関連性について空間解析を主体として調べている。



衛星データによるベトナム・ニャチャンの
都市化分布図

ベトナム・ニャチャンの家畜分布図の一例

4. 13 病害動物学分野

当分野は、蚊を中心とした病害昆虫の生理、生態、防除及び分類と、昆虫媒介性疾患の疫学について、臨地研究を重視した基礎的及び応用的研究を行っている。

I. ベトナムにおけるデング熱媒介蚊の浸襲実態の精査

媒介蚊の分布域拡大に伴い地球規模で拡がりつつあるデング熱に有効な防除手段は今のところ媒介蚊対策のみであり、媒介蚊の生態学的基礎研究は必須である。デング熱媒介蚊であるネッタイシマカとヒトスジシマカは、一般的にそれぞれ都市部と農村部で密度が高いと言われてきているが、H17, 18, 19年度に実施したベトナム国内の古タイヤの集積状態と媒介蚊の発生密度に関する調査結果を解析したところ、必ずしも上記の傾向が全てのケースに当てはまる訳ではないことが明らかとなった。すなわち、ベトナムを北部、中部、南部の3地域に分け、各地域の都市部、農村部、都市と農村の中間地域について調査したところ、北部では都市部でもヒトスジシマカが多く分布し、南部では農村部でもネッタイシマカが多く分布していることが分かった。

II. 感染症媒介蚊の殺虫剤、特にピレスロイドに対する抵抗性についての実状調査

ピレスロイド系殺虫剤は、環境への負荷の低さや温血動物に対する安全性の高さのために、近年最も汎用されている殺虫剤であるが、使用頻度が高くなるに従ってこれに対する抵抗性の問題も増大しており、この状況をモニターすることは有効な媒介蚊防除のために不可欠である。ベトナム国内の古タイヤに発生するネッタイシマカ、ヒトスジシマカ、ネッタイイエカ幼虫のピレスロイド（アレスリン）に対する感受性調査をH17, 18, 19年度に実施したが、他種の蚊に比較してネッタイシマカでは地域による感受性差がはっきりとしており、北部に比べ南部での感受性低下が特徴的であった。ピレスロイドの作用点であるナトリウムチャンネルの遺伝子変異(*kdr*)としてこれまで多くの衛生・農業害虫で報告されているドメインII-膜貫通セグメント6(DII6)領域のアミノ酸置換(L1014F)、およびネッタイイエカとネッタイシマカのピレスロイド抵抗性に関連するアミノ酸置換変異で、同じくDII6領域にあるV1016G変異に関してベトナム国内の72カ所から採集されたネッタイシマカ幼虫につき調査したところ、L1014Fは全く発見されず、V1016Gも極めて低頻度であることが分かった。その一方、最近発見されたドメインIII-セグメント6(DIII6)領域のアミノ酸置換変異(F1269C)が高頻度で特にベトナム南部に分布していることが明らかとなり、ベトナムのネッタイシマカのピレスロイド抵抗性にはF1269変異が重要な役割を果たしていることが示唆された。

Ⅲ. デング熱媒介蚊防除のための新しい試み

1) 殺虫剤含浸ネットを利用した発生源対策を目的とした中規模試験

ベトナムでは伝統的に水の備蓄用に水瓶を使用しているが、これがデング熱媒介蚊の主要な発生源となっている。都市部では水道の普及および政府の指導により水瓶の使用は減少しているが、農村部では依然として水瓶が重要な水の備蓄方法となっている。政府の方針により、水瓶に殺虫剤を処理することは禁じられており、有効な発生源対策はなされてこなかった。そこで、ベトナム南部のLong An省Tan Chanhの村落（人口約15,000人）において、ペルメトリンを含有するLLITN（オリセットネット）を応用し、家屋内外に多数存在する水瓶の蓋にこれを取り付け、媒介蚊（ネッタイシマカ）成虫の侵入阻止を目的とした中規模トライアルを実施した。村落を大きく無処理地区と処理地区に分け、処理地区にはほぼ全ての水瓶の蓋にオリセットネットを取り付けた。その結果、処理区と無処理区のContainer Index, Breteau Indexにそれぞれ差が見られ、さらに住民のIgM陽性率、およびIgG陽性率に有意な差は出なかったものの、seroconversion rateに若干の差が見られることが分かった。ただし、オリセットネットは家屋内での使用を目的としており、家屋外では紫外線による有効成分の分解が早く、有効期間は約半年であることも分かった。

2) 合理的・持続可能なデング熱媒介蚊対策のための情報解析

ベトナム中・南部都市（ナチャン市、ホーチミン市）パイロット地区の家屋で実施した媒介蚊発生源調査及び質問紙調査等により、住人数の多い家屋は媒介蚊発生リスクが高いこと、ベトナム都市部ではネッタイシマカは屋内の発生源から発生しているため発生源は降雨の影響をほとんど受けないが気温の上昇によって感染リスクが高まるため限られた予算・人員での媒介蚊対策は降雨量に関わらず夏季に実施すべきであること、住民のデングに関する意識・知識と実際の媒介蚊対策に関連する保健行動（水瓶の蓋の使用等）には相関がみられないこと、などを明らかにした。これらの知見を基にワクチントライアルのphase IIIbに相当する地域特性を考慮した便益性評価トライアルを実施することにより実際の公衆衛生施策の実施に必要な情報が提供されることが考えられる。

Ⅳ. ベトナムとインドネシアにおけるマラリア媒介蚊の分子系統・形態分類,

マラリアを媒介するハマダラカには形態のみでの種同定が困難な同胞種が多く存在し、分類や効果的な防除対策を難しくしている。東洋区における主要な森林マラリア媒介蚊である *Anopheles leucosphyrus* グループについて、分子系統学的アプローチによる種の実態解明および形態学的研究をH19年度に引き続き実施した。ミトコンドリアDNAのCOIおよびND6 遺伝子座部分配列の解析によって、1)ベトナム北部に分布し今まで *An. dirus* あるいは *An. takasagoensis* と同定されてきた集団および、2)インドネシアのLombok・Sumbawa両島で *An. balabacensis* と同定

されていた集団は、分子系統樹上で既知種から明瞭に分離されたことから、それぞれ既知種には属さない新たな隠蔽種であると推定された。前者では *An. dirus* および *An. takasagoensis* との形態的差異が見つかっていないが、後者においては雌成虫の口跗と前肢腿節の比が *Leucosphyrus* groupのどの既知種とも異なることが発見された。媒介蚊防除においては、これら隠蔽種を識別し、媒介能を含めた生態的特性の差異を考慮した防除策を講ずる必要がある。

V. 天敵による媒介蚊の生物的防除に関する研究

水生甲虫のゲンゴロウ類は、蚊幼虫（ボウフラ）の天敵として期待されてきたが、その捕食能力に着目した研究はこれまでにない。今年度は、ゲンゴロウ類成虫のボウフラに対する捕食能力を評価するために、水田を主な生息地とする14種の日本産ゲンゴロウ類成虫と日本脳炎媒介蚊であるコガタアカイエカのボウフラを用いた捕食実験を行った。その結果、体長1 cm前後の中型種が小型種（1 cm未満）および大型種（2 cm以上）に比べ高い捕食能力を有することが明らかとなった。特に、農村地から都市部まで広域に分布する最も普遍的な種であり、かつ世界的に広く分布する中型種のハイイロゲンゴロウは、1日に約200個体のボウフラを捕食できることを明らかにした。このことは、水田生態系においてゲンゴロウ類の存在が病原媒介蚊の個体数抑制に貢献していることを示唆している。

4. 14 免疫遺伝学分野

I. 研究活動

住血吸虫症、マラリア、シャーガス病、デング熱の免疫遺伝学的な研究を各研究グループに分かれて推進した。

- 1) 住血吸虫症研究ではミニブタを用いた放射線照射セルカリア不活化生ワクチンの系を樹立し、このワクチン効果に寄与していると考えられる抗原分子を2次元カラムによる精製法を用いて3種同定し、そのうちの2種がセルカリア表面に発現していることを明らかにした。Ekhlas Hamed Abdel-Hafeez Abdou et al. *Parasitol Intl* 58(1):36-44, 2009
- 2) マラリア研究グループは、マウスモデル研究に着手し、*P. bergii* ANKAの繰り返し感染モデルを確立し、異なる系統のマウスにおけるマラリア貧血の重症度の違いを明らかにした(投稿中)。またHUY助教はマラリア原虫の薬剤耐性と深く関係するヘモゾインの代謝を阻害する系について報告した。Uyen DT et al. *Biol Pharm Bull.* 31(8):1483-8, 2008
ガーナ大学野口記念医学研究所との共同研究としてアストアレ地区での450名の小児を対象としたマラリア抵抗性と遺伝的な背景の調査については本年度2シーズンを終了し、

解析に入った。

- 3) シャーガス病研究では、ボリビアの臨床グループ(西沢医院, 日本病院外科, 心臓病院, および熱帯病研究所CENETROP)との共同研究として3つの特徴的な病型の遺伝解析研究を進めているが, これらの患者の感染しているクルーストリパノソーマ原虫のDNAを患者の末梢血サンプルからPCR法により検出したが, 患者の臨床型と原虫の亜系統の間に明確な関連は認めなかった(論文投稿中)。
- 4) デング熱研究では, ベトナムのパスツール研究所のウイルス部門, 周辺の小児病院との共同研究で健常対照群もふくめて約千名のDNAサンプルを解析し, HLA-class I のA24が増悪因子, HLA-class II のDRB1*0901が防御的であることを発見した。

Nguyen TPL et al. PLoS Negl Trop Dis. 2(10): e304, 2008

ゲノムワイド研究も一次スクリーニングを終了し, 有意に変化のみられたSNPについて2次スクリーニングを行ない最も蓋然性の高いSNPに近い遺伝子を2種見出した(論文準備中)。

II. 教育活動

- 1) 医学研究における倫理に関する国際研修コース

平山とベルゲン大学のReidar K. Lie教授との共同主催で, 3日間の研修コースを開催し, 熱帯医学修士課程, 熱帯医学研修課程, JICA研修生のほか, 全国から多数の参加者を集めた。全国共同利用の研究集会としても開催した。

- 2) 世界保健ニーズに応える医薬品研究開発ディプロマコース

平山とタイ王国タマサート大学Kesara教授がコースディレクターとしてタイのタマサート大学キャンパスで開催した5週間のコースで, 今年度で第3回目となった。約30単位分の講義と実習を行った。国内講師は連携した東大薬学研究科などから招へい, さらに製薬企業4社から各専門家に講義を依頼した。連携した中国, タイ, コロンビアの大学を中心に, ベトナム, フィリピンからも参加者があった。7つのモジュールについて試験を行い, 合格したのち, 最終的に長崎大学からディプロマを授与した。終了後, TDRの担当者や連携大学の代表者と反省会を行い, カリキュラムの一部変更を行った。次年度は長崎で開催することも確認した。

III. 社会活動

- 1) 日本熱帯医学会の機関誌Tropical Medicine and Healthの編集長, 事務局を運営した。投稿数の増加を期して処理能力の向上を行い, さらに編集会議で総説などの担当を決定した。
- 2) 日米医学協力プログラムの寄生虫病部会の日本側部会長として, 合同会議を国立国際医

療センター研究所で狩野繁之部長のもとで開催した。日本から100名ほどの参加者があった。

- 3) WHO/TDRの10年計画の人材育成部会BL2の機関強化プログラムの座長としてジュネーブにおける運営会議に出席し、アフリカやアジアの最貧国を中心に強化人材の選択を行い7名の奨学生をアジア、アフリカ、欧米の教育施設に派遣した。
- 4) 3日間の医学研究における倫理に関する国際研修コースを開講し、約60名の内外の参加者を集めた。

5 附属施設

5. 1 アジア・アフリカ感染症研究施設

平成20年度の改組に伴い、ベトナムハノイの国立衛生疫学研究所通称NIHE内の長崎大学感染症研究拠点、大洋州8カ国のJICA拡大ワクチンプロジェクトの受託によるフィジー拠点、さらにケニアナイロビ市のケニア中央医学研究所通称KEMRI内の感染症研究拠点の3拠点を包括して、熱帯医学研究所の附属施設として当施設を開設した。各拠点の活動に関してはそれぞれの活動報告を参照のこと。

5. 2 熱帯性病原体感染動物実験施設

- (1) 所内感染動物実験施設運営委員会：中村三千男施設長から交代した金子修新施設長(平成20年7月1日付)が委員会を開催(平成20年12月22日)し、つぎの5点が承認された。出席委員は、和田昭裕(細菌学)、中澤秀介(原虫学)、渡邊貴和雄(臨床医学)、平山謙二(免疫遺伝学)、栗林太(感染生化学)、千場正敬(病理学)、本田純久(国際保健学)、依田健志(国際健康開発政策学)、川田均(病害動物学)と委員以外の松尾真総務係長、柳哲雄(動物実験施設)であった。①平成20年度施設運営費 ②実験動物管理者名および実験室管理者名の変更。19年度まで各分野別に保有していた承認番号が「飼養N08001」と「動実N08001」へ統一された。ただし、当施設の管理者名とは異なるため、熱研本館内での動物実験には「飼養N08001」と「動実N08001」を使用しない。③302号室を原虫感染症実験のための小動物飼養室とする。206号室は実習用実験等の目的に共同利用する。④長崎大学動物実験規則にある自己点検・評価および検証に関連して、搬入する動物には検疫が必要だが、動物専門納入業者からの動物については長崎大学動物実験委員会がそれを免除しているが、当施設内で飼養繁殖されている動物も検疫の対象になるため、当該分野に検疫を依頼する。⑤災害時の動物逸走を防止するために、遺伝子(DNA)組換え動物飼養室に限らず、すべての飼養室にネズミ返しを設置する(1月7日に設置)。
- (2) 定例作業と主要な新設備：給排気システム内ならびに天井内のHEPAフィルターの交換(4月19日と10月13日)、バイオハザード対策室(P3:301号室)の点検整備(3月5日から1週間)。設備・備品としては、竣工当時から使用していた電話機を新機に総入れ替えし、施設内の放送と電話呼び出しが容易になった(8月25日)。そのほか104号室(恒温恒湿室)に非常呼び出し装置(11月19日)、3階廊下に冷却遠心機、301号室にインターロック扉(3月9

日), 302号室にマウスクリーンアイソレータを設置した。工事としては, 101号室, 102号室, 1 階から 3 階までの廊下, 階段壁面の再塗装をおこない, 内装が一新した(2月25日から2週間)。

- (3) 査察等: 学内の組換えDNA実験安全委員会(5月7日)ならびに動物実験委員会(9月26日)による査察があった。

I. 研究内容

平成20年度(2008年)施設利用の分野別研究課題

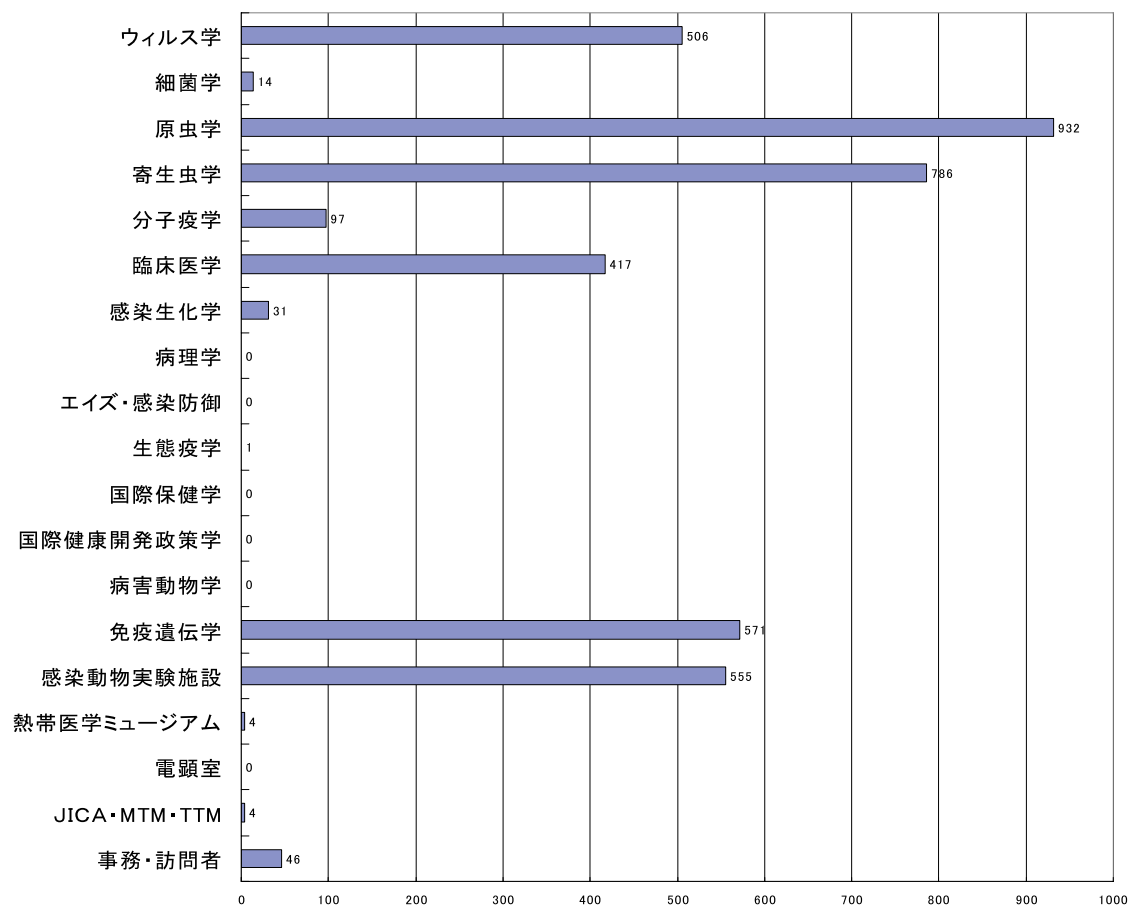
分 野 名	研 究 課 題
ウイルス学	- 蚊媒介性ウイルスの免疫実験 - 蚊媒介性ウイルスの病原性実験 - 野生動物におけるレトロウイルス感染防御機構の解明
原虫学	- Interactions between malaria parasite strains, sub-species and species, and the identification of genes controlling medically important phenotypes. - ネズミマラリアの定量的顕微鏡観察 - マラリア慢性感染時の免疫状態 - ネズミマラリア原虫を用いた宿主細胞侵入関連因子の解析 - 変異型赤血球を保有する宿主におけるマラリア原虫の赤血球認識分子群の発現変化の網羅的解析 - 連鎖解析によるネズミマラリア原虫の致死性因子の同定
寄生虫学	- マンソン住血吸虫感染における樹状細胞の役割 - 宿主体内移行に伴い発現するネズミ糞線虫蛋白の同定 - ネズミ糞線虫幼虫の温度感受性分子の同定 - スナネズミの腹腔から得られた仔虫を用いての簡便な糸状虫(<i>Brugia pahangi</i>)の継代維持 - 住血吸虫幼虫の遊泳侵入行動制御機序 - 糸状虫感染幼虫の血清への走化性運動発現機序
分子疫学	日本住血吸虫の感染防御・重症化阻止ワクチン開発
臨床医学	- 肺気腫モデルマウスにおける肺胞マクロファージの障害肺修復能の評価 - マウス肺胞マクロファージにおけるアポトーシス細胞除去の評価
免疫遺伝学	- 日本住血吸虫症ワクチン開発におけるアジュバント効果の検討 - マウスマラリア感染によって発症するマラリア重症貧血症の解析

Ⅱ. 利用状況

(1) 平成20年度 職務別利用者数（のべ数）

区 分	職 務	利用者数
研 究 者	教官・医員，研修医，技官（学内）	2,124
	大学院生・学部学生（学内）	549
	学外の研究者（学生を含む）	6
	小計	2,679
研究補助者	事務職員（学内）	16
	非常勤職員（学内）	1,261
	小計	1,277
合計		3,956
業者・訪問者		10
総計		3,966

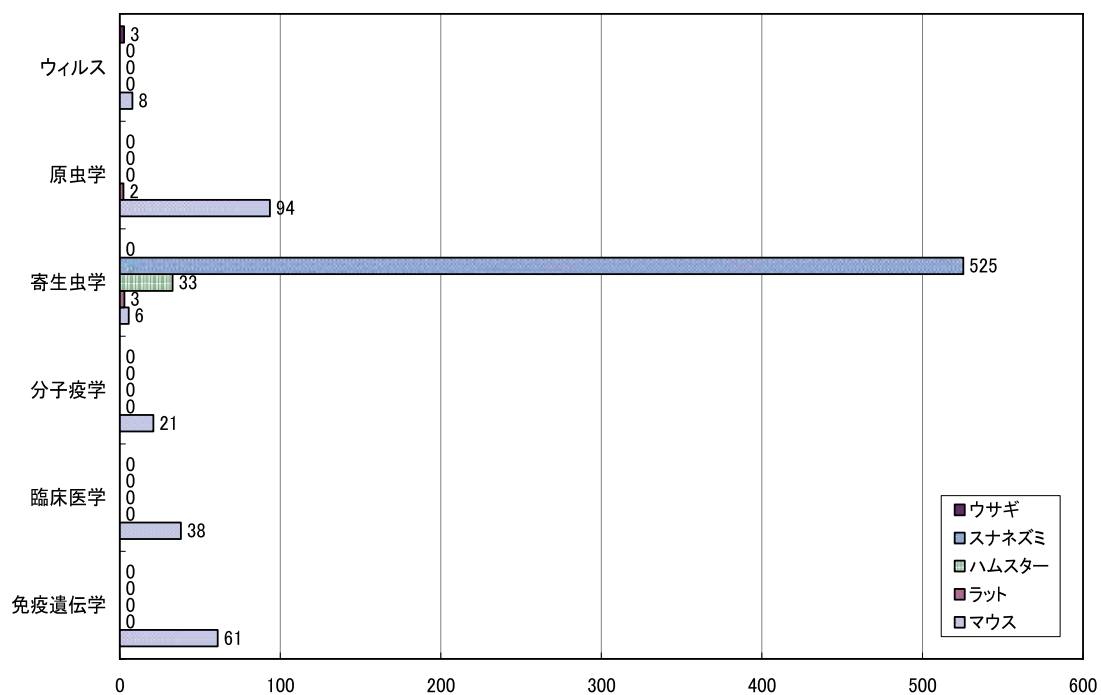
(2) 平成20年度 分野別利用者数（のべ数）



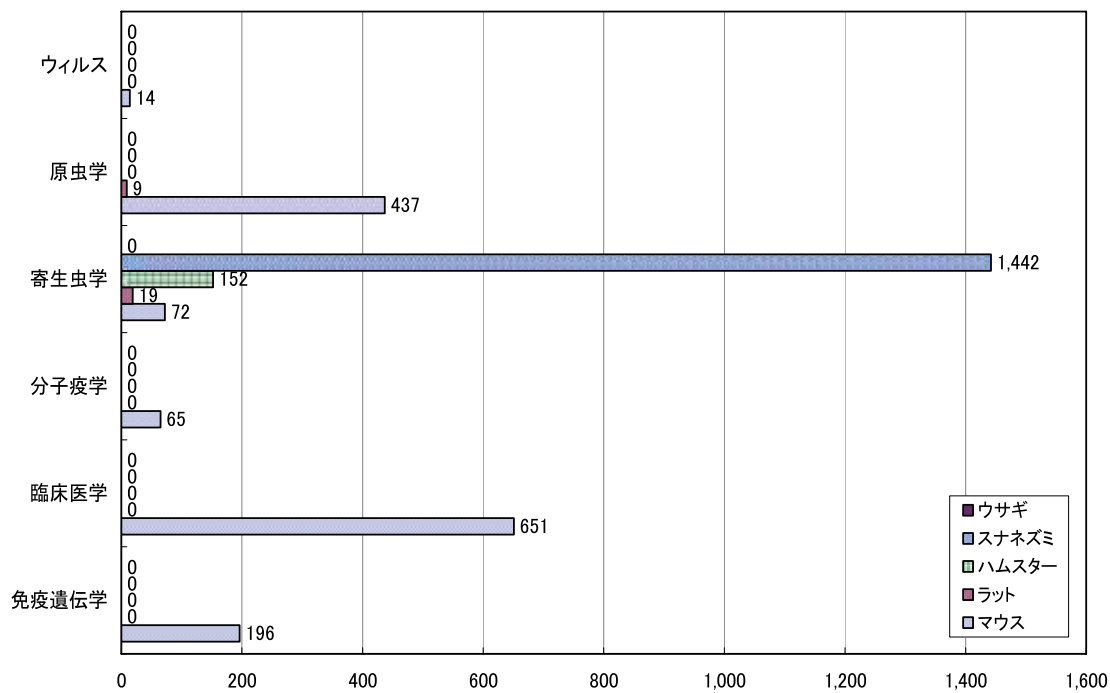
※ 利用者延べ数前年度比較

ウィルス学：3.7%増，原虫学：20%増，臨床医学：174%増

(3) 平成20年度 分野別 1日あたりの動物種別飼養頭数



(4) 平成20年度 分野別実験に供した動物種別頭数



5. 3 熱帯医学ミュージアム

熱帯病に関する概説パネル、寄生虫、媒介昆虫、危険動物などの標本、貴重図書・映像資料を熱帯医学研究所1Fの「熱帯医学館」に展示している。収集された資料は数千点におよび、少人数に対する視聴覚コーナー、録画用スタジオ・セットも設けている。

研究所と市民の間のリエゾン窓口として、熱帯病に関する研究や学校教育、社会教育に活用される「熱帯医学ミュージアム」を目指しており、現在のプロジェクトと今後の展望を示し、感染症に対するリスクコミュニケーションや市民科学の発展にも寄与する体制を整備した。平成20年度の来館者数は478名であった。「感染症そして研究の今」というシンポジウムには120名ほどの一般市民が訪れた。また、課外授業の一環として、県立中学校2校(59名)、県立高校1校(15名)が訪れ、専門家の講義を受けた。

2008年3月7日から同15日まで、東京の国立科学博物館において、企画展「熱帯感染症と『たたかう』長崎大学」を開催した。この企画展では、熱帯医学研究所におけるアフリカをはじめとした熱帯地域での熱帯感染症への取り組みを中心に、ノーベル化学賞を受賞した下村脩名誉博士の功績や、長崎での西洋医学の歩み、ボードウィン写真コレクション、放射線医学に関する資料を展示した。開催期間中、11,086人の入場者があり、大いに賑わった。

5. 4 共同研究室

本研究所には多くの共同利用研究機器があり、その利用は所内に止まらず全国の共同研究者にも広く開放され、多彩な研究プロジェクトの推進に役立っている。共同研究室は大きく四つの部屋から成り立っている。一つは電子顕微鏡室、P3レベル室、細胞培養実験室それから分子生物実験室である。現在の主な機器・設備は透過電子顕微鏡・走査電子顕微鏡(日本電子株式会社)、超ミクロトーム(LEICA)、コンフォーカルレーザー顕微鏡(LEICA DMIREZ)、フローサイトメーター(ベクトン)、画像解析システム(浜松フォトニクス)、DNAシーケンサー(Perkin Elmer)、DNA/RNA抽出機(キアゲン)、全自動二次元蛋白分離システム(ベックマン)、二つのP3実験室である。従来よりの機器も含めて、広範囲な細胞生化学実験および組織化学実験が、多くの所内外研究者により毎日頻繁に活用されている。

I. 電子顕微鏡(走査および透過)を用いての主な共同研究

- * 新種ウイルスの細胞内解析(C6/36, BHK-21細胞を用いて)
- * 新種ウイルスのネガティブ染色による解析

- * ウエストナイル及びインフルエンザウイルスを用いての人工高分子蛋白によるワクチン開発（病院検査部との共同）
- * ユンナンオルビウイルスのネガティブ染色による微細構造解析
- * 細胞C. P. Eを起こす無名ウイルスの微細構造解析
- * モリブデン酸アンモニウム＋トレハロースを用いてのネガティブ染色のモリブデン酸アンモニウム単独との相違
- * 切片用電子染色剤の開発
- * 連鎖球菌の濾液による緑膿菌阻害の解析
- * 急速凍結置換固定法を用いた肺炎球菌莢膜の免疫電顕法による解析
- * ベーターノダウイルスの遺伝子操作によるコア欠落の微細構造観察をネガティブ染色解析

II. 電子顕微鏡室での研究

ウイルス粒子，細菌の構造および分離した蛋白質や低分子酵素などの形態や微細構造を研究することは重要であるが，この目的を進めるには非常に高い解像力が必要であり，この目的に応用されている方法がネガティブ染色法と，電子顕微鏡観察である。ところが，この染色法に使用される酢酸ウラニル（国際規制物資・劣化ウラン）が，昨今の情勢によりIAEA（国際原子力機関）の敢行したBSS（国際基本安全基準）により，輸入および販売が急停止した。この為酢酸ウランの保有が無い研究施設では，早急の代替え方法を取得する必要がある。

元来，このネガティブ染色法は，フェリチンの構造研究をしていたFarrant(1954)により始めて報告された。ついでHall(1959)が燐タングステン酸水溶液によりウイルス粒子のネガティブ染色像（コントラスト逆転像）を発表した。その後，より高い倍率と分解能での高性能電子顕微鏡を用いて観察できる酢酸ウラニル水溶液を用いたネガティブ染色法が開発された。この酢酸ウラニルは電子顕微鏡用超薄切片の染色においても重要な染色剤であった。

このような情勢に伴い医学生物学電子顕微鏡技術学会では，いち早く「酢酸ウラニル代替え染色法の開発」のプロジェクトを立ち上げた。我が電顕室では，当初からウイルスの微細構造解析に特別に電子顕微鏡観察用として，精製濃縮したウイルス試料液作製とネガティブ染色法による観察を行っているため，いち早く，このプロジェクトに参加し(17年度は細菌における開発を行った)，ワークショップと論文により研究成果を発表した。この開発したネガティブ染色法は，ウイルスにおいて小型，中型，大型と大きさに適応するよう，燐タングステン酸やモリブデン酸アンモニウム・六水和物に水酸化カリウムを添加調整した染色液である。これらの新開発により中型および大型ウイルスにおいては，従来より良好な電子顕微鏡像観察ができるようになった。

その後，ネガティブ染色が不十分であった超小型ウイルス（40nm以下）においてもタング

ステン酸アンモニウム調整液を用いての染色が良好な結果を呈したので発表する予定である。

チクングニアウイルス感染培養細胞を用いての増殖全過程の微細構造解析は成されていない、そこでBHK-21（ベビーハムスター腎臓由来）培養細胞を用いて、1) チクングニアウイルス粒子のBHK-21細胞への吸着、進入の解析 2) ウイルスの脱殻の解析 3) ウイルス素材の集合前のウイルス蛋白の免疫電顕法での局在部位の解析 4) ウイルス素材の集合像および完全粒子形成像と放出像の解析を急速凍結置換固定法と急速凍結置換固定法を用いての免疫電顕法を行う準備をしている。

6 特別事業費による事業

6. 1 グローバルCOEプログラム

「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」

【概要】

2008年6月グローバルCOEプログラム拠点に採択された。

本プログラムでは「熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略」として研究・開発・フィールドワークを通して6つの感染症群と3つの研究領域において統合的に感染症を制御し克服を目指している。

長崎大学は日本唯一の感染症教育研究拠点として、国際社会の脅威となっている主要感染症を制御し克服することを目的としている。この目的を達成するためにあらゆる感染症の中から、特に子どもたちの犠牲が大きい①エイズ ②マラリア ③下痢症 ④見捨てられた感染症 ⑤新出現ウイルス ⑥プリオン病という6つの感染症群を対象に「基礎研究」、「医薬品開発」、「社会技術」という3つの研究領域から取り組んでいる。(図①)6つの感染症群は子どもたちの犠牲が大きいものばかりで、③下痢症は先進国では解決している、世界では依然蔓延している。④見捨てられた感染症では発生源が貧しい開発途上国であったためにかえりみられることのなかった Dengue 熱や住血吸虫症などに焦点をあてたことが大きな特徴である。

これまでの過去5年間、長崎大学21世紀GCOEプログラムは、卓越した実績を基に世界の活動拠点として高い評価を受けている。この実績を基盤に、今後、目的達成に向けて拠点の更なる実質化と国際化を図っていききたい。また、その実行に必要な革新的技術の研究・開発を行い、その過程を通して将来の当該領域を支える有為な人材を育成していく。



(図①)

【拠点メンバー】

基礎研究	平山謙二	熱帯医学研究所・教授	免疫遺伝学	基礎研究(見捨てられた病気)
	中込 治	医歯薬学総合研究科・教授	感染分子疫学	人材育成部会長
	松山俊文	医歯薬学総合研究科・教授	免疫学	人材育成部会(医歯薬学博士課程)
	金子 修	熱帯医学研究所・教授	原虫学	基礎研究(マラリア)
	平山壽哉	熱帯医学研究所・教授	病原細菌学	基礎研究(下痢症)
	伊藤 敬	医歯薬学総合研究科・教授	生化学	医薬品開発(理論的創薬)

	西田教行	医歯薬学総合研究科・准教授	微生物学	基礎研究（プリオン病）
	中山浩次	医歯薬学総合研究科・教授	微生物学	医薬品開発（治療）
	由井克之	医歯薬学総合研究科・教授	免疫学	基礎研究（マラリア）
フィールド	森田公一	熱帯医学研究所・教授	ウイルス学	基礎研究部会長(新出現ウイルス)
	山城 哲	熱帯医学研究所・教授	微生物学	基礎研究(ベトナム海外拠点)
	金子 聡	熱帯医学研究所・教授	公衆衛生学	社会技術開発(ケニア海外拠点)
	金子 明	熱帯医学研究所・客員教授	マラリア学	基礎研究（PNG 海外拠点）
	皆川 昇	熱帯医学研究所・教授	衛生動物学	基礎研究（媒介昆虫）
	山本太郎	熱帯医学研究所・教授	国際保健学	社会技術開発研究部会長
	有吉紅也	熱帯医学研究所・教授	感染症学	人材育成部会(熱帯医学修士)
	森内浩幸	医歯薬学総合研究科・教授	小児科学	社会技術開発研究(臨床疫学)
創薬科学	池田正行	医学部創薬科学	創薬科学	医薬品開発
	甲斐雅亮	医歯薬学総合研究科・教授	機能性分子化学	医薬品開発（診断）
	小林信之	医歯薬学総合研究科・教授	感染症学	基礎研究（HIV/ エイズ）
	河野 茂	医歯薬学総合研究科・教授	感染症学	医薬品開発（臨床研究）
	丹羽正美	医歯薬学総合研究科・教授	神経薬理学	医薬品開発（臨床研究）

【人材育成】

- 1) 大学院生の育成事業を開始した。1年27名, 2年11名, 3年8名, 4年16名(うち留学生21名)

※2008年10月1日現在

- 2) ポスドクの育成事業として, ポスドク4名・特任助教3名を採用した。

- 3) 外国人留学生の補助事業を開始し, GCOE外国人留学生4名を採用した。

【活動報告】

- 1) 国際シンポジウム「The 3rd Nagasaki Symposium on Tropical and Emerging Infectious Diseases and The 9th Nagasaki-Singapore Medical Symposium」

【2009年10月10日(金)・11日(土) 医学部良順会館】

講演者：シンガポール国立大学医学部長 John Wong 博士, 理研シンガポール所長 柿原健一郎博士, 理化学研究所感染症研究ネットワークセンター 永井隆博士, 北里大学生物科学研究所 大村智博士, 南洋理工大学生物化学学院 (シンガポール) Peter Preiser 博士, Zbynek Bozdech 博士, シンガポール国立大学楊潞齡医学院 Kevin Tan博士, Dale Fisher博士, Koh Dow Rhoon 博士, Vincent Chow博士, 国立感染症研究所 宮崎義継博士, 岐阜大学 人獣感染防御研究センター 中村寛則博士, 分子細胞生物化学研究所(シンガポール) 井上雅文博士, カロリンスカ研

究所(スウェーデン) 金子明博士, シンガポール免疫学ネットワーク マラリア免疫生物学研究室 Laurent Renia博士

2) 平成20年度教育改革プログラム合同フォーラム

【2009年1月12日(月)・13日(火) パシフィコ横浜】

3) ロンドン熱帯医学校とのアフリカロンドン長崎奨学金の設立【2009年3月2日(火)】

Inauguration of Africa/London/Nagasaki Scholarship Establish by London School of Hygiene and Tropical Medicine and institute of Tropical Medicine (NEKKEN).

4) 市民公開セミナー「地球温暖化と水資源問題の現在の課題」

【開催日：2009年3月2日(火) 医学部良順会館】

講演者：長崎大学生産科学研究科 教授 武藤鉄司,
日経BP社環境経営フォーラム事務局長 深尾典男,
東京大学生産技術研究所 教授 沖大幹

5) 国立科学博物館 企画展「熱帯感染症と『たたかう』長崎大学」

【2009年3月7日(土)～15日日 国立科学博物館(東京・上野)】来場者数11,087名

講演者：長崎大学熱帯医学研究所 青木克己教授, 国立民族学博物館 松園万亀雄館長,
長崎大学医学部保健学科 大西真由美教授, 長崎大学熱帯医学研究所 嶋田雅暁
教授, 長崎大学環境科学部 増田研准教授, NPO法人ロシナンテス 川原尚行理
事長

6. 2 熱帯医学研修課程

I. 実施状況

平成20年度(第31回)熱帯医学研修課程は、平成20年6月1日から8月31日まで3ヶ月間にわたり、定員15名で実施された。

本年度熱帯医学研修課程運営委員は、学外12名、所外(学内)2名、所内10名に委嘱した。運営委員会は、平成20年8月28日本研究所にて、学外委員7名、所外(学内)委員1名、所内委員7名の参加をもって行われた。

II. 応募状況・選考方法

本年度は定員15名に対し33名の応募があった(競争率2.2倍)。受講者の職種内訳は 医師5名、看護師6名、薬剤師2名、臨床検査技師1名、衛生管理官1名であった。

選考は、所内各分野から選出された13名の教務委員が応募者に対して順位をつけた後、結果

を照合し順位の低い者から除外する、従来と同様の方法をとった。なお順位づけに関する基準は設けず、教務委員の判断によるものとした。また選考された研修生15名に学力等の問題はみられず、選考方法および結果に関し、研修生、教務委員、運営委員のいずれからも、検討課題等は出されなかった。

Ⅲ. カリキュラム

本年度カリキュラムは、昨年度同様分野横断的な理解を促す目的で、熱帯医学分野(総論・各論、実習、臨床医学)と実務的分野(国際保健・国際協力等の専門家による講義)を織り交ぜながら配置した。昨年度改善要望が出された点；講義内容の重複を避ける、講義時間数の増減等については、可能な限り対応した。研修生からは講義内容、講師、時間数等に関するさまざまな意見が出たが、全般的には高い評価が得られた(詳細は後述)。

なお本年度より、講義ライブラリー作成を目指し熱帯医学専攻(修士課程)および研修課程講義のビデオ撮影を開始した。全体の半数以上の講師からは録画の同意が得られたが、未公開データを含むスライドがある場合など、同意が得られず録画できない場合もあった。ビデオはパソコンで視聴できるよう編集し、環境を整えて8月半ばより公開した。試験前に研修生数名の利用があったほか、所内からも視聴希望があり、好評を得ている。ビデオ視聴については現在まで問題ないが、ビデオシステムの不具合調整(本年度は研修課程6月分が録画できていなかった)、録画への事前の同意書取得等は、今後の検討課題である。

Ⅳ. 試験

2005年度(第28回)より、研修修了時に3ヶ月の総復習を目的とした試験を導入した。所内の各分野に3～6問の出題を依頼し、計50問の選択試験問題を作成した。内容は概ね行われた講義に基づいており、研修生からは内容に関する改善要望は少なかった。全体の平均得点は68.7点であったが、職種で若干の差がみられた(医師77.6、看護師59.5、その他71.3)。

試験の目的は研修内容の復習であるため、試験結果は修了の要件とはされていない。研修生からは、復習の機会にできた旨の意見が多かったが、分野ごとの試験実施等の要望もあり、試験の位置づけや実施時期については検討が必要である。

Ⅴ. 研修生による評価

- ・授業評価表：研修生が毎講義終了時に記入・提出し、結果は各分野・講師に直接返却されている。
- ・本年度は全講義、試験終了後の8月27日、研修課程終了時ワークショップとして、職種ごとのグループで研修課程全般について論議した結果を以下に示す。

- 1) カリキュラム・学習内容：非常に充実した内容で、貴重な体験ができた。
 - ・全グループで好評だった講義・実習
 - 6/9-17 寄生虫学講義・実習（熱研・寄生虫学）
 - 6/18 感染症予防の基本的な考え方（感染研・大山先生）
 - 6/26 SARS（東北大・押谷先生）
 - 6/30 アフリカのHIV（聖母大・徳永先生）
 - 8/19 HIVと人権（NGO HIVと人権センター・尾澤先生）
 - ・検討の要望

講義内容の重複，細菌学の内容拡大，GPS/GIS：現場で使えるソフト使用希望，グループエクササイズ希望，細菌，ウイルス，免疫の実習内容が不消化（看護師）
 - ・取り入れてほしい・増やしてほしい講義

栄養学，疫学実習，STD（梅毒など），真菌，熱帯地域の皮膚疾患，母子保健，キャリアアッププラン
 - ・時間配分：5時限までは多すぎて頭に入らない。お盆休みをなしにして，4時限までにしてほしい。
- 2) 事務，サポート体制：全般に不便はなかった。
 - ・パソコン，ネットワーク関係の環境は非常によかった。宿泊施設の紹介，サポートも助かった。
 - ・講義室のPC：講師によってはMACで使えなかったり，録画システムの周知不足で講義時間が無駄になる場合があった。同意書の事前取得を希望。
- 3) 研修課程参加目的と達成度：全般に満足度が高い。

知識が向上し，視野が広がった，今後の目標が見えた，モチベーションが上がり選択肢が増えた，など。

VI. 本年度実施状況のまとめ

カリキュラムをはじめ研修生から全般に良好な評価が得られ，大きな問題なく実施できたと思われる。2005年度以降変更のあった分野横断的カリキュラム構成，コーディネーターの設置，試験の実施等についても，よい方向で定着しつつあるようである。しかし一方で，例年類似した内容の改善要望が出されていることも事実である。講義内容や講師の調整は難しい部分もあるが，各分野に協力を仰ぎながら可能な限り反映させる必要がある。昨年度も検討課題として挙げられていたシラバスの充実，Minimum essentialの明確化，コースの方向性提示および学習の指針として効果的だったが，講義内容の重複を避けるためにも重要であり，引き続き検討課題と位置づけられるべきであろう。

研修課程参加者は多くが修了生からの情報などで応募しており、熱帯地域で活動する人々での本研修課程の認知度は低くないが、ポスターやホームページによる宣伝効果はまだ低いようである。より広い範囲での人材確保のため、今後ホームページの充実；写真を含む講義・実習の紹介、修了生の感想の掲載などによる情報発信の必要があるだろう。また研修課程同窓会（ATOMECC）のネットワークを利用し、過去の修了生に対する講義ビデオ視聴による継続学習の機会提供、キャリアパスガイドとして現研修生に経験談を講演してもらう、また求人情報の提供など、相互に交流を保つようにしたい。

本課程での学習を今後熱帯地域で活動する人々に、ひいては熱帯地域住民の健康の向上に有益なものとするために、より明確で系統立った熱帯医学研修課程構築を目指したい。

（文責：研修課程コーディネーター 阿部朋子）

6. 3 ケニアプロジェクト拠点

長崎大学ケニアプロジェクト拠点は、平成17年度（2005）からスタートした文部科学省特別教育研究経費による「連携融合事業：新興・再興感染症研究ネットワークの構築」を起爆剤として、ケニア中央医学研究所（Kenya Medical Research Institute：KEMRI）内に設置された海外研究教育活動拠点である。

「連携融合事業」では、

1. 新興・再興感染症および熱帯病の研究高度化を目的に、
2. 熱帯地に研究教育拠点を構築し、
3. 現地研究者と共同で、
4. 長期・継続的かつ広範囲の調査研究、
5. 若手研究者の現地教育を実施する。
6. JICAとの連携により、開発援助の側面からも成果を現地住民へ還元する。

となっており、これを完遂するために、下記の三本柱を建て、研究教育活動を行っている。

1. 人口静態動態サーベイランスシステム（DSS：Demographic Surveillance System）の構築と運営（西ケニア，スバ県）
2. 病原微生物を扱う高度安全レベル3実験施設（P3ラボ）を中心とした実験室の構築と運営（ナイロビ）
3. 病原体媒介生物（蚊，貝）のモニタリングシステムの構築と運営（スバ県，クワレ県）

連携融合事業4年目にあたる平成20年度は、西ケニアにおけるDSSは、平成19年から20年に

かけての干ばつ，平成20年1月の大統領選挙における政治的社会的混乱で荒廃しかけたため再構築し，住民の観察を継続した。P3ラボには，これまでの細菌性下痢症の研究に，ウイルス性下痢症の研究，蚊媒介性のウイルス出血熱の研究が加わった。病原体媒介生物モニタリングにおいては，西ケニア地区でマラリア媒介蚊の生態学的観察を継続する一方，ケニア全土の媒介蚊の分布調査も開始され，クワレ地区ではビルハルツ住血吸虫症伝搬員の経時的観察が継続された。

【研究活動】

拠点におけるすべての活動はケニア人研究者との共同研究として行われている。KEMRIのScientific Steering Committee (SSC) およびEthical Review Committee (ERC) で承認され，平成20年度に継続中の研究は下記の通りである。

No	承認番号	承認年	研究タイトル	日本主任研究者	所 属
1	1088	2006	Establishment of Demographic Surveillance System in Kenya (Suba and Kwale Districts): A platform for Development of Demographic Health Information System to Support Research and Control of Infectious Diseases and Health-related Problems	金子 聡	生態疫学
2	1089	2006	Geographic distribution of malaria vectors in Kenya	皆川 昇	病害動物
3	1275	2007	Factors which promote the local people's motivation for better health in Suba and Kinango Districts of Kenya.	駒澤大佐	国際保健 (大学院生)
4	1310	2007	A large-scale field trial to evaluate an integrated malaria vector control measure targeting immature stages in Suba District	皆川 昇	病害動物
5	1316	2008	Studies on decoy snails in Kwale, Kenya - A new tool for control of schistosomiasis heamatobia	青木克己	寄生虫
6	1323	2008	The study on the diarrheagenic agents as intestinal and invasive infection in Nairobi and Western Kenya	一瀬休生	生態疫学
7	1304	2008	A seroprevalence survey for yellow fever virus exposure in humans at selected health facilities in Kenya	森田公一	ウイルス
8	1376	2008	Optimization & tests of a reverse transcriptase loop amplification test for Onyong'nyong virus	森田公一	ウイルス
9	1409	2008	Optimization of loop mediated isothermal amplification for the rapid diagnosis of Rift Valley Fever in Kenya	森田公一	ウイルス

この他，アジア・アフリカ学術基盤形成事業 (AA platform) の二年目を継続し，11月27日，ナイロビにおいて“アフリカにおける「やまい」に対する多角的取り組み”のタイトルの元にJSPSセミナーを実施した。コメンテーターとして野口英世アフリカ賞第一回受賞者のProf. Brian Greenwood (LSHTM, UK) とProf. Miriam K. Were (NACC, Kenya) が参加した。

国際熱帯医学マラリア会議 (September 29 – October 3, 2008, Jeju, Korea), The 3rd East African Health and Science Conference (March 23 – 27, 2009, Nairobi, Kenya) に参加し発表した。

【教育活動】

日本人学部学生の正規科目として、滋賀医科大学学生4名の現地研修(8月-9月)、長崎大学医学部学生2名のリサーチセミナー(2009年1-2月)、長崎大学医歯薬学研究科学生1名の現地研究、米国人ミネソタ大学学生1名の現地研修(10月)を引き受ける一方、ケニア人学部学生の実習受け入れ、大学院学生(修士)の指導を行った。

国際健康開発研究科、熱帯医学研修課程等の講義を、日本に出向いて行い、ケニア人研究者1名をバイオセイフティー講習会(P3講習会)(BSL3の病原体取り扱い訓練)のために熱研に派遣し研修を行った。

9月9日、10日、KEMRI研究者を対象にバイオセイフティー講習会(P3講習会)を行った。

国際寄生虫対策東南アフリカセンター(Eastern and Southern Africa Centre for International Parasite Control: ESACIPAC)による第三国研修に講師を派遣した(2-13 March 2009)。

【社会貢献】

ケニア保健省(医療サービス省と公衆衛生省に分かれている)の要請を受け、下痢症集団発生時の原因究明を行い、流行収束に向けた助言、支援を行った。コレラアウトブレイク時には現地調査を行い、細菌学的結果を随時報告した。

野口英世アフリカ賞受賞者(Prof. Brian Greenwood, Prof. Miriam K. Were)によるケニア市民を対象とした講演会を、11月28日ナイロビ大学タイファホールにおいて、在ケニア日本大使館、日本国際協力機構、日本学術会議、長崎大学の共催で開催した(参加者約600名)。

ナイロビ日本人学校の要請を受け、小中学生及び父兄に対し授業を行った。

JICAとの協力を強化するため、2009年1月から「草の根技術協力」を開始し、事務職員1名が加わった。同時にKEMRIに派遣された海外青年協力隊隊員1名との共同作業として、KEMRI若手研究者に対する安全実験手技の訓練を開始した。

【受賞】

長崎大学(熱研および医学部、病院)の長期にわたるアフリカにおける活動の歴史と、その結果として実現した熱研の「ケニア研究教育拠点」の設置と推進が評価され、文科省科学技術政策研究所の「ナイスステップ2008」のひとりに拠点長の嶋田が選ばれた。

【運営その他】

5月、連携融合事業「新興・再興感染症研究ネットワークの構築」の中間自己評価報告書を作成提出した。

長崎大学の展示会、国立科学博物館「上野の山発シリーズ」「アフリカの自然・開発・そこ

に住む人々」の準備，実施に協力した。

長崎大学本部，熱研から事務職員が視察に訪れた。

現地派遣事務職員が年度末を以て現地雇用事務職員と交代した。

（文責：嶋田雅暁）

6. 4 ベトナムプロジェクト拠点

ベトナム拠点はH20年度でプログラム開始4年度目となった。拠点の活動は運営に関しても研究活動に関しても軌道に乗った年であった。5月にはフレンドシップ研究室の引っ越しを行った。引っ越し先であるハイテクセンターの整備が遅れ一度計画した日程を延期した後の事であった。日本人，ベトナム人スタッフの異動，着任が多くあり人の出入りが活発な1年であった。拠点プログラム全体行事の一環である感染症研究ジョイントフォーラムの主催は大きなイベントであった。また同時にハノイ在住の邦人向け市民公開講座などを開催し，研究活動・プロジェクト広報活動も多岐にわたった。

プロジェクトの運営に関する事項

1 フレンドシップ研究室の引っ越し

1. 1 5月12日-14日にハノイ拠点フレンドシップは国立衛生疫学研究所（NIHE）本館3階315室からハイテクセンター2階209室（研究室），205室（事務所），216室（資料保存室）に引っ越した。

2 長崎拠点スタッフ人事

2. 1 4月，角田隆博士着任（昆虫媒介性感染症班）
2. 2 5月，Ms. Bui Thu Tra採用（administrative assistant）
2. 3 6月，堀田こずえ博士着任（動物由来感染症山城研究班）
2. 4 7月，上地玄一郎博士着任（動物由来感染症山城研究班）
2. 5 7月，鈴木基助教離任（ヒトーヒト感染症研究班）
2. 6 9月，吉野弘博士着任（ヒトーヒト感染症研究班）
2. 7 9月，野内英樹教授離任（ヒトーヒト感染症研究班）

3 主な長崎拠点訪問者

3. 1 4月，竹田美文WHO専門官が長崎大学拠点を訪問。コレラ流行に関する情報交換を行う。
3. 2 8月，金子原二郎長崎県知事を団長とする長崎ーベトナム友好協会ベトナム訪問団

が長崎大学拠点および国立衛生疫学研究所（NIHE）視察した。富岡勉衆議院議員，平山謙二所長ら合計25名が来訪した。

- 3.3 12月，山内俊夫文部科学副大臣を団長とする一行が長崎大学拠点およびNIHEを視察した。

4 長崎大学ベトナム拠点で主催した学会・講演会

- 4.1 10月，長崎大学ベトナム拠点市民公開講座。在ベトナム日本大使館の後援のもとベトナム在住日本市民への感染症対策啓発活動の一環として市民公開講座を開催。約100名の参加者があり，京都産業大学の大槻公一先生が「鳥インフルエンザから新型インフルエンザ」，岡山大学インド拠点の竹田美文先生が「コレラ：身近な熱帯感染症」，長崎大学熱帯医学研究所の高木正洋先生が「たかが蚊，されど蚊，蚊学入門」というテーマで講演され，参加者からは好評を得た。

- 4.2 10月，感染症研究拠点ジョイントフォーラム。10月に新興・再興感染症拠点形成プログラムのもとで東南アジアに展開する拠点間の情報交換と連携強化を目的として長崎大学拠点において「The Forum of the Network of Research Centers on Infectious Diseases」が開催された。長崎大学ベトナム拠点の他，大阪大学タイ拠点，岡山大学インド拠点，神戸大学インドネシア拠点，や動物衛生研究所，国立国際医療センター，国立感染症研究所から150名の研究者が参加し活発な発表討論が行われた。

5 プロジェクト運営会議（Steering Committee Meeting, SCM）

- 5.1 本年度は合計5回SCMを開催し，プロジェクト運営上重要な議事やprogress reportを行った。

研究活動に関する事項（抜粋）

I. 動物由来新興・再興感染症研究班

鳥インフルエンザ：北部ベトナムのナムディン省で800羽の家禽より検体採取し，ウイルス分離および鳥インフルエンザウイルスに対する特異赤血球凝集阻止（HI）抗体を検索した。また野鳥約100羽を同地区で採集し同様の検討を行った。家禽のHI抗体保有率は低いものであった。また野鳥からは同抗体は検出されなかった。ウイルス分離は実施中である。また19年度1月に家禽から採取したサンプルより高病原性H5N1亜型の鳥インフルエンザウイルスが1株分離された。治療予防のためのヒト型抗体開発に関してはクレード2.3.4型感染後生還したボランティアよりリンパ球の供出を受け，ヒト抗体ライブラリーを作成した。その中から2.3.4型に強く結合する候補抗体12種を選定し現在中和活性を検討中である。ニパウイルス等の新興感染症ウイルス：ベトナム北部を中心に4省（Bac Giang, Hoa Binh, Tuyen Quang, Quang Binh）においてコウモリを捕獲し，ニパウイルス及びSARSコロナウイルス，ヘルペスBウイルスの調査

を開始し、抗体保有の疑いのあるコウモリ種 (*Rousettus leschenaulti*) が見つかった。今年度は調査地域をベトナム中部 (Dak Lak, Dak Nong) に広げ、117匹のオオコウモリ種、89匹の小コウモリ種について同様の血清疫学調査を実施した。昨年同様Hoa Binh省で捕獲した*Rousettus leschenaulti*にニパウイルス及びSARSコロナウイルスに対する抗体陽性例が確認され、またDak Lak省で捕獲した*Cynopterus sphinx*にも同ウイルス種に対する抗体保有が確認された。これらELISA試験で陽性を示した血清について長崎大学熱帯医学研究所のBSL-3 実験施設で中和試験を行ったところ中和抗体価を有する検体も確認された。(関連発表論文：5 編)

Ⅱ．昆虫媒介性感染症研究班

デング熱媒介蚊の主要発生源 (水瓶) に、新規常温揮散型ピレスロイド樹脂製剤処理したときの、成虫の産卵抑制効果、幼虫に対する致死効果を調べる。また、ベトナム各地において採集された媒介蚊幼虫のピレスロイド感受性を調査し、各コロニーのKDR遺伝子頻度を、特にドメインⅡに存在する既知の塩基置換に注目して明らかにする。ウイルス性脳炎媒介蚊では、ベトナム中央部 (Quang Binh省) および南部 (Tay Ninh省) で蚊を捕集し、蚊からのウイルス分離を実施する。水瓶の蓋へのメトフルトリン樹脂製剤処理により、幼虫の致死作用と成虫の産卵抑制効果を確認した。しかし同製剤は、ベトナムが天敵による蚊幼虫防除法として実施中のコペポードにも影響を与えたので、導入方法などに更なる改良が必須であることが判った。ドメインⅡにおける塩基置換による *kdr* 遺伝子は、67カ所中 1 カ所に確認されるに留まり、ベトナムにおける上記の塩基置換は現在のところ低頻度であると思われた。ベトナムで捕集した17種の蚊からウイルス分離を行ったところ、日本脳炎ウイルス、ナムデウィンウイルス、バンナウイルス、および *Culex flavivirus* が分離された。バンナウイルスについては、ベトナムで初めてその存在を確認し、分子疫学解析を実施した。現在ベトナム株を用いた血清診断試薬が完成し疫学調査を準備している。(関連発表論文：4 編)

Ⅲ．経口感染症研究班

本研究の目的である熱帯における腸管感染症についてベトナム国内に設定したフィールドであるハイフォンとナチャンの2つの小児病院から得られる臨床情報と検体、およびこれらを用いた分子疫学的解析による実態把握を目指して継続的研究を行った。ハイフォンでの調査研究は2006年9月から開始し、2008年8月で検体収集を終了した。一方、ナチャンでの調査研究は2007年5月から開始し臨床情報と検体の収集を行い、ハイフォンと同様に2008年8月で検体収集を終了した。ハイフォンの検体の解析からはこの地域において今までまれであったG3ロタウイルス株が継続して出現していることが確認された。また、検出された株について塩基配列を決定し分子進化学的解析を行った。一方、ナチャンでの調査の結果からはG3ロタウイルス株が

37%と最も多かったが、G1株も33%に見られ、ハイフォンのような絶対的優位は見られなかった。しかし、ハイフォンでもナチャンでも5歳未満の急性下痢症の原因となっている病原体は、ロタウイルス、ノロウイルス、病原性大腸菌であり、赤痢菌、サルモネラ、コレラ菌などの腸管細菌は相対的重要性が低いことが確認された。(関連論文：1編投稿中)

IV. ヒト-ヒト感染症研究班

我々はカンファ県に、感染症に関与する病原体・宿主・環境因子を包括的に研究できる、量的にも質的にも国際級の臨床疫学フィールドを構築するために研究活動を実施している。第1フェーズとして、ニャチャン市および隣接するニンファ郡における人口世帯・環境調査を実施し、対象地域住民(約7万6千世帯、36万人規模)と各世帯の感染症罹患リスク因子を把握するとともに、対象とした重症小児感染症(肺炎、下痢症、デング熱)の発生状況について調べた。第2フェーズとして、カンファ県病院小児科病棟に医師を常駐させ、現地臨床医の臨床診断の標準化を通じ、これまで熱帯地では困難であった肺炎の正確な臨床分類を可能とした。さらに、19種類の呼吸器ウイルス・細菌病原体を包括的に検出・定量できるMultiplex PCRを長崎大学熱帯医学研究所にて確立させ、同病院小児病棟入院患者ほぼ全例(年間約千症例)へ応用することに成功した。このことにより、熱帯地では他に例を見ない高い質の小児肺炎モニタリングシステムを確立させた。第3フェーズとして、本臨床疫学フィールドを①宿主遺伝子多型因子に関する基礎医学研究へ資するため、②CMV, TTV, Lymphocytic Choriomeningitis Virus(LC-MV) 垂直感染の乳幼児神経発達への影響を調べるため、③新生児の死亡原因の詳細を明らかにするためにバースコホート研究を計画している。(関連発表論文：3編)

(文責：山城 哲(熱帯医学研究所病原体解析分野、ベトナム拠点担当))

6. 5 フィジープロジェクト拠点

大洋州予防接種事業強化プロジェクト(J-PIPS)は、大洋州の13カ国を対象としたJICA(独立行政法人国際協力機構)の広域技術協力プロジェクトであり、平成17年3月に5カ年の予定で始まった。長崎大学はJICAより技術協力契約を受託し、熱帯医学研究所病原体解析部門の森田公一教授を業務主任者として、長期専門家3名がフィジー国スバ市にあるフィジー拠点(フィジー医薬品供給センター)に赴任し活動している。

本プロジェクトの主たる目的は、ポリオ、麻疹、B型肝炎、インフルエンザ桿菌等ワクチンで予防可能な疾病を対象とした予防接種の強化(政策、疫学、モニタリングシステム、検査システム等の強化)、ワクチンのロジスティックス、コールドチェーン機材維持管理、EPI関連廃

棄物処理に関する地域内研修システムの構築及び対象各国における人材の能力向上である。人材育成に関しては、各国の予防接種事業指導者を対象とした「地域研修」をスバ市において毎年実施すると共に、各国の末端レベルの医療従事者等を対象とした「国別研修」（技術補完研修）をプロジェクトの対象各国に対して実施している。

第五年次にあたる平成20年度の主な活動は以下の通りである。

I．地域研修拠点の整備（フィジー医薬品供給センター（FPS））

平成20年4月から短期専門家2名を含む延べ7名の専門家をフィジー国のFPSへ派遣し、太平洋諸島地域の研修拠点となるフィジー保健省のプロジェクトカウンターパートに対して、各専門分野における技術移転を実施した。

本年度は、プロジェクト活動をより効率的かつ効果的に行うため、フィジー国を拠点としたプロジェクト実施体制の整備及びフィジー国における研修機能の向上のための活動を継続した。さらに、プロジェクト活動終了後もこれまでプロジェクトが行ってきた活動が自発的に継続されるよう、現地JICA事務所及びフィジー国保健省をはじめとした関係機関・関係者との協議に重点を置いた。

II．各国の予防接種事業の支援にかかるドナー間調整

本プロジェクトはPIPS（Pacific Immunization Programme Strengthening）と称する地域の共同戦略のもと、JICAのみならずWHO、UNICEF、AusAID（オーストラリア）、NZAID（ニュージーランド）や大洋州機構（SPC）、米国CDCなどの国際機関や各国の援助機関と共同でプロジェクトを遂行してゆくことを1つの特徴としている。

それぞれの援助に重複がなく、また、適切な組み合わせによる相乗的な効果が上がるよう、本年度も定期（毎月）および不定期にこれらの関係機関と連絡協議会を共催し、各種調整を行った。本年度は、パートナー連絡協議会（月例PIPS会議）に対して、AusAID及びNZAIDからの積極的な参加が見られた。

III．2008年度PIPS年次会議の共催

平成20年5月12日～16日にクック諸島国ララトンガにおいて、WHO、UNICEF、SPCなどの国際機関やAusAID、NZAIDとの共催により、大洋州諸島国のEPI担当者を招き、第4回PIPSワークショップ（PIPS年次会議）を開催した。PIPS会議では、大洋州地域のEPIの現況、課題、戦略等につき関係者全員の理解を深めると共に、J-PIPSプロジェクトの効果的アプローチ、ならびにプロジェクトの実施計画、支援内容、およびモニタリング等につき関係者間で協議を行った。なお、同会議にはJICAのプロジェクトの中間評価団も出席し、プロジェクトの中間評価結

果及び今後の活動方針等につき関係者に対して報告した。

IV. 第4回地域研修

平成20年11月17日～21日にWHO、UNICEF、AusAIDなどの関連機関と協力し、フィジー保健省との共催により第4回地域研修を開催した。研修にはプロジェクト対象国以外の2カ国(トケラウ、パプアニューギニア)からの参加もあり、総計15カ国から合計28名の研修生が参加した。

地域研修は必要知識を新たにするための講義形式の研修に加えて、モニタリング活動、安全注射やコールドチェーン整備計画、コールドチェーン機材の日常保守管理・修理等にかかる実技講習も内容に含んでいる。

地域研修の終了後に研修管理委員会にて上記研修の内容、参加者等につき総括すると共に地域研修報告書を作成した。

V. 各国における調査と個別指導の実施

ワクチンロジスティクス専門家が、キリバス国、ソロモン諸島国を訪問し、各国の保健省の予防接種担当官と共に保健医療施設における予防接種活動、ワクチン管理、アウトリーチ活動等にかかる技術指導及び実態調査を実施した。また、WHOが開発し推奨する「効率的なワクチン管理評価ツール(EVSM)」に基づき、中央及び末端レベルにおけるワクチン管理能力(ワクチン温度管理、ワクチン数量管理、アウトリーチ活動等を含む)の評価を行った。評価を通じて改善が必要な分野を把握し、今後の活動内容の策定及びプロジェクト成果のモニタリングに反映させた。

コールドチェーン維持管理専門家がミクロネシア連邦及びバヌアツ国を訪問し、コールドチェーンの日常維持管理にかかる看護師向け指導及び修理技術者に対する本格修理技術に係る個別指導を行った。ミクロネシア連邦では、プロジェクトが供与したソーラー式冷蔵庫の据付を管理すると共に同冷蔵庫の日常保守管理にかかる指導を行った。

また、プロジェクトの医療廃棄物処理専門家及び研修管理専門家がソロモン諸島国を訪問し、予防接種により生じた使用済み注射器・針の安全廃棄を含む医療廃棄物の廃棄状況にかかる現地調査を実施した。同専門家は、日本のロータリークラブが同国に対して供与したソーラー式焼却炉の使用状況を調査した。

研修管理専門家は、ソロモン諸島国保健省関係者及びプロジェクトが過去に実施した地域研修の参加者(帰国研修員)と協議し、医療廃棄物処理にかかる研修会の実施を企画・立案すると共にプロジェクトが実施した研修事業の効果及び今後の研修ニーズを把握した。また、同専門家は、ツバル国を訪問し、同国の国家予算に占める保健省及び県(州)レベルでのEPI活動

費を明らかにすると共に、保健省におけるEPI活動の主管部局（組織構造）の確認，研修受講者及びヘルスセンター看護師へのヒアリング調査を通じてEPI活動実施状況の調査を行った。

VI. B型肝炎感染率の調査の実施

WHOは西太平洋地域のB型肝炎ワクチンを定期予防接種に導入済みの全ての国に対して，西太平洋地域の予防接種目標である「2010年までに5歳小児のHBsAg陽性率を2%以下とする－中間目標」に資するための活動として，対象小児のHBsAg（HBs表面抗原）調査の実施を推奨している。

フィジー国では，新生児および小児のB型肝炎感染率（HBsAg（HBs表面抗原））およびB型肝炎に対する抗体保持率（anti-HBs）等は1998年にキリバス，バヌアツ，トンガと共に実施された調査データがあるのみで，最近のデータはない。

かかる状況により，フィジー保健省は小児のB型肝炎ウィルスの感染率の把握およびB型肝炎ウィルスの抗体保持率の把握を目的とした血清学的調査の実施を策定し，その実施につきプロジェクト専門家が技術支援を行った。

同調査の対象地域は中央，西部，北部の3ヶ所であり，フィジー国保健省栄養部が企画する小児のビタミンA，亜鉛，鉄分，貧血，ビタミンB12の微量栄養素調査に乗じて実施された。プロジェクトの専門家は対象3地域の地域保健局および採血実施場所となる各地区の中央病院をそれぞれ訪問し，調査概要の説明及び調査工程の策定等を行った。調査の実施に際しては，各地域の公衆衛生対策責任者及び各地区病院責任者，公衆衛生看護師，栄養担当者等と共に，参加者の登録，参加小児の母親等の参加意思の確認，質問書への記入を通じた予防接種歴等関連情報の収集，血液サンプルの番号付け（sample coding）等を行った。

5歳未満児の合計430人より血液サンプルの採取を行うと共に採取した血液サンプルの適正な保存等につき指導及び検体搬送にかかる各種調整を行った。

また，採取した血液検体の検査に際しては，フィジー国の公衆衛生検査機関であるMataika Houseに対して熱帯医学研究所が必要な試薬の提供を行うと共に，プロジェクト総括が検査技師に対して技術指導を行った。

7 外部資金による研究

7. 1 文部科学省科学研究費補助金（平成20年度）

研究種目	研究代表者	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
特定領域研究	教 授・平 山 壽 哉	7,900	—	ヘリコバクター・ピロリ VacA 毒素の毒性発現機序	19～20年度
基盤研究(A) 海 外	教 授・有 吉 紅 也	7,200	2,160	北タイにおける HIV 伝播とエイズ病態に関する宿主遺伝子多型研究	18～20年度
基盤研究(A) 海 外	教 授・高 木 正 洋	10,200	3,060	ベトナムにおけるデング熱媒介蚊の総合防除戦略構築	19～21年度
基盤研究(A) 一 般	教 授・平 山 壽 哉	12,700	3,810	ヘリコバクター・ピロリの VacA 毒素の毒性発現と CagA の相互作用解析	19～21年度
基盤研究(B) 海 外	教 授・森 田 公 一	2,900	870	デング出血熱重症化に関与するウイルス遺伝子多型性の研究	18～20年度
基盤研究(B) 海 外	教 授・青 木 克 己	3,900	1,170	非中間宿主員のミラシジウム誘引力を利用した新しい住血吸虫制御戦術、罔目の研究	19～21年度
基盤研究(B) 海 外	講 師・上 村 春 樹	2,800	840	マラリア原虫の薬剤耐性：検出、同定と遺伝子解析、地域性と時間変化、拡散の予測へ	19～21年度
基盤研究(B) 海 外	教 授・一 瀬 休 生	3,000	900	熱帯地における下痢原因菌の病因論とその疫学的研究	19～22年度
基盤研究(B) 海 外	教 授・金 子 修	4,700	1,410	三日熱マラリア原虫感染赤血球表面分子 PvSTP の集団遺伝学解析	20～22年度
基盤研究(B) 海 外	教 授・山 城 哲	3,500	1,050	ベトナムの実験農場における高病原性鳥インフルエンザウイルス浸淫状況調査	20～22年度
基盤研究(B) 一 般	教 授・山 本 太 郎	6,100	1,830	G 型肝炎ウイルス二重感染が HTLV-1 母子感染に与える影響：後向コホート研究	20～22年度
基盤研究(C) 一 般	准教授・栗 林 太	1,600	480	ナンセンス変異により発生する中途ストップコドンの除去機構の解明と応用	19～20年度
基盤研究(C) 一 般	教 授・金 子 修	2,000	600	マラリア原虫リガンドの細胞内輸送機構の分子基盤	19～20年度
基盤研究(C) 一 般	准教授・森 本 浩之輔	1,300	390	アポトーシス細胞の貧食除去に着目した肺気腫の新しい治療戦略	20～22年度
若 手 研 究 (スタートアップ)	研 究 支 援 員・久 恒 順 三	1,340	402	ピロリ菌の VacA 毒素の毒性発現における受容体 RPTPalpa の機能解析	20～21年度
萌 芽 研 究	助 教・砂 原 俊 彦	600	—	森林開発と人口増加・移動がもたらす感染症リスクの質的・量的評価	19～20年度

研究種目	研究代表者	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
若手研究 B	助 教・NGUYEN HUY-T	1,500	450	繰り返し感染あるいは再燃患者における脳マalaria抵抗性機序のマウスモデルによる解析	20～21年度
若手研究 B	助 教・矢 幡 一 英	1,700	510	マalaria原虫の転写干渉機構とその制御	20～21年度
若手研究 B	助 教・橋 爪 真 弘	1,800	540	バングラデシュにおけるコレラ流行と気候変動に関する疫学研究	20～22年度
合 計	19 件	76,740	20,472		

7. 2 厚生労働科学研究費補助金(平成20年度)

研究事業名	研 究 者	研 究 課 題 名	研究経費 (千円)	区 分
社会保障国際協力推進	教 授・平 山 謙 二	寄生虫疾患の病態解明及びその予防・治療をめざした研究	16,225	主任研究者
社会保障国際協力推進	教 授・平 山 謙 二	寄生虫疾患により引き起こされる脳機能異常の画像診断	235	分担研究者
新興・再興感染症	教 授・平 山 謙 二	動物由来感染症のコントロール法の確立に関する研究	3,800	分担研究者
新興・再興感染症	教 授・森 田 公 一	我が国における日本脳炎の現状と今後の予防戦略に関する研究	2,200	分担研究者
新興・再興感染症	教 授・野 内 英 樹	輸入感染症としての多剤耐性結核の対策・制御に関する研究	800	分担研究者
エイズ対策	教 授・山 本 太 郎	海外におけるエイズ発生動向, 調査体制, 対策の分析	2,300	主任研究者
エイズ対策	教 授・有 吉 紅 也	HIV 感染とエイズ発症の阻止および治療に関わる基礎研究	4,500	分担研究者
政策創薬総合	教 授・有 吉 紅 也	新型チップ等を用いた第 22 染色体新規 SNPs 多型の網羅的解析による HIV 感染防御ワクチン及び抗 HIV 治療薬の効果判定改善と新しい免疫治療法の開発	2,000	分担研究者
合 計	8 件		32,060	

7. 3 受託研究費等（平成20年度）

7. 3. 1 受託研究費

委 託 者	研究代表者	研 究 課 題	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
文 部 科 学 省 科 学 技 術 試 験 研 究	教 授・平 山 謙 二	ベトナムにおける長崎大学感染症研究プロジェクト	249, 231	74, 769	
文 部 科 学 省 ナショナルバイオリオソースプロジェクト	教 授・平 山 謙 二	病原微生物の収集・保存・提供体制整備事業（病原性原虫の収集、株保存と分析、その提供）	3, 800	—	
文 部 科 学 省 科学技術振興調整費	教 授・森 田 公 一	科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進 BSL-4 施設を必要とする新興感染症対策	2, 975	892	
国 立 国 際 医 療 セ ン ター 国 際 医 療 協 力 委 託 費	教 授・有 吉 紅 也	19 公 4 開発途上国における血液媒体疾患に対する総合的な対策のあり方に関する研究	1, 000	—	
独立行政法人 科学技術振興機構 地域イノベーション創出支援事業・ 重点地域研究開発推進プログラム	講 師・和 田 昭 裕	下痢原因となる病原細菌のガンگریオンドプローブを用いた病原毒性の診断	1, 539	461	
独立行政法人 科学技術振興機構 地域イノベーション創出支援事業・ 重点地域研究開発推進プログラム	教 授・山 城 哲	新型高病原性鳥インフルエンザ（H5N1）感染症に対する治療用抗体製剤開発に関する研究	1, 540	460	
フ マ キ ラ ー 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	電池式蚊取り製剤のアカイエカに対する準実地効力試験	231	69	
住化エンビロサイエンス 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	ゴキブリに対する室内での殺虫剤効力評価	200	60	
合 計	8 件		260, 516	76, 711	

7. 3. 2 受託事業費

委 託 者	研究代表者	研 究 課 題	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
独立行政法人 国際協力機構 技術協力 プロジェクト	教 授・森 田 公 一	大洋州地域予防接種強化プロジェクト（第5年次）	69,978	—	
独立行政法人 国際協力機構 九州国際センター 草の根技術協力事業	教 授・嶋 田 雅 暁	西ケニアにおける貧困層を対象とした保健医療サービス支援と保健医療状況の改善を目指す地域・人材育成	2,081	181	
独立行政法人 国際協力機構	教 授・平 山 謙 二	平成19年度集団研修「熱帯地の医師のための臨床医学と研究」	13,049	—	
独立行政法人 日本学術振興会 拠点大学 交流事業	教 授・平 山 謙 二	熱帯医学 熱帯性感染症の新興・再興の要因とそれに基づく防除対策	25,432	—	
独立行政法人 日本学術振興会 アジア・アフリカ 学術基盤形成事業	教 授・平 山 謙 二	アフリカにおける「顧みられない病気」の学際的研究	5,500	—	
独立行政法人 日本学術振興会 二国間交流事業	教 授・金 子 修	シンガポールとの共同研究マラリア原虫感染の重症化における Duffy 抗原の役割	2,500	—	
合 計	6 件		118,540	181	

7. 3. 3 研究拠点形成補助金

補助金名	拠点リーダー	拠点のプログラム名	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
グ ロー バ ル C O E	教 授・平 山 謙 二	熱帯病・新興感染症の地球規模統合制御戦略	263,800	79,140	20～24年度

7. 3. 4 その他の補助金

補助金名	研 究 者	研 究 題 目	直接経費 (千円)	間接経費 (千円)	備 考
厚生労働省 がん研究助成金	准教授・本 田 純 久	多施設共同研究の質の向上のための研究体制確立に関する研究	500	—	

7. 3. 5 民間等の共同研究

民間等機関名	研究代表者	研 究 題 目	民 間 等 (千円)	大 学 (千円)	備 考
住 友 化 学 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	殺虫剤デリバリー技術の野外評価系および半野外評価系の構築	60,000	0	
アース製薬 株 式 会 社	教 授・高 木 正 洋	蚊取り器の効力試験	830	0	

8 海外活動

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	吉田 レイミント	研究打合せ, 小児における呼吸器感染症の起炎菌調査研究	ベトナム	H20. 4. 13 ～ H20. 4. 26	受託研究等 収 入
教 授	高 木 正 洋	研究打合せ(イギリス・フランス), 会議出席 (スイス)	イギリス ス イ ス フ ラ ンス	H20. 4. 20 ～ H20. 4. 29	寄 附 金
産学官 連 携 研究員	高 野 宏 平	ATBCシンポジウム, ワークショップ, エクスカーションに参加	マレーシア	H20. 4. 21 ～ H20. 5. 7	受託研究等 収 入
講 師	川 田 均	デング熱媒介蚊の総合防除戦略構築	ベトナム	H20. 4. 24 ～ H20. 4. 26	科学研究費 補 助 金
助 教	江 原 雅 彦	拠点大学方式による学術交流事業(熱 帯性感染症の新興・再興の要因とそれ に基づく防除対策)	ベトナム	H20. 4. 30 ～ H20. 5. 13	J S P S
助 教	カ レ ト ン リ チャード レ イ ト ン	マラリア原虫収集のため	イギリス	H20. 4. 16 ～ H20. 5. 30	科学技術振興 調 整 費
教 授	森 田 公 一	ベトナム拠点プロジェクト現地状況調 査	ベトナム	H20. 4. 27 ～ H20. 4. 30	受託研究等 収 入
准教授	塚 越 達 彦	「大洋州予防接種強化事業」遂行のた め	フィジー	H20. 4. 27 ～	受託研究等 収 入
プ ロ ジェク ト 研究員	二 見 恭 子	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケニア	H20. 5. 3 ～ H20. 8. 25	運営費交付金
助 教	井 上 真 吾	フィリピン実験動物学会 (PALAS)で の招待教育講演	フィリピン	H20. 5. 8 ～ H20. 5. 11	科学研究費 補 助 金
教 授	森 田 公 一	JICAとの技術協力「大洋州予防接種事業強化プログ ラム」の現地用務実施 (クック諸島・フィジー), 「Steering committee Meeting」への出席 (ベトナム)	クック諸島 フ ィ ジ ー ベトナム	H20. 5. 10 ～ H20. 5. 24	受託研究等 収 入
准教授	塚 越 達 彦	JICAとの技術協力「大洋州予防接種事 業強化プログラム」の現地用務実施の ため	クック諸島	H20. 5. 10 ～ H20. 5. 18	受託研究等 収 入
助 教	吉田 レイミント	研究打合せ, 一時帰国investigator meet- ingに出席, 小児における呼吸器感染症 の起炎菌調査研究を行う	ベトナム	H20. 5. 11 ～ H20. 5. 24	受託研究等 収 入
教 授	平 山 壽 哉	共同研究打合せ	アメリカ	H20. 5. 12 ～ H20. 5. 16	科学研究費 補 助 金
教 授	皆 川 昇	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケニア	H20. 5. 12 ～ H20. 5. 30	運営費交付金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	上 地 玄一郎	NIHE国立衛生疫学研究所にてインフルエンザ等に対するヒト型抗体作製に関する実験及び関係者との打合せ	ベ ト ナ ム	H20. 5. 12 ～ H20. 5. 17	受託研究等 収 入
教 授	堀 尾 政 博	新興・再興感染症に関する研究打合せ	ケ ニ ア	H20. 5. 17 ～ H20. 5. 31	運営費交付金
講 師	上 村 春 樹	マラリア調査・研究	ケ ニ ア	H20. 5. 17 ～ H20. 5. 31	科学研究費 補 助 金
教 授	一 瀬 休 生	イギリスにて研究打合せ及び一時帰国	イ ギ リ ス	H20. 5. 30 ～ H20. 6. 29	運営費交付金
助 教	堀 田 こずえ	赴任のため(ベトナムプロジェクト拠点での用務)	ベ ト ナ ム	H20. 5. 31 ～	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	investigator meetingに出席, 研究打合せ	ベ ト ナ ム	H20. 5. 14 ～ H20. 5. 17	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	ランパンプロジェクト代表研究者らと本分担研究の進捗状況を確認他	タ イ	H20. 5. 21 ～ H20. 5. 24	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 壽 哉	第108回米国微生物学会出席, 発表	ア メ リ カ	H20. 6. 1 ～ H20. 6. 6	科学研究費 補 助 金
講 師	川 田 均	第4回環太平洋農薬科学会議出席	ア メ リ カ	H20. 6. 1 ～ H20. 6. 6	科学研究費 補 助 金
助 教	比 嘉 由紀子	拠点大学方式による学術交流事業(熱帯性感染症の新興・再興の要因とそれに基づく防除対策), 研究打合せ, フィールド調査	ベ ト ナ ム	H20. 6. 1 ～ H20. 6. 16	J S P S
教 授	陳 紅 根	住血吸虫病の免疫診断会議出席・サンプル収集	中 国	H20. 6. 6 ～ H20. 6. 9	先 方 負 担 (南京医科大学)
助 教	鈴 木 基	第6回国際肺炎球菌学会で発表及び参加	アイスランド	H20. 6. 7 ～ H20. 6. 14	自 己 収 入
助 教	吉田 レイミント	第6回国際肺炎球菌学会で発表及び参加	アイスランド	H20. 6. 7 ～ H20. 6. 14	自 己 収 入
教 授	金 子 修	マラリアに関するセミナー出席(ドイツ・スウェーデン), 研究打合せ(ドイツ・スウェーデン)	スウェーデン ド イ ツ	H20. 6. 8 ～ H20. 6. 14	科学研究費 補 助 金
産学官 連 携 研究員	シュアイブ モハンマド ナシル	国 際 学 会 Malaria:Immunology, Pathogenesis and Vaccine Perspectivesにて発表	オーストリア	H20. 6. 8 ～ H20. 6. 14	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	皆 川 昇	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケ ニ ア	H20. 6. 9 ～ H20. 8. 5	運営費交付金
教 授	平 山 謙 二	JSPS present Sweden-Japan joint seminarに出席	スウェーデン	H20. 6. 10 ～ H20. 6. 13	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	上海・パスツール研究所にて開催されるネットワークシンポジウムにおいてベトナムでの研究成果の発表	中 国	H20. 6. 11 ～ H20. 6. 15	先 方 負 担 (上海・パス ツール研究所)
教 授	森 田 公 一	WHO主催のGOARNトレーニングに参加	オーストリア	H20. 6. 15 ～ H20. 6. 20	受託研究等 収 入
助 教	橋 爪 真 弘	バングラデシュにおけるコレラ流行と 気候変動に関する疫学研究打合せ	バングラデシュ	H20. 6. 15 ～ H20. 6. 19	科学研究費 補 助 金
准教授	パ ル ケ ッ ト マ リ ア デル カルメン	Nidovirusesの国際シンポジウムに参加	イ ギ リ ス	H20. 6. 20 ～ H20. 6. 29	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	SARSの血清診断に関する共同研究	中 国	H20. 6. 23 ～ H20. 6. 27	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	第44回日米合同委員会に出席	ア メ リ カ	H20. 6. 15 ～ H20. 6. 18	科学研究費 補 助 金
助 教	余 福 勲	広州中医薬大学との上海パスツール研 究所においてSARSウイルスの血清診 断に関する共同研究	中 国	H20. 6. 23 ～ H20. 7. 11	寄 附 金
助 教	後 藤 健 介	論博研究者の研究指導及び研究打合せ・ 調査	ベ ト ナ ム	H20. 7. 2 ～ H20. 7. 13	他機関経費 (JSPS論博事業)
教 授	金 子 修	サンプル収集及び解析	タ イ	H20. 7. 5 ～ H20. 7. 15	科学研究費 補 助 金
講 師	上 村 春 樹	ケニア・ナイロビ拠点におけるマラリ ア調査・研究	ケ ニ ア	H20. 7. 5 ～ H20. 7. 19	科学研究費 補 助 金
産学官 連 携 研究員	パ ン デ ィ キ シ ョ ール	2008ASP&ABC/NH Research Network for Parasitology Annual Conference出席	オ ー ス ト ラ リ ア	H20. 7. 5 ～ H20. 7. 11	自 己 収 入 (交付金対象)
助 教	依 田 健 志	「エイズ孤児のケアに関するソーシャルネッ トワークと公的セクターの役割に関する研究」 に關しての聞き取り調査、及び情報収集	タ イ	H20. 7. 6 ～ H20. 7. 15	科学研究費 補 助 金
助 教	橋 爪 真 弘	①ベトナムにおける地理情報システム(GIS)と出生情報を活用した 地域データベース構築(ベトナム)②バングラデシュにおけるコレラ 流行と気候変動に関する疫学研究打合せ(イギリス・バングラデシュ)	イ ギ リ ス バングラデシュ ベ ト ナ ム	H20. 7. 8 ～ H20. 7. 31	①運営費交付金 ②科学研究費等 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	吉田 レイミント	Investigator meetingに出席, 小児における呼吸器感染症の研究, 病院視察	ベ ト ナ ム	H20. 7. 10 ～ H20. 7. 27	受託研究等 収 入
助 手	渡 邊 貴和雄	細菌に関する打合せ及び調査研究	ベ ト ナ ム	H20. 7. 12 ～ H20. 7. 20	受託研究等 収 入
助 教	依 田 健 志	腸管内寄生原虫症の疫学的調査および研究者との打ち合わせ・意見交換	メ キ シ コ	H20. 7. 17 ～ H20. 7. 30	自 己 収 入 (交付金対象)
助 手	柳 哲 雄	腸管内寄生原虫症の疫学的調査	メ キ シ コ	H20. 7. 21 ～ H20. 8. 6	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	有 吉 紅 也	ベトナム側共同研究者と研究打合せを行う。呼吸器感染症フィールド実地調査を行う(ベトナム)・熱帯医学修士課程海外研修の引率および現地調査(タイ)	タ イ ベ ト ナ ム	H20. 7. 22 ～ H20. 7. 29	受託研究等 収 入
助 教	宮 城 啓	Investigator meetingに出席, 小児における呼吸器感染症の研究, 病院視察	ベ ト ナ ム	H20. 7. 22 ～ H20. 7. 26	受託研究等 収 入
助 教	依 田 健 志	「タイ国の保健と社会発展」研修プログラムのコーディネート及びタイ・マヒドン大学との研究打合せ	タ イ	H20. 7. 31 ～ H20. 8. 12	他機関経費 (順天堂大学 医 学 部)
助 教	上 地 玄一郎	赴任のため(ベトナムプロジェクト拠点での用務)	ベ ト ナ ム	H20. 7. 21 ～	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	ベトナム拠点プロジェクト現地状況調査	ベ ト ナ ム	H20. 7. 30 ～ H20. 8. 2	受託研究等 収 入
助 教	江 原 雅 彦	拠点大学方式による学術交流事業(熱帯性感染症の新興・再興の要因とそれに基づく防除対策)	ベ ト ナ ム	H20. 8. 1 ～ H20. 8. 14	J S P S
助 教	宮 城 啓	熱帯医学修士課程海外研修の引率および現地調整	タ イ	H20. 8. 2 ～ H20. 8. 10	受託研究等 収 入
教 授	高 木 正 洋	NIHEとのデング熱調査に関する研究打合せおよびフエ大学表敬訪問	ベ ト ナ ム	H20. 8. 4 ～ H20. 8. 9	寄 附 金
教 授	平 山 壽 哉	第12回国際微生物学連合会議	ト ル コ	H20. 8. 5 ～ H20. 8. 10	科学研究費 補 助 金
講 師	川 田 均	ベトナムにおけるデング熱媒介蚊の総合防除戦略構築, 生態調査及び殺虫剤感受性調査	ベ ト ナ ム	H20. 8. 6 ～ H20. 8. 16	科学研究費 補 助 金
助 教	橋 爪 真 弘	バンクラデシュにおけるコレラ流行と気候変動に関する疫学研究打合せ	バングラデシュ	H20. 8. 9 ～ H20. 8. 15	科学研究費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	皆 川 昇	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケ ニ ア	H20. 8. 19 ～ H20. 9. 25	運営費交付金
教 授	高 木 正 洋	意見交換及び研究施設等視察	ベ ト ナ ム	H20. 8. 21 ～ H20. 8. 23	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	平 山 謙 二	意見交換及び研究施設等視察	ベ ト ナ ム	H20. 8. 21 ～ H20. 8. 23	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	森 田 公 一	「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」の現地用務実施	フ ィ ジ ー	H20. 8. 21 ～ H20. 9. 1	受託研究等 収 入
教 授	青 木 克 己	住血吸虫幼虫の貝への遊泳行動に関する研究打合せ	ケ ニ ア	H20. 8. 24 ～ H20. 9. 1	科学研究費 補 助 金
助 教	吉田 レイミント	小児における呼吸器感染症の起炎菌調査研究, 会議出席	ベ ト ナ ム	H20. 8. 25 ～ H20. 9. 6	受託研究等 収 入
講 師	上 村 春 樹	マラリア調査・研究	インドネシア	H20. 8. 25 ～ H20. 9. 2	科学研究費 補 助 金
講 師	川 田 均	蚊媒介性感染症の防除戦略 ベトナム南部におけるデング熱媒蚊の生態調査と殺虫剤感受性調査	ベ ト ナ ム	H20. 8. 31 ～ H20. 9. 6	J S P S
教 授	有 吉 紅 也	MTMフィリピン研修のサンラザロ病院担当者と打ち合わせ及び学生の引率	フィリピン	H20. 8. 13 ～ H20. 8. 15	受託研究等 収 入
准教授	本 田 純 久	授業科目「課題研究」実施のための現地調査及び資料収集	スリランカ	H20. 8. 23 ～ H20. 8. 25	自 己 収 入 (交付金対象)
助 教	砂 原 俊 彦	国際シンポジウム出席	インドネシア	H20. 8. 20 ～ H20. 8. 27	自 費
教 授	有 吉 紅 也	エイズ対策事業の研究について研究打合せ, 実験データ解析および論文の作成を行う(タイ)小児呼吸器感染症に関する研究打合せ(ベトナム)	タ イ ベ ト ナ ム	H20. 8. 29 ～ H20. 9. 6	科学研究費補助金 (タイ)・受託研究 等収入(ベトナム)
助 教	吉 野 弘	赴任のため(ベトナムプロジェクト拠点での用務)	ベ ト ナ ム	H20. 9. 4 ～	受託研究等 収 入
教 授	金 子 修	マラリア研究(中国), 第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加(韓国)	韓 国 中 国	H20. 9. 23 ～ H20. 10. 4	科学研究費 補 助 金
教 授	金 子 聰	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 23 ～ H20. 10. 7	運営費交付金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	森 田 公 一	第1回フィリピン国際 Dengue シンポジウム出席	フィリピン	H20. 9. 26 ～ H20. 9. 28	寄 附 金
助 教	井 上 真 吾	第1回フィリピン国際 Dengue シンポジウム出席	フィリピン	H20. 9. 26 ～ H20. 9. 28	先 方 負 担 (聖ルカ医療 セ ン タ ー)
教 授	皆 川 昇	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 28 ～ H20. 10. 3	運営費交付金
教 授	堀 尾 政 博	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 28 ～ H20. 10. 3	寄 附 金
教 授	嶋 田 雅 暁	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 23 ～ H20. 10. 22	運営費交付金
講 師	上 村 春 樹	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 28 ～ H20. 10. 3	寄 附 金
プ ロ ジェク ト 研究員	二 見 恭 子	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 28 ～ H20. 10. 3	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	青 木 克 己	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 3	寄 附 金
助 教	久 保 嘉 直	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 4	自 己 収 入 (交付金対象)
助 教	橋 爪 真 弘	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 3	自 己 収 入 (交付金対象)
助 教	砂 原 俊 彦	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 4	自 己 収 入 (交付金対象)
助 教	渡 部 幹 次	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 3	寄 附 金
助 教	矢 幡 一 英	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 4	科学研究費 補 助 金
助 教	カ レ ト ン ド リ チャー ド レ イ ト ン	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 4	受託研究等 収 入
産学官 連 携 研究員	シ ュ ア イ ブ モ ハ ン マ ド ナ シ ル	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 4	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
産学官 連 携 研究員	高 野 宏 平	「Forum of the network of research centers on infectious diseases」への参加, および新種マラリア媒介蚊採集のためのフィールド調査	ベ ト ナ ム	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 30	受 託 研 究 等 収 入
教 授	平 山 謙 二	マラリアの研究, JICAプロジェクト打合せ (パプアニューギニア) デングワクチンプロジェクト打合せ (タイ)	パプアニューギニア タ イ	H20. 9. 8 ～ H20. 9. 13	グ ロー バ ル C O E
教 授	一 瀬 休 生	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 25 ～ H20. 10. 14	運 営 費 交 付 金
教 授	陳 紅 根	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 9. 28 ～ H20. 10. 3	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	平 山 謙 二	韓国チェジュ島で開催されるICTM2008で成果発表	韓 国	H20. 9. 29 ～ H20. 10. 3	受 託 研 究 等 収 入
助 教	比 嘉 由紀子	蚊相およびマラリア媒介蚊調査	マレーシア	H20. 9. 1 ～ H20. 9. 11	自 費
教 授	高 木 正 洋	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 10. 1 ～ H20. 10. 3	寄 附 金
助 教	吉田 レイミント	フォーラム参加, ベトナム側共同研究者らと研究打ち合わせ, 会議出席のため	ベ ト ナ ム	H20. 10. 1 ～ H20. 10. 11	受 託 研 究 等 収 入
助 教	後 藤 健 介	第17回国際熱帯医学マラリア会議に参加	韓 国	H20. 10. 1 ～ H20. 10. 4	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	有 吉 紅 也	Steering Committee Meeting, ジョイントフォーラム出席, investigator meeting出席	ベ ト ナ ム	H20. 10. 3 ～ H20. 10. 9	受 託 研 究 等 収 入
教 授	平 山 謙 二	Steering Committee Meeting, 公開講座, ジョイントフォーラム出席	ベ ト ナ ム	H20. 10. 4 ～ H20. 10. 7	受 託 研 究 等 収 入
教 授	森 田 公 一	Steering Committee Meeting, 公開講座, ジョイントフォーラム出席	ベ ト ナ ム	H20. 10. 4 ～ H20. 10. 7	寄 附 金
教 授	高 木 正 洋	フォーラム参加および研究打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H20. 10. 4 ～ H20. 10. 8	受 託 研 究 等 収 入
助 教	比 嘉 由紀子	共同研究およびフィールド調査	ベ ト ナ ム	H20. 10. 4 ～ H20. 10. 21	J S P S
講 師	川 田 均	デング熱媒介蚊の総合防除戦略構築およびフォーラム参加	ベ ト ナ ム	H20. 10. 4 ～ H20. 10. 11	科 学 研 究 費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	江 原 雅 彦	Joint Forumにてポスター発表	ベ ト ナ ム	H20. 10. 5 ～ H20. 10. 8	受託研究等 収 入
助 教	二 見 恭 子	赴任のため(ケニアプロジェクト拠点 での用務)	ケ ニ ア	H20. 10. 6 ～	運営費交付金
助 教	砂 原 俊 彦	蚊の分布におよぼす地形の影響解析の ための研究打合せ・現地調査	ベ ト ナ ム	H20. 10. 6 ～ H20. 10. 19	科学研究費 補 助 金
准教授	塚 越 達 彦	「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」の 現地用務実施のため	キ リ バ ス	H20. 10. 8 ～ H20. 10. 16	受託研究等 収 入
助 教	依 田 健 志	共同研究者との打合せ及び Joint International Tropical Medicine Meet- ing 2008学会発表	タ イ	H20. 10. 10 ～ H20. 10. 16	エイズ遺児のケア に関するソーシャ ルネットワーク
助 教	橋 爪 真 弘	会議出席 (International society for environmen- tal epidemiology & International society of exposure 2008 Joint annual conference)	ア メ リ カ	H20. 10. 12 ～ H20. 10. 17	自 己 収 入 (交付金対象)
講 師	川 田 均	共同研究打合せ, 国際会議参加 (The Sec- ond International Conference on Dengue and Dengue Haemorrhagic Fever, 2008)	タ イ	H20. 10. 12 ～ H20. 10. 20	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	国際会議出席 (The Second Internation- al Conference on Dengue and Dengue Haemorrhagic Fever, 2008)	タ イ	H20. 10. 14 ～ H20. 10. 17	受託研究等 収 入
助 教	中 澤 秀 介	拠点大学方式による学術交流事業に関 する共同研究	ベ ト ナ ム	H20. 10. 14 ～ H20. 10. 25	J S P S
教 授	森 田 公 一	「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」の 現地用務実施のため	フ ィ ジ ー	H20. 10. 19 ～ H20. 10. 24	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	マレー大学との人材交流に関する打合 せ	マレーシア	H20. 10. 20 ～ H20. 10. 22	グ ロー バ ル C O E
教 授	平 山 謙 二	Research Institute of Tropical Medicine)に て今後の研究 (実験) の打合せ	フィリピン	H20. 10. 27 ～ H20. 10. 29	先 方 負 担 (独立行政法人 日本学術振興会)
教 授	平 山 壽 哉	第9回韓日微生物学シンポジウム出席 および発表	韓 国	H20. 10. 16 ～ H20. 10. 18	科学研究費 補 助 金
研 究 支 援 員	久 恒 順 三	第9回韓日微生物学シンポジウム出席 および発表	韓 国	H20. 10. 16 ～ H20. 10. 18	科学研究費 補 助 金
教 授	皆 川 昇	赴任のため(ケニアプロジェクト拠点 での用務を行う)	ケ ニ ア	H20. 10. 26 ～	運営費交付金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	吉田 レイミント	Pathogenesis and Control of Emerging Infections and Drug-Resistant Organisms, Part of the Keystone Symposia Global Health Seriesに出席し発表を行う。	タ イ	H20. 10. 22 ～ H20. 10. 27	受託研究等 収 入
助 教	シュアイブ モハンマド ナシール	マラリアワクチン候補分子のゲノムイン フォーマティクスによる同定とその 機能解析の為の資料収集と研究打合せ	ナイジェリア	H20. 10. 29 ～ H20. 11. 28	自 費
教 授	平 山 謙 二	スイス・ジュネーブのWHOで開催さ れるMeeting of the (TSC) and (SAC) of Empowerment出席	ス イ ス	H20. 11. 3 ～ H20. 11. 9	先 方 負 担 (T D R)
助 教	橋 爪 真 弘	コレラ流行と気候変動に関する疫学研 究打合せ	バングラデシュ	H20. 11. 4 ～ H20. 11. 7	科学 研 究 費 補 助 金
講 師	上 村 春 樹	マラリア, トリパノソーマに関する研 究打合せ	ア メ リ カ	H20. 11. 5 ～ H20. 11. 10	寄 附 金
教 授	金 子 修	研究課題に関するサンプル収集及び解 析	タ イ	H20. 11. 7 ～ H20. 11. 18	科学 研 究 費 補 助 金
教 授	青 木 克 己	ケニアにおける住血吸虫ミラシジウム の中間宿主の罔貝探索調査	ケ ニ ア	H20. 11. 8 ～ H20. 11. 20	科学 研 究 費 補 助 金
教 授	堀 尾 政 博	ケニアにおける住血吸虫ミラシジウム の中間宿主の罔貝探索調査	ケ ニ ア	H20. 11. 8 ～ H20. 11. 23	科学 研 究 費 補 助 金
教 授	安 波 道 郎	The American Society of Human Genet- icsで成果発表	ア メ リ カ	H20. 11. 11 ～ H20. 11. 17	受託研究等 収 入
助 教	比 嘉 由紀子	デング熱媒介蚊調査	ベトナム	H20. 11. 11 ～ H20. 11. 23	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	森 田 公 一	「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」の現地用務実施	フ ィ ジ ー	H20. 11. 13 ～ H20. 11. 28	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	ディプロマコース講義	タ イ	H20. 11. 13 ～ H20. 11. 15	教育改革支援 プログラム 経 費
助 教	宮 城 啓	事業地におけるマラリア等に関する疾 患状況の把握とデータ整備	マ ラ ウ イ	H20. 11. 17 ～ H20. 11. 29	他機関経費 (社団法人日本 国際民間協力会)
教 授	溝 田 勉	熱帯地域における専門家人材の研修に かかる最終候補者選考(ベトナム・フィ リピン)	フィリピン ベトナム	H20. 11. 24 ～ H20. 11. 28	(財) 国 際 交通安全学会
教 授	高 木 正 洋	アジア・アフリカ学術基盤形成事業長崎 大学セミナー・JSPSナイロビ研究連絡センター シンポジウム参加及び拠点運営打合せ	ケ ニ ア	H20. 11. 25 ～ H20. 11. 30	大学国際戦略 本部強化事業

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	アラム モハンメッド マハブブ	NIHE(ベトナム国立衛生疫学研究所) にてノロウイルスについての調査・研究	ベトナム	H20.11.29 ～ H20.12.7	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	臨床検体と臨床疫学データの整理および研究打合せ	タイ	H20.11.4 ～ H20.11.8	科学研究費 補 助 金
助 教	吉田 レイミント	Birth Cohort Studyの準備打合せを行うため	ベトナム	H20.11.5 ～ H20.11.14	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	バンコクで開催されるシンポジウム出席のため(FERCAPアジア西太平洋地域の倫理審査委員会フォーラム)	タイ	H20.11.23 ～ H20.12.1	グローバル C O E
C O E 研究員	土 屋 菜 歩	Lampang病院HIVコホートのデータベース構築を行う,またフィールドスタッフの監督を行う	タイ	H20.11.2 ～ H20.11.8	グローバル C O E
教 授	皆 川 昇	施設視察・情報交換(イギリス)アメリカ熱帯医学衛生学会参加,施設視察・データサンプル受取(アメリカ)	アメリカ イギリス	H20.12.2 ～ H21.1.14	運営費交付金
助 教	吉田 レイミント	会議出席,ニャチャンの病院視察訪問,第14回Investigator meetingに出席	ベトナム	H20.12.2 ～ H20.12.12	受託研究等 収 入
教 授	金 子 修	会議出席, American Society of Tropical Medicine and Hygiene 57th Annual Meeting出席, および研究打合せ	アメリカ	H20.12.6 ～ H20.12.15	先方負担 (ATCC)・科学研究費等補助金
教 授	平 山 謙 二	The ASTMH 57th Annual Meetingに出席, 成果発表	アメリカ	H20.12.7 ～ H20.12.11	グローバル C O E
講 師	川 田 均	ファン式蚊取り器に関して,実用的な効果を調べるため屋内及び屋外での蚊に対する防除効果の調査研究	ベトナム	H20.12.7 ～ H20.12.11	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	ニャチャンの小児呼吸器感染症に関するパースコホートスタディーの計画をベトナム共同研究者と共に立てるため	ベトナム	H20.12.9 ～ H20.12.12	J S P S
准教授	森 本 浩之輔	ニャチャンの小児呼吸器感染症に関するパースコホートスタディーの計画をベトナム共同研究者と共に立てるため	ベトナム	H20.12.9 ～ H20.12.12	J S P S
助 教	グ エ ン フ ィ ィ テ ィ エ ン	University of Medicine and Pharmacy of HCMC, VN.にて研究打合せ	ベトナム	H20.12.14 ～ H21.1.6	科学研究費 補 助 金
講 師	上 村 春 樹	「熱帯性感染症の新興・再興の要因とそれに基づく防除対策」	ベトナム	H20.12.25 ～ H21.1.1	J S P S
C O E 研究員	土 屋 菜 歩	ランパン病院HIVコホートのデータベース構築,多剤併用療法以降の脂質代謝異常の発症状況調査等を行う	タイ	H20.12.25 ～ H21.1.31	グローバル C O E

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	吉田 レイミント	Birth Cohort Studyの準備打合せ	ベ ト ナ ム	H21. 1. 15 ～ H21. 1. 25	受託研究等 収 入
助 教	橋 爪 真 弘	バングラデシュにおけるコレラ流行と 気候変動に関する疫学研究	バングラデシュ	H21. 1. 16 ～ H21. 1. 23	科学 研 究 費 補 助 金
産学官 連 携 研究員	前 川 芳 秀	「殺虫剤デリバリー技術の野外評価系および半野 外評価系の構築」ケニア国におけるフィールド試 験場にて共同研究実施準備のための調査研究	ケ ニ ア	H21. 1. 27 ～ H21. 2. 8	受託研究等 収 入
准教授	川 田 均	「殺虫剤デリバリー技術の野外評価系および半野外評価系の 構築」ケニア国およびベトナム国におけるフィールド試験場 にて共同研究実施準備のための調査研究(ケニア,ベトナム)	ケ ニ ア ベ ト ナ ム	H21. 1. 27 ～ H21. 2. 14	受託研究等 収 入
教 授	溝 田 勉	国連経済社会理事会が主催する国際指 導者会議出席	ア メ リ カ	H21. 1. 29 ～ H21. 2. 3	他機関経費 (世界平和教授 アカデミー)
助 教	宮 城 啓	マラウイ国における保健・衛生及び生 実態に関するプロジェクト企画調査の ため	マ ラ ウ イ	H21. 1. 26 ～ H21. 2. 7	他機関経費 (社団法人日本 国際民間協力会)
准教授	塚 越 達 彦	ロータリー支援活動(フィジー)JICAとの技術 協力「大洋州予防接種事業強化プロジェクト」 の現地用務実施のため(ソロモン,バヌアツ)	ソ ロ モ ン バ ヌ ア ツ	H21. 1. 28 ～ H21. 2. 10	受託研究等 収 入
C O E 研究員	阿 部 朋 子	「熱帯性感染症の新興・再興の要因と それに基づく防除対策」に関する打合 せ	ベ ト ナ ム	H21. 2. 3 ～ H21. 2. 15	J S P S
教 授	有 吉 紅 也	a steering committee meeting出席	ベ ト ナ ム	H21. 2. 4 ～ H21. 2. 6	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	「熱帯性感染症の新興・再興の要因と それに基づく防除対策」に関する打合 せ	ベ ト ナ ム	H21. 2. 4 ～ H21. 2. 7	J S P S
研 究 機 関 研究員	大 庭 伸 也	ベトナムの水田における蚊相の調査	ベ ト ナ ム	H21. 2. 8 ～ H21. 2. 22	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	TDR関連のワークショップと会議出席	タ イ	H21. 2. 8 ～ H21. 2. 13	自 己 収 入 (交付金対象)
客 員 教 授	陳 紅 根	江西省寄生虫病研究所において動物実 験	中 国	H21. 2. 11 ～ H21. 2. 15	自 己 収 入 (交付金対象)
教 授	高 木 正 洋	ケニア拠点における感染症研究につい ての調査研究打合せ	ケ ニ ア	H21. 2. 14 ～ H21. 2. 18	(特需)戦略 本部強化事業
教 授	有 吉 紅 也	研究打合せおよび次年度の研究計画	タ イ	H21. 2. 16 ～ H21. 2. 19	科学 研 究 費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
プロジェクト 研究員	荻 野 倫 子	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケ ニ ア	H21. 2. 16 ～ H21. 2. 27	運営費交付金
教 授	平 山 謙 二	ガーナ大学野口記念医学研究所の Dr.Akanmoriとマラリアワクチンにつ いての研究打合せ	ガ ー ナ	H21. 2. 17 ～ H21. 2. 22	グ ローバル C O E
教 授	金 子 修	「マラリア原虫感染の重症化における ダフィー抗原の役割」実施	シンガポール	H21. 2. 18 ～ H21. 2. 21	受託研究等 収 入
助 教	矢 幡 一 英	「マラリア原虫感染の重症化における ダフィー抗原の役割」実施	シンガポール	H21. 2. 18 ～ H21. 2. 21	受託研究等 収 入
教 授	山 本 太 郎	長期インターンシップ及び大学院カリ キュラム構築のための調査・打合せ	エジプト ガ ー ナ ケ ニ ア 南アフリカ	H21. 2. 21 ～ H21. 3. 8	大 学 院 教育改革支援 プログラム
助 教	吉田 レイミント	Birth Cohort Studyと急性呼吸器感染症 の研究準備打合せ, 第15回investigator meetingに出席	ベ ト ナ ム	H21. 2. 22 ～ H21. 3. 5	受託研究等 収 入
助 教	江 原 雅 彦	「熱帯性感染症の新興・再興の要因と それに基づく防除対策」に関する打合 せ	ベ ト ナ ム	H21. 2. 24 ～ H21. 3. 5	J S P S
教 授	有 吉 紅 也	小児呼吸器感染症プロジェクトの共同 研究打合せ	ベ ト ナ ム	H21. 2. 25 ～ H21. 2. 27	J S P S
教 授	森 田 公 一	「第8回アジア太平洋医学ウイルス学会」 に参加(中国)「大洋州予防接種事業強化 プロジェクト」の現地用務実施(フィジー)	中 国 フ ィ ジ ー	H21. 2. 25 ～ H21. 3. 12	受託研究等 収 入
助 教	余 福 勲	香港コンベンションセンターにて行わ れる第8回アジア・太平洋医科ウイル ス学会議に参加	中 国	H21. 2. 25 ～ H21. 3. 1	寄 附 金
助 教	砂 原 俊 彦	森林開発と人口増加・移動がもたらす 感染症リスクの質的・量的評価	インドネシア	H21. 2. 25 ～ H21. 3. 20	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 壽 哉	共同研究打合せ	ア メ リ カ	H21. 2. 26 ～ H21. 3. 2	科学研究費 補 助 金
助 教	比 嘉 由紀子	「熱帯性感染症の新興・再興の要因と それに基づく防除対策」に関する打合 せ	ベ ト ナ ム	H21. 3. 1 ～ H21. 3. 5	J S P S
助 教	橋 爪 真 弘	バングラデシュにおけるコレラ流行と 気候変動に関する疫学研究	バングラデシュ	H21. 3. 1 ～ H21. 3. 14	自 己 収 入 (交付金対象)
研 究 機 関 研究員	大 庭 伸 也	ベトナムの水田における蚊相の調査	ベ ト ナ ム	H21. 3. 1 ～ H21. 3. 5	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
准教授	川 田 均	「殺虫剤デリバリー技術の野外評価系および半野外評価系の構築」ケニア国およびベトナム国におけるフィールド試験場にて共同研究実施準備のための調査研究(ケニア,ベトナム)	ケ ニ ア ベ ト ナ ム	H21. 3. 3 ～ H21. 3. 22	受託研究等 収 入
産学官 連 携 研究員	前 川 芳 秀	「殺虫剤デリバリー技術の野外評価系および半野外評価系の構築」ケニア国およびベトナム国におけるフィールド試験場にて共同研究実施準備のための調査研究(ケニア,ベトナム)	ケ ニ ア ベ ト ナ ム	H21. 3. 3 ～ H21. 3. 22	受託研究等 収 入
C O E 研究員	土 屋 菜 歩	論博研究者の研究指導を行うため	タ イ	H21. 3. 3 ～ H21. 3. 7	他機関経費 (独立行政法人 日本学術新興会)
教 授	有 吉 紅 也	タイ国立衛生研究所共同研究者と肝炎データの確認および来年度の研究打合せ・ランパン病院フィールド関係者へ来年度の研究計画の説明	タ イ	H21. 3. 4 ～ H21. 3. 11	受託研究等 収 入
助 教	依 田 健 志	インドネシア・南スラウェシ州地域保健強化プロジェクトに関してのインパクト評価調査研究	インドネシア	H21. 3. 10 ～ H21. 3. 23	他機関経費 (国立国際医療セン ター国際医療協力局)
助 教	宮 城 啓	発展途上国村落における住民健康調査に研究協力	ラ オ ス	H21. 3. 10 ～ H21. 3. 21	他機関経費 (関西医科大学)
C O E 研究員	阿 部 朋 子	現地医療機関の患者記録,地域森林事務所のデータ収集および研究打合せ	ベ ト ナ ム	H21. 3. 10 ～ H21. 3. 22	受託研究等 収 入
教 授	高 木 正 洋	「熱帯性感染症の新興・再興の要因とそれに基づく防除対策」に関する打合せ	ベ ト ナ ム	H21. 3. 12 ～ H21. 3. 14	J S P S
C O E 研究員	土 屋 菜 歩	ランパン病院HIVコホートのデータベース構築,多剤併用療法以降の脂質代謝異常の発症状況調査等を行う	タ イ	H21. 3. 14 ～ H21. 4. 18	グ ローバル C O E
教 授	山 本 太 郎	ステークホルダー会議(ドイツ)世界食料機関会議出席(イタリア)	イ タ リ ア ド イ ツ	H21. 3. 15 ～ H21. 3. 23	研究拠点形成 費等補助金
教 授	皆 川 昇	マラリアに関する調査及び情報収集	マ ラ ウ ィ	H21. 3. 16 ～ H21. 3. 20	運営費交付金
プ ロ ジェク ト 研究員	荻 野 倫 子	熱帯性感染症の新興・再興に関する打合せ	ケ ニ ア	H21. 3. 16 ～ H21. 3. 30	受託研究等 収 入
教 授	安 波 道 郎	学会「Genetics and Genomics of Infectious Disease」参加,成果発表	シンガポール	H21. 3. 21 ～ H21. 3. 25	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	Keystone SymposiaのHIV Immunobiologyに出席し情報収入を行う	ア メ リ カ	H21. 3. 22 ～ H21. 3. 28	グ ローバル C O E
教 授	堀 尾 政 博	新興・再興感染症に関する調査・研究	ケ ニ ア	H21. 3. 23 ～ H21. 4. 5	運営費交付金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	山 城 哲	13th International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rimに出席	イ ン ド	H21. 3. 30 ～ H21. 4. 9	グ ローバル C O E

9 外国人研究者の受け入れ

9. 1 熱帯医学研究コース

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科に平成18年度開設された熱帯医学専攻（修士課程）に入学する形で本年度のJICA熱帯医学研究コースも実施された。

平成20年4月に、同コースから7名（エルサルバドル2，ドミニカ1，ケニア1，ギニア1，フィリピン2）が、同課程に入学した。（平成20年度修士課程学生総数15名）4ヶ月間の講義及び実習，8月のタイでの海外熱帯医学臨床研修，そして9月から各教室における研究・修士論文作成を行い，平成21年3月には，論文発表会にて修士論文を発表し，審査の結果，全員が修士を授与された。

（修士論文題目）

- A longitudinal survey of *P. falciparum* in Vietnam ; exhaustive genetic analysis related to drug resistance in 2001-2002, 2005-2007 (pfprt, pfmdr1, pfdhfr, pfdhps)
- Positive diversifying selection on *Plasmodium falciparum* SURFIN4. 1
- Distribution of the pyrethroid knockdown resistance (kdr) gene in dengue fever vector, *Aedes aegypti*, in VIETNAM
- Chemoattractant effect of simple sugars on miracidium and blocking effect of lectin on SCW to attract miracidium for the control of Schistosomiasis
- *Brugia pahangi* : chemotactic response of the infective larvae for urocanic acid
- Development and application of "Excel-Ent"-The simulation model of dengue transmission dynamics
- Does HTLV-1 derive from Jomon people or not?
- Molecular characterization of serotype G2 human rotavirus strains
- Analysis of FCGR2A (CD32) gene polymorphism effect on susceptibility to malaria in Ghanaian children
- Association analysis of genetic polymorphisms in NFKB1-MANBA genomic region on human chromosome 4 with severe dengue infection
- Possible molecular mechanism involved in the persistence of Japanese Encephalitis virus in infected porcine stable cells
- Development of reverse transcription loop-mediated isothermal amplification- Assay for Sindbis and Ross River viruses
- Anemia in Northern Thailand HIV Cohort : Prevalence at enrollment ; Associated factors and impact

on survival

- Predictors of Clinical Efficacy after Treatment of Nontuberculous Mycobacteria Pulmonary Disease in Adult HIV-Negative Patients in Nagasaki, Japan

(文責：佐藤 光)

9. 2 平成20年度に受け入れた外国人研究者

分野等	氏名	国籍	受入期間	経費	備考
ウイルス学	RAVEA SEINI TAURI	フィジー	H20. 7. 7～ H20. 7. 13	受託研究等 経費	
	Nguyen Hoang Quan	ベトナム	H20. 8. 18～ H20. 9. 14	J S P S	
	Ngo Huong Giang	ベトナム	H20. 8. 19～ H20. 9. 14	J S P S	
	ZHANG FENGXUE	中国	H20. 11. 27～ H20. 12. 4	寄附金	
	Nguyen Co Thach	ベトナム	H21. 2. 4～ H21. 3. 4	J S P S	
	Nguyen Thi Thu Thuy	ベトナム	H21. 2. 28～ H21. 3. 28	J S P S	
細菌学	Ngo Tuan Cuong	ベトナム	H20. 11. 8～ H20. 12. 6	J S P S	
原虫学	Tippawan Sungkapong	タイ	H20. 7. 29～ H21. 6. 30	タイ国研究費	外国人客員 研究員
	Peter R Preiser	シンガポール	H20. 10. 9～ H20. 10. 12	受託研究等 経費	
	Ubalee Ratawan	タイ	H21. 1. 8～ H21. 1. 10	運営費交付金	
	Kiattibutr Chakri	タイ	H21. 1. 8～ H21. 1. 10	運営費交付金	
	Achim Schnaufer	ドイツ	H21. 2. 28～ H21. 3. 8	運営費交付金	
臨床医学	PAUL KILGORE	アメリカ	H20. 6. 26～ H20. 6. 29	受託研究等 経費	
	Nguyen Thi Hien Anh	ベトナム	H20. 11. 23～ H20. 12. 20	J S P S	
	Nuanjun Wichukchinda	タイ	H21. 1. 27～ H21. 2. 21	科学研究費等 補助金	
	Vien Chinh Chien	ベトナム	H21. 1. 31～ H21. 2. 28	J S P S	
病害動物学	Ly Huynh Kim Khanh	ベトナム	H20. 6. 15～ H20. 6. 28	日本学術 振興会	
	Nguyen Thi Lan Phuong	ベトナム	H21. 2. 18～ H21. 2. 24	J S P S	
	Tran Thi Mai Hung	ベトナム	H21. 2. 18～ H21. 2. 24	J S P S	
免疫遺伝学	Saw Wut Hmone	ミャンマー	H20. 3. 15～ H20. 5. 23	ミャンマー 政府	外国人研究員 (客員教授)
	陳 紅根	中国	H20. 4. 1～ H21. 3. 31	大学運営経費	
	TRAN THI THUY	ベトナム	H20. 6. 15～ H20. 6. 22	受託研究等 経費	
	REIDAR KRUMMRADT LIE	ノルウェー	H20. 6. 29～ H20. 7. 2	運営費交付金	
	Zeng Xiaojun	中国	H20. 8. 7～ H20. 9. 29	グローバル C O E	

分 野 等	氏 名	国 籍	受入期間	経 費	備 考
	Daniel Boamah	ガ ー ナ	H20. 8. 19～ H20. 9. 30	J S P S	外国人客員 研 究 員
	Yu Chuanxin	中 国	H20. 10. 9～ H20. 10. 11	運営費交付金	
	LI ZHAOJUN	中 国	H20. 11. 20～ H21. 1. 7	グローバル C O E	
	Edelwisa Segubre Mercado	フィリピン	H21. 1. 11～ H21. 3. 28	日 本 学 術 振 興 会	外国人客員 研 究 員
	Mahamoud Sama CHERIF	ギ ニ ア	H21. 3. 23～ H21. 6. 24	グローバル C O E	
	Dang My Nhi	ベ ト ナ ム	H21. 3. 26～ H21. 6. 23	グローバル C O E	
	Lam Quoc Bao	ベ ト ナ ム	H21. 3. 26～ H21. 6. 23	グローバル C O E	
熱 帯 医 学 専 攻	BALDE Adama	ギ ニ ア	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	ASI Laa De Leon	フィリピン	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	MARTE Shane Dirilo	フィリピン	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	OMAR Ahmed Din Hassan	ケ ニ ア	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	PENA SANCHEZ Rodrigo Aparicio	エルサルバドル	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	URENA TATIS Keyla Eliasmar	ドミニカ共和国	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A
	VASQUEZ TREJO Jose Ulises	エルサルバドル	H20. 4. 8～ H21. 3. 26	独立行政法人 国際協力機構	J I C A

10 研究成果の発表状況

10. 1 研究業績

ーウイルス学分野ー

- 1) 森田公一：日本脳炎ウイルス. Drug Delivery System 23(2):159-161, 2008.
- 2) 森田公一：西ナイル熱. Medical Practice 25(5):799-801, 2008.
- 3) 森田公一：ウエストナイルウイルス. ウイルスハンドブック, 32-33 河野 茂 編集, 日本医学館, 2008.
- 4) 森田公一：日本脳炎ウイルス. ウイルスハンドブック, 34-36 河野 茂 編集, 日本医学館, 2008.
- 5) Basu Dev Pandey, Kouichi Morita, Santa Raj Khanal, Tomohiko Takasaki, Isao Miyazaki, Tetsuro Ogawa, Shingo Inoue, Ichiro Kurane : Dengue virus, Nepal. Emerging Infectious Diseases 14(3) : 514-51, 2008.
- 6) Takeshi Nabeshima, Phan Thi Nga, Posadas Guillermo, Maria del Carmen Parquet, Fuxun Yu, Nguyen Thanh Thuy, Bui Minh Trang, Nguyen Tran Hien, Vu Sinh Nam, Shingo Inoue, Futoshi Hasebe, and Kouichi Morita : Isolation and Molecular Characterization of Banna Virus from Mosquitoes, Vietnam. Emerging Infectious Diseases 14(8) : 1276-1279, 2008.
- 7) Manmohan Parida, Santhosh Sannarangaiah, Paban Kumar Dash, PVL Rao and Kouichi Morita : Loop mediated isothermal amplification (LAMP) : a new generation of innovative gene amplification technique; perspectives in clinical diagnosis of infectious diseases. Reviews in Medical Virology 18 : 407-422, 2008.
- 8) 森田公一：デング熱・出血熱. 臨床と研究 Vol. 85(9) : 1242-1246, 2008.
- 9) 森田公一：デング出血熱ワクチン. 日本臨床 Vol. 66(10) : 1999-2003, 2008.
- 10) Kazuya Hidari, Naonori Takahashi, Masataka Arihara, Masato Nagaoka, Kouichi Morita, Takashi Suzuki : Structure and anti-dengue virus activity of sulfated polysaccharide from a marine alga. Biochemical and Biophysical Research Communications 376, 91-95, 2008.
- 11) Nguyen Thi Phuong Lan, Mihoko Kikuchi, Vu Thi Que Huong, Do Quang Ha, Tran Thi Thuy, Vo Dinh Tham, Ha Manh Tuan, Vo Van Tuong, Cao Thi Phi Nga, Tran Van Dat, Toshifumi Oyama, Kouichi Morita, Michio Yasunami, Kenji Hirayama : Protective and Enhancing HLA Alleles, HLA-DRB1*0901 and HLA-A*24, for Severe Forms of Dengue Virus Infection, Dengue Hemorrhagic Fever and Dengue Shock Syndrome. PLoS Neglected Tropical Diseases 2, e304,

2008.

- 12) Yasui F, Kai C, Kitabatake M, Inoue S, Yoneda M, Yokochi S, Kase R, Sekiguchi S, Morita K, Hishima T, Suzuki H, Karamatsu K, Yasutomi Y, Shida H, Kidokoro M, Mizuno K, Matsushima K, Kohara M : Prior immunization with severe acute respiratory syndrome (SARS)-associated coronavirus (SARS-CoV) nucleocapsid protein causes severe pneumonia in mice infected with SARS-CoV. J Immunol 181(9) : 6337-48, 2008.
- 13) Liu J, Liu B, Cao Z, Inoue S, Morita K, Tian K, Zhu Q, Gao GF : Characterization and application of monoclonal antibodies specific to West Nile virus envelope protein. J Virol Methods 154(1-2), 20-6. 2008.

—細菌学分野—

- 14) Katagata Y, Hirayama T : Unexpected expression of Hsp47, Q1 a replacement of one amino acid (Val 7 Leu) in the amino terminal region, in cultured human tumorigenic cell lines. J Dermatol Sci 49 : 33-38, 2008.
- 15) Hisatsune J, Nakayama M, Isomoto H, Kurazono H, Mukaida N, Mukhopadhyay AK, Azuma T, Yamaoka Y, Sap J, Yamasaki E, Yahiro K, Moss J, Hirayama T : Molecular Characterization of *Helicobacter pylori* VacA Induction of IL-8 in U937 Cells Reveals a Prominent Role for p38MAPK in Activating Transcription Factor-2, cAMP Response Element Binding Protein, and NF- κ B Activation. J Immunol 180 : 5017-5027, 2008.
- 16) Mashima H, Suzuki J, Hirayama T, Yoshikumi Y, Ohno H, Ohnishi H, Yasuda H, Fujita T, Omata M : Involvement of VAMP7 in Human Gastric Epithelial Cell Vacuolation Induced by *Helicobacter pylori* -produced VacA. Infect Immun 76 : 2296-2303, 2008.
- 17) 平山壽哉, 久恒順三, 中山真彰, 山崎栄樹 : *Helicobacter pylori* の病原性, 新たなる発見. Helicobacter Research 12(4) : 266-271, 2008.
- 18) Nguyen DT, Nguyen BM, Tran HH, Ngo TC, Le TH, Nguyen HT, Albert MJ, Iwami M, Ehara M : Filamentous vibriophage fs2 encoding the rstC gene integrates into the same chromosomal region as cholera toxin X. FEMS Microbiol Lett 284 : 225-230, 2008.

—原虫学分野—

- 19) Iriko H, Kaneko O, Otsuki H, Tsuboi T, Su XZ, Tanabe K, Torii M : Diversity and evolution of the rhoph1/clag multigene family of Plasmodium falciparum. Mol Biochem Parasitol 158(1) : 11-21, 2008.
- 20) Udomsangpetch R, Kaneko O, Chotivanich K, Sattabongkot J : Cultivation of Plasmodi-

- um vivax. Trends Parasitol 24(2) : 85-88, 2008.
- 21) Jongwutiwes S, Putaporntip C, Karnchaisri K, Seethamchai S, Hongsrimuang T, Kanbara H : Positive selection on the *Plasmodium falciparum* sporozoite threonine-asparagine-rich protein : Analysis of isolates mainly from low endemic areas. Gene 410(1) : 139-46, 2008.
 - 22) Tsuboi T, Takeo S, Iriko H, Jin L, Tsuchimochi M, Matsuda S, Han E-T, Otsuki H, Kaneko O, Sattabongkot J, Udomsangpetch R, Sawasaki T, Torii M, Endo Y : Wheat germ cell-free system-based production of malaria proteins for discovery of novel vaccine candidates. Infect Immun 76(4) : 1702-1708, 2008.
 - 23) Pandey K, Pant S, Kanbara H, Shuaibu MN, Mallik AK, Pandey BD, Kaneko O, Yanagi T : Molecular detection of Leishmania parasites from whole bodies of sandflies collected in Nepal. Parasitol Res 103(2) : 293-297, 2008.
 - 24) Maeno Y, Nakazawa S, Dao LD, Yamamoto N, Giang ND, Van Hanh T, Thuan LK, Taniguchi K : A dried blood sample on filter paper is suitable for detecting *Plasmodium falciparum* gametocytes by reverse transcription polymerase chain reaction. Acta Trop 107(2) : 121-127, 2008.
 - 25) Mphande FA, Ribacke U, Kaneko O, Kironde F, Winter G, Wahlgren M : SURFIN4. 1, a schizont-merozoite associated protein in the SURFIN family of *Plasmodium falciparum*. Malaria J 7 : 116, 2008.
 - 26) Yoshinaga K, Gerudug IK, Herman B, Suryanatha A, Suarsana N, Iskandarsyah, Zainudin, Handomi, Dachlan YP, Maekawa Y, Kanbara H : Malaria epidemiology and control methods in specific geographical foci in Lombok and Sumbawa islands of Indonesia; (I) epidemiology. Trop Med Health 36(2) : 81-92, 2008.
 - 27) Shuaibu MN, Pandey K, Wuyep PA, Yanagi T, Hirayama K, Ichinose A, Tanaka T, Kouno I : Castalagin from Anogeissus leiocarpus mediates the killing of Leishmania in vitro. Parasitol Res 103(6) : 1333-1338, 2008.
 - 28) Culleton RL, Mita T, Ndounga M, Unger H, Cravo P, Cravo VL, Paganotti GM, Takahashi N, Kaneko A, Eto H, Tinto H, Karema C, D'Alessandro U, do Rosario V, Kobayakawa T, Ntoumi F, Carter R, Tanabe K : Failure to detect *Plasmodium vivax* in West and Central Africa by PCR species typing. Malaria J 7 : 174, 2008.

— 寄生虫学分野 —

- 29) Kusaba T, Fujimaki Y, Vincent AL, Aoki Y : In vitro chemotaxis of Brugia pahangi infective larvae to the seera and hemolymph of mammals and lower animals, Parasitol Intl 57(2) : 179-184,

2008.

- 30) **Weerasooriya MV, Itoh M, Islam MZ, Aoki Y, Samarawickrema WA, Kimura E** : Presence and gradual disappearance of filaria-specific urinary IgG4 in babies born to antibody-positive mothers : A 2-year follow-up study. *Parasitol Intnl* 57(3) : 386-389, 2008.
- 31) **青木克己, 渡辺直熙** : 感染制御関連学会/研究会・最新の話題 (2) 第77回日本寄生虫学会大会・最新の話題, 感染制御 Vol 4. No. 4, 316-318, 2008.

—臨床医学分野—

- 32) **Yoshii H, Kamiyama H, Amanuma H, Oishi K, Yamamoto N, Kubo Y** : Mechanisms underlying glycosylation-mediated loss of ecotropic receptor function in murine MDTF cells and implications for receptor evolution. *J Gen Virol* 89(PT1) : 297-305, 2008.
- 33) **Kaji C, Watanabe K, Apicella MA, Watanabe H** : Antimicrobial effect of fluoroquinolones for the eradication of nontypeable *Haemophilus influenzae* isolates within biofilms. *Tohoku J Exp Med* 214(2) : 121-128, 2008.
- 34) **Wichukchinda N, Nakayama EE, Rojanawiwat A, Pathipvanich P, Auwanit W, Vongsheree S, Ariyoshi K, Sawanpanyalert P, Shioda T** : Effects of CCR2 and CCR5 Polymorphisms on HIV-1 Infection in Thai Females. *J Acquir Immune Defic Syndr* 47(3) : 293-297, 2008.
- 35) **Inoue Y, Trapnell BC, Tazawa R, Arai T, Takada T, Hizawa N, Kasahara Y, Tatsumi K, Hojo M, Ichiwata T, Tanaka N, Yamaguchi E, Eda R, Oishi K, Tsuchihashi Y, Kaneko C, Nukiwa T, Sakatani M, Krischer JP, Nakata K** : Characteristics of a large cohort of patients with autoimmune pulmonary alveolar proteinosis in Japan. *Am J Respir Crit Care Med* 177(7) : 752-762, 2008.
- 36) **Ota E, Haruna M, Yanai H, Suzuki M, Anh DD, Matsuzaki M, Tho le H, Ariyoshi K, Yeo SA, Murashima S** : Reliability and validity of the Vietnamese version of the Pregnancy Physical Activity Questionnaire (PPAQ). *Southeast Asian J Trop Med Public Health* 39(3) : 562-570, 2008.
- 37) **Sukisaki T, Senjyu H, Oishi K, Rikitomi N, Ariyoshi K** : Single dose of inhaled procaterol has a prolonged effect on exercise performance of patients with COPD. *Physiother Theory Pract* 24(4) : 255-263, 2008.
- 38) **有吉紅也** : 破傷風. 今日の治療指針2008 154-155, 2008.
- 39) **森本浩之輔** : 呼吸疾患におけるアポトーシス細胞クリアランス. 呼吸27(1) : 29-35, 2008.
- 40) **土屋菜歩, 有吉紅也** : 発展途上国における抗HIV治療. 治療学 42(5) : 612-615, 2008.
- 41) **有吉紅也** : エイズエイチアイヴィ AIDS/HIV. [新版]東南アジアを知る辞典 : 66, 2008.

- 42) 古本朗嗣：肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチン．治療学42(11)：1249-1251, 2008.
- 43) 森本浩之輔：腸チフス・パラチフス．今日の治療指針2008：139-140, 2008.
- 44) McPhillips KA, Dickinson MG, Linderman DJ, Morimoto K, Xiao YQ, Oldham KM, Vandivier RW, Henson PM, Gardai SJ : Surfactant proteins A and D suppress alveolar macrophage phagocytosis via interaction with SIRP alpha. *Am J Respir Crit Care Med* 178(2) : 158-167, 2008.
- 45) Watanabe K, Anh DD, Huong Ple T, Nguyet NT, Anh NT, Thi NT, Dung NT, Phuong DM, Rusizoka OS, Nagatake T, Watanabe H, Oishi K : Drug-resistant pneumococci in children with acute lower respiratory infections in Vietnam. *Pediatr Int* 50(4) : 514-518, 2008.
- 46) Furumoto A, Ohkusa Y, Chen M, Kawakami K, Masaki H, Sueyasu Y, Iwanaga T, Aizawa H, Nagatake T, Oishi K. Additive effect of pneumococcal vaccine and influenza vaccine on acute exacerbation in patients with chronic lung disease. *Vaccine* 26(33) : 4284-4289, 2008.
- 47) Futoshi Kuribayashi, Satoru Tsuruta, Tsuyoshi Yamazaki, Hiroyuki Nunoi, Shinobu Imajoh-Ohmi, Shiro Kanegasaki and Michio Nakamura, Cell adhesion markedly increases lucigenin-enhanced chemiluminescence of the phagocyte NADPH oxidase. *Genes to Cells* 13, 1249-1256, 2008.
- 48) Jutavijittum P, Yousuku A, Jiviriyawat Y, Kunachiwa W, Toriyama K : Southeast Genotypes of hepatitis B virus among children in Chiang Mai, Thailand. *Asian J Trop Med Public Health* 39(3) : 394-397, 2008.
- 49) Fujita S, Senba M, Kumatori A, Hayashi T, Ikeda T, Toriyama K : Human papillomavirus infection in oral verrucous carcinoma: Genotyping analysis and inverse correlation with p53 expression. *Pathobiology* 75(4) : 257-264, 2008.
- 50) Teruya H, Tomita M, Senba M, Ishikawa C, Tamayose M, Miyazato A, Yara S, Tanaka Y, Iwakura Y, Fujita J, Mori N : Human T-cell leukemia virus type 1 infects human lung epithelial cells and induces gene expression of cytokines, chemokines and cell adhesion molecules. *Retrovirology* 5 : 861-8610, 2008.
- 51) Yamashita T, Unno H, Mori Y, Tani H, Moriishi K, Takamizawa A, Agoh M, Tsukihara T, Matsuura Y : Crystal structure of the catalytic domain of Japanese encephalitis virus NS3 helicase/nucleoside triphosphatase at a resolution of 1.8 Å. *Virology* 373(2) : 426-436, 2008.
- 52) Olinger CM, Jutavijittum P, Hubschen JM, Yousukh A, Samounry B, Thammavong T, Toriyama K, Muller CP : Possible new hepatitis B virus genotype, southeast Asia. *Emerg Infect Dis* 14(11) : 1777-1780, 2008.

—エイズ・感染防御分野—

- 53) Yoshii H, Kamiyama H, Amanuma H, Oishi K, Yamamoto N, and Kubo Y, Kubo Y : Mechanisms underlying glycosylation-mediated loss of ecotropic receptor function in murine MDTF cells and implications for receptor evolution. *Journal of General Virology* 89 : 297-305, 2008.
- 54) Kubo Y, Yoshii H, Kamiyama H, Tominaga C, Tanaka Y, Sato H, Yamamoto N, Kubo Y : Ezrin, Radixin, and Moesin (ERM) proteins function as pleiotropic regulators of human immunodeficiency virus type 1 infection. *Virology* 375 : 130-140, 2008.
- 55) K. Miyakawa, R. Fujita, M. Katane, Y. Kubo, H. Amanuma : Effects of the ligand sequence modifications on the retargeted transduction by the retroviral vector having a ligand-chimeric Env protein. *Journal of General Virology* 89 : 3137-3143, 2008.

—生態疫学分野—

- 56) Minakawa N, Sonye G, Dida GO, Futami K, Kaneko S : Recent reduction in the water level of Lake Victoria has created more habitats for *Anopheles funestus*. *Malar J*, 7(1) : 119, 2008.
- 57) Minakawa N, Dida GO, Sonye GO, Futami K, Kaneko S : Unforeseen misuses of bed nets in fishing villages along Lake Victoria. *Malar J* 7 : 165, 2008.
- 58) Futami K, Sonye G, Akweywa P, Kaneko S and Minakawa N : Diving Behavior in *Anopheles gambiae* (Diptera : Culicidae) : Avoidance of a predacious wolf spider (Araneae : Lycosidae) in relation to life stage and water depth. *Journal of Medical Entomology*. 45 : 1050-1056, 2008.
- 59) Chen H, Minakawa N and Yan G : Conspecific sharing of breeding sites by anopheline female mosquitoes (Diptera : Culicidae) inferred from microsatellite markers. *Journal of Insect Behavior*, 21 : 24-33, 2008.

—国際保健学分野—

- 60) Hashizume M, Armstrong B, Wagatsuma Y, Faruque ASG, Hayashi T, Sack DA, Hashizume M : Rotavirus infections and climate variability in Dhaka, Bangladesh : a time-series analysis. *Epidemiology and Infection* (136) : 1281-1290, 2008.
- 61) Hashizume M, Wagatsuma Y, Faruque ASG, Hayashi T, Paul R. Hunter, Armstrong B, Sack DA : Factors determining vulnerability to diarrhoea during and after severe floods in Bangladesh. *Journal of Water and Health* (6) : 323-332, 2008.
- 62) Hashizume M, Armstrong B, Hajat S, Wagatsuma Y, Faruque ASG, Hayashi T, Sack DA : The effect of rainfall on the incidence of cholera in Bangladesh. *Epidemiology* (19) : 103-113, 2008.

- 63) 山本太郎：ハイチ いのちとの闘い．昭和堂，2008.
- 64) 門司和彦，橋爪真弘：IPCC 第四次報告書における“健康” 医学のあゆみ224(12)：940-941，2008.
- 65) Tahara Y, Moji K, Honda S, Nakao R, Tsunawake N, Fukuda R, Aoyagi K, Mascie-Taylor N：Fat-free mass and excess post-exercise oxygen consumption in the 40 minutes after short-duration exhaustive exercise in young male Japanese athletes. J Physiol Anthropol 27：139-143，2008.
- 66) 花田匡利，千住秀明，髭谷 満，菊野佑仁，及川真人，大嶋 崇，大曲正樹，北川知佳，藤本澄江，後藤 尚，神津 玲，本田純久，木田厚瑞：住民基本健診でのCOPD早期診断システムの有用性－11-Qを第一次スクリーニングに用いて－ 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌18：49-53，2008.
- 67) 横田賢一，三根真理子，本田純久，近藤久義，田川真須子，柴田義貞：長崎原爆被爆者の飲酒・喫煙状況の聞き取り関する検討．広島医学 61：290-292，2008.
- 68) Zhang Z, Cai G, Moji K, Yamamoto T, Wu X：A practical handbook for preventing exposure to blood among health workers. Tianjin Science and Technology Press, 2008.
- 69) Nakao Y, Moji K, Honda S, Oishi K：Initiation of breastfeeding within 120 minutes after birth is associated with breastfeeding at four months among Japanese women：A self-administered questionnaire survey. Int Breastfeed J 3 (1)，2008.
- 70) Hayashi Y, Murata F, Hashizume M, Nazrul I：Damage of the cyclone "Sidr" in Bangladesh in November, 2007. Journal of Natural Disaster Science 26：391-397，2008.

－国際健康開発政策学分野－

- 71) 磯 望，黒木貴一，後藤健介，黒田圭介，宗 建郎：雲仙普賢岳噴火以降の地形・植生環境の変化－火砕流堆積地域を中心に－ 自然災害研究協議会西部地区部会報・論文集，第32号，pp. 57-60，2008.
- 72) 磯 望，宗 建郎，益田俊郎，岡村亜矢，井上文和，黒木貴一，後藤健介，黒田圭介：地震防災のためのGISによる地域情報化の研究－福岡県西方沖地震と警固断層の検討事例－西南学院大学人間科学論集，第3巻，第2号，pp.93-120，2008.
- 73) 黒木貴一，磯 望，後藤健介：衛星データで見た太宰府市の山地斜面における土地被覆の季節変動．福岡教育大学紀要，第57号，第2分冊，pp.11-21，2008.
- 74) 磯 望，西木真織，後藤健介，黒木貴一，宗 建郎：衛星画像による太宰府市周辺土地被覆変化の特性．太宰府学，第2号，pp.54-66，2008.
- 75) 黒木貴一，後藤健介，磯 望：デジタルカメラによるリモートセンシングの方法とその

利用. 地図, Vol.46, No.2, 日本国際地図学会, pp.1-9, 2008年 6 月.

- 76) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: 雲仙の火砕流堆積地における侵食量評価の試み. 第 4 回土砂災害に関するシンポジウム論文集, 土木学会西部支部, pp.55-60, 2008年 8 月.
- 77) 依田健志, 樂得康之, 溝田 勉: 発展途上国のマラリア治療薬の偽造薬流通について—特に東南アジア, タイにおけるField Workの概要— 東京医科大学雑誌 66(1): 86-90, 2008.
- 78) Jimenez JJE, Mizota T: A study of the Influence of Nutritional interventions to address the HIV/AIDS and Tuberculosis pandemics including Public health and therapeutic nutrition strategies and actions. Systematic review. ITM-Nagasaki vol. 22, No7.

—病害動物学分野—

- 79) Hasegawa M, Tuno N, Yen NT, Nam VS & Takagi M, Takagi M: Influence of the Distribution of Host Species on Adult Abundance of Japanese Encephalitis Vectors—*Culex vishnui* Subgroup and *Culex gelidus*— in a Rice -cultivating Village in Northern Vietnam. American Journal of Tropical Medicine & Hygiene, 78(1): 159-168, 2008.
- 80) Phong TV, Tuno N, Kawada H, Takagi M: Comparative evaluation of fecundity and survivorship of six copepod (Copepoda: Cyclopidae) species, in relation to selection of candidate biological control agents against *Aedes Aegypti*. Journal of the American Mosquito Control Association, 24(1): 61-69, 2008.
- 81) Sugiura M, Horibe Y, Kawada H, Takagi M, Takagi M: Insect spiracle as the main penetration route of pyrethroids. Pesticide Biochemistry and Physiology, 91: 135-140, 2008.
- 82) 角田 隆, 守屋成一, 角田 隆: フライトミルとスピードガンを組み合わせた昆虫の飛翔距離推移法. 植物防疫, 62(7): 393-396, 2008.
- 83) Yoshinaga K, Gerudug IK, Herman B, Suryanatha A, Suarsana N, Iskandarsyah, Zainudin, Handomi, Dachlan YP, Maekawa Y, Kanbara H, Kanbara H: Malaria epidemiology and control methods in specific geographical foci in Lombok and Sumbawa islands of Indonesia; (I) Epidemiology. Trop Med Health, 36(2): 81-92, 2008.
- 84) Kasai S, Komagata O, Tomita T, Sawabe K, Tsuda Y, Kurahashi H, Ishikawa T, Motoki M, Takahashi T, Tanikawa T, Yoshida M, Shinjo G, Hashimoto T, Higa Y, Kobayashi M: Jpn. J. Infect. Dis., PCR-based identification of *Culex pipiens complex* collected in Japan., 61(3): 184-191, 2008.
- 85) 多賀賢一郎, 打田憲一, 野田孝治, 平井正志, 横田 勉, 川田 均, 津田良夫, 津田良夫: BG-センチネルTMトラップとCDC型ライトトラップの比較検討. 日本検疫医学会誌, 10(10): 33-37, 2008.

- 86) Kawada H, Temu E. A, Minjas J N. Matsumoto O. Iwasaki T. & , Kawada H : Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin-impregnated plastic strips against *Anopheles gambiae complex* in Bagamoyo, Coastal Tanzania. Journal of the American Mosquito Control Association, 24(3) : 404-409, 2008.
- 87) Chen H, Minakawa N, Cui L. & Yan G : Conspecific Sharing of Breeding Sites by Anopheline Female Mosquitoes (Diptera : Culicidae) Inferred from Microsatellite Markers. Journal of Insect Behavior, 21 : 24-33, 2008.
- 88) Futami K., Sonye G. Akweywa P, Kaneko S. & Minakawa N., Minakawa N : Diving Behavior in *Anopheles gambiae* (Diptera: Culicidae) : Avoidance of a predacious wolf spider (Araneae : Lycosidae) in relation to life stage and water depth. J. Med. Entomol, 45(6) : 1050-1056, 2008.
- 89) Minakawa N, Dida O. G, Sonye G, Futami K. & Kaneko S, Minakawa N : Unforeseen misuses of bed nets in fishing villages along Lake Victoria. Malaria J, 7 (165), 2008.
- 90) Minakawa N, Sonye G, Dida O G, Futami K & Kaneko S, Minakawa N : Recent reduction in the water level of Lake Victoria has created more habitats for *Anopheles funestus*. Malaria J, 7 (119), 2008.
- 91) Tsunoda T & Moriya S : Measurement of flight speed and estimation of flight distance of the bean bug, *Riptortus pedestris* (Fabricius) (Heteroptera : Alydidae) and the rice bug, *Leptocorisa chinensis* Dallas (Heteroptera : Alydidae) with a speed sensor and flight mills. Applied Entomology and Zoology, 43(3) : 451-456, 2008.
- 92) Hashizume M, Terao T & Minakawa N.T : The Indian Ocean Dipole and malaria risk in the highlands of western Kenya. Proceedings of the National Academy of Sciences, 106(6) : 1857-1862, 2008.
- 93) 宮城一郎, 當間孝子, 比嘉由紀子 : Corethrellidae, チスイケヨソイカ科 (新称) について (Diptera : Corethrellidae). 日本衛生動物学会誌, 59(4) 337-343, 2008.
- 94) Mi-Hyun Park, Wej Choochote, Se-Joo Kim, Pradya Somboon, Atiporn Saeung, Benjawan Tuetan, Yhoshio Tsuda, Masahiro Takagi, Deepark Joshi, Yajun Ma and Gi-Sik Min : Nonreproductive isolation among four allopatric strains of *Anopheles sinensis* in Asia. Journal of the American Mosquito Control Association, 24(4) 489-495, 2008.

—免疫遺伝学分野—

- 95) 平山謙二 : 糸状虫症 (フィラリア症). Today's Therapy 2008 今日の治療指針—私はこう治療している. Ed by 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢 p.190, 医学書院, 2008.
- 96) Shuaibu MN, Wuyep PT, Yanagi T, Hirayama K, Ichinose A, Tanaka T, Kouno I : Trypanocidal

- activity of extracts and compounds from the stem bark of *Anogeissus leiocarpus* and *Terminalia avicennoides*. Parasitol Res, 102(4) : 697–703, 2008.
- 97) Tsukamoto T, Dohki S, Ueno T, Kawada M, Takeda A, Yasunami M, Naruse T, Kimura A, Takiguchi M, Matano T : Determination of a major histocompatibility complex class I restricting simian immunodeficiency virus. AIDS, 22(8) : 993–994, 2008.
 - 98) Hinohara K, Nakajima T, Takahashi M, Hohda S, Sasaoka T, Nakahara K, Chida K, Sawabe M, Arimura T, Sato A, Lee BS, Ban JM, Yasunami M, Park JE, Izumi T, Kimura A, Kimura A : Replication of the association between a chromosome 9p21 polymorphism and coronary artery disease in Japanese and Korean populations. J Hum Genet, 53(4) : 357–359, 2008.
 - 99) Shuaibu MN, Pandey K, Wuyep PA, Yanagi T, Hirayama K, Ichinose A, Tanaka T, Kouno I : Castalagin from *Anogeissus leiocarpus* mediates the killing of Leishmania in vitro. Parasitol Res. 103(6) : 1333–8, 2008.
 - 100) Shuaibu MN, Wuyep PA, Yanagi T, Hirayama K, Tanaka T, Kouno I. : The use of microfluorometric method for activity-guided isolation of antiplasmodial compound from plant extracts. Parasitol Res, 102(6) : 1119–1127, 2008.
 - 101) Yu C, Yin X, Kikuchi M, Hirayama K, Zhu Y, Yu C : Isolation of the cDNAs encoding secreted and membrane binding proteins from egg of *Schistosoma japonicum* (Chinese strain). Acta Parasitol, 53(1) : 110–114, 2008.
 - 102) Migita K, S Abiru, M Tanaka, M Ito, T Miyashita, Y Maeda, T Koga, M Nakamura, A Komori, H Yatsushashi, H Ida, K Eguchi, K Hirayama, M Yasunami and H Ishibashi : Acute hepatitis in a patient with familial Mediterranean fever. Liver International, 28(1) : 140–142, 2008.
 - 103) Hikota Osawa, Marita Troye-Blomberg, Kenji Hirayama, Mihoko Kikuchi, Francis Hombhanje, Takeo Tanihata, Rachanee Udomsangpetch, Anders Bjorkman, Takatoshi Kobayakawa and Akira Kaneko : CTLA-4 polymorphisms and anti-malarial antibodies in a hyper-endemic population of Papua New Guinea. Tropical Medicine and Health, 36(2) : 93–100, 2008.
 - 104) Uyen DT, Huy NT, Trang DT, Nhien NT, Oida T, Hirayama K, Harada S, Kamei K : Effects of amino acids on malarial heme crystallization. Biol Pharm Bull, 31(8) : 1483–8, 2008.
 - 105) Soisungwan Satarug , Mihoko Kikuchi, Bin Li, Raewadee Wisedpanichkij, Kazuhisa Takeda, Kesara Na-Bangchang, Michael R. Moore, Kenji Hirayama and Shigeki Shibahara : Prevention of cadmium accumulation in retinal pigment epithelium with manganese and zinc. Exp. Eye Res, 87(6) : 587–93, 2008.
 - 106) Nguyen TPL, Kikuchi M, Vu TQH, Vu TTN, Hoang ND, Do QH, Tran TT, Vo T, Cao N, Tran

- D, Oyama T, Morita K, Yasunami M, Hirayama K : Protective and Enhancing HLA-alleles, HLA-DRB1*0901 and HLA-A*24, for Severe Forms of Dengue Fever, Dengue Hemorrhagic Fever and Dengue Shock Syndrome. PLoS Negl Trop Dis, 2(10) : e304, 2008.
- 107) Kato N, Miyata T, Tabara Y, Katsuya T, Yanai K, Hanada H, Kamide K, Nakura J, Kohara K, Takeuchi F, Mano H, Yasunami M, Kimura A, Kita Y, Ueshima H, Nakayama T, Soma M, Hata A, Fujioka A, Kawano Y, Nakao K, Sekine A, Yoshida T, Nakamura Y, Saruta T, Ogiwara T, Sugano S, Miki T, Tomoike H : High-density association study and nomination of susceptibility genes for hypertension in the Japanese National Project. Hum Mol Genet, 17(4) : 617-627 (2008).
- 108) Migita K, Nakamura T, Maeda Y, Miyashita T, Koga T, Tanaka M, Nakamura M, Komori A, Ishibashi H, Origuchi T, Ida H, Kawasaki E, Yasunami M, Eguchi K : MEFV mutations in Japanese rheumatoid arthritis patients. Clin Exp Rheumatol, 26 : 1091-1094 (2008).
- 109) 平山謙二, グエン ティエン フィ : マラリア. 最新医学(The medical Frontline) 新興・再興感染症 (後編) 第63巻 6 月増刊号, pp7-23, 最新医学社, 編集 田中正広, 2008.
- 110) 木村彰方, 赤座達也, 太田正穂, 船瀬 貢, 酒巻建夫, 佐田正晴, 田中秀則, 中島文明, 成瀬妙子, 丸鹿悦子, 安波道朗 : 第11回HLA-QCワーク ショップレポート MHC, 14(3) : 31-99, 2008.
- 111) 安波道郎 : 第11回HLA-QCワークショップレポート (DNA部門) - 方法論別検討 (SSP) - MHC, 14(3) : 52, 2008.
- 112) Pandey K, Pant S, Kanbara H, Shuaibu MN, Mallik AK, Pandey BD, Kaneko O, Yanagi T : Molecular detection of Leishmania parasites from whole bodies of sandflies collected in Nepal. Parasitol Res, 103 : 293-297, 2008.

— 共同研究室 —

- 113) Eda Suer., Suha Sayrac., Elif Sarinay., Hakan Emre Ozturk., Mustafa Turkoz., Akitoyo Ichinose., Tsuyoshi Nagatake., Kamruddin Ahmed. : Variation in the attachment of *Streptococcus Pneumoniae* to human pharyngeal epithelial cells after treatment with S-carboxymethylcysteine. J Infect Chemother. 14 : 333-336, 2008.
- 114) Mohammed N. Shuaibu., Ponchang T. A. Wuyep., Tetsuo Yanagi., Kenji Hirayama., Akitoyo Ichinose., Takashi Tanaka., Isao Kouno. : Typanocidal activity of extracts and compounds from the stem bark of *Anogeissus leiocarpus* and *Terminalia avicennoides*. Parasitol Res. 102 : 697-703, 2008.
- 115) M. N. Shuaibu., K. Pandey., P. A. Wuyep., T. Yanagi., K. Hirayama., A. Ichinose., T. Tanaka., I. Kouno. : Castalagin from *Anogeissus leiocarpus* mediates the killing of *Leishmania* in vitro. Parasitol Res. 2008

10. 2 学会発表演題

- 1) 橋爪真弘, 松尾信昭, 西原 徹, Manirul Islam : 「自然地理的条件と持続可能な開発ーブラマプトラ流域を対象として」 「バングラデシュにおけるサイクロン「シドル」後の疾病調査. 京都大学生存圏研究所研究集会, 京都大学宇治キャンパス木質ホール, 2008年1月21-22日.
- 2) 松木 啓, 宮城 啓, 黒木麗喜, 土橋佳子, 古本朗嗣, 吉嶺裕之, 森本浩之輔, 有吉紅也 : 若年者に発症し, *Mycobacterium intracellulare* 感染症を合併したDPBの1例. 第6回DPB・難治性気道疾患研究会, 東京, 2008年1月26日.
- 3) 金子 聡 : アフリカにおける“日本発”疫学研究展開の場の構築. 第18回日本疫学会, 東京, 2008年1月27日.
- 4) 石田正之, 中間貴弘, 山本 彰, 森本浩之輔, 有吉紅也 : 無症状で偶然に発見された肺動静脈奇形の2症例. 第16回日本呼吸器内視鏡学会中国四国支部会・第58回日本結核病学会中国四国支部会, 岡山市, 2008年2月2日.
- 5) 金子 修 : マラリア原虫の赤血球侵入の分子基盤. 第6回感染症沖縄フォーラム, 北谷, 沖縄, 2008年2月14-16日.
- 6) 後藤健介 : リモートセンシングおよびGISを用いた社会環境要因に帰する感染症対策への適用研究, リモートセンシングの保健医療分野における応用の可能性と適用事例. 平成19年度 長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「共同研究会」 長崎, 2008年2月21-22日.
- 7) 後藤健介, 依田健志, 楽得康之, 溝田 勉 : 水害時における災害モニタリングへの衛星データ利用. 第26回日本国際保健医療学会西日本地方会, 岡山, 2008年3月1日.
- 8) 依田健志, 瀧栄志郎, 竹蓋清高, 楽得康之, 溝田 勉 : 医学部学生における国際保健分野に対する意識調査. 第26回日本国際保健医療学会西日本地方会, 岡山, 2008年3月1日.
- 9) 和田昭裕 : 蛍光相関分光法を用いた細菌毒素とガングリオンド結合親和性の検出と評価. 第82回日本細菌学会総会, 名古屋, 2008年3月12-14日.
- 10) 杉浦正昭, 川田 均, 高木正洋 : 殺虫エアゾール剤の直接噴霧における虫体内への薬剤侵入経路. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 11) 川田 均, 比嘉由紀子, Thi Yen Nguyen, Hai Son Tran, Thuy Hoa Nguyen, 高木正洋 : ベトナム全土における古タイヤに発生する蚊類の生体調査(2) ネットアイシマカ, ヒトスジシマカおよびネットアイエカ幼虫のピレスロイド感受性調査. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 12) 高野(竹中)宏平, Thi Hong Ngoc Nguyen, Thi Huong Binh Nguyen, Duc Manh Nguyen, 高木正洋 : DNAシーケンスによるベトナム産ハマダラカ *Leucosphyrus* グループ1新種の確

- 認. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 13) 伊澤晴彦, 星野啓太, 佐々木年則, 津田良夫, 金 京純, 梁瀬 通, 今田忠男, 川田 均, 角田 隆, 大橋和典, 前川芳秀, 高木正洋, 小林睦夫, 澤邊京子: 2007年国内捕集コガタアカイエカからの日本脳炎ウイルスの検出および遺伝子解析. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 14) 川田 均, 前川芳秀, 阿部眞由美, 大橋和典, 角田 隆, 高木正洋: 長崎市中心部の公園に発生するアカイエカ群およびヒトスジシマカ幼虫の採集とピレスロイドに対する感受性調査. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 15) 比嘉由紀子, Thi Yen Nguyen, 川田 均, Hai Son Tran, Thuy Hoa Nguyen, 高木正洋: ベトナム全土における古タイヤに発生する蚊類の生態調査(1)ネッタシマカおよびヒトスジシマカ幼虫の侵襲度調査. 第60回日本衛生動物学会大会, 下野市, 2008年3月17-19日.
- 16) 和田昭裕, 平山壽哉: コレラ毒素Bサブユニットが示す生物活性の解析. 第81回日本細菌学会総会, 京都, 2008年3月24日-26日.
- 17) 久恒順三, 中山真彰, 磯本 一, 倉園久生, 平山壽哉: *H. pylori* VacAによるマクロファージ系細胞U937からのIL-8産生機序の解析. 第81回日本細菌学会総会, 国立京都国際会館, 2008年3月24-26日.
- 18) 後藤健介, 黒木貴一, 磯 望: 植物活性度変化の区分とそれに関連する雲仙の地形. 日本地理学会2008年春季学術大会, 埼玉, 2008年3月29-31日.
- 19) 大槻 均, 金子 修, 入子英幸, 竹尾 暁, 坪井敬文, Thangkukiatkul Amporn: ネズミマラリア原虫の赤血球結合分子EBLの局在と病原性. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎, 2008年4月2-4日.
- 20) 曹 俊, Kaneko O, Thangkukiatkul A, Tachibana M, Otsuki H, Tsuboi T, Torii M: A complex formation of Rhoptry Neck Protein 2 with a microneme protein, AMA1, in *Plasmodium falciparum*. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎, 2008年4月2-4日.
- 21) 早川敏之, カレトン リチャード, 堀井俊宏, 田邊和祐: 現生マラリア原虫の起源での急速な多様化(マラリアビッグバン). 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎, 2008年4月2-4日.
- 22) 井上雅広, 安田幸一, 井上大志, 上村春樹, 福岡利英: トリパノソーマ原虫の14-3-3タンパクの脂質代謝における作用. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎, 2008年4月2-4日.
- 23) 上村春樹, 柳 哲雄, 紗羅知明子クリスティーナ, 加藤美枝, 堀尾政博, 神原廣二: *T. cruzi* トランスシアリダーゼファミリーにおけるアミノ酸置換と酵素活性. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎, 2008年4月2-4日.

- 24) 砂原俊彦, 山本太郎: マラリアコントロールは村はずれの一軒家を優先させるべきである. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎市, 2008年4月3-4日.
- 25) 平山謙二, 狩野繁之: デイバート 司会の言葉一激論! 日本寄生虫学会の使命と役割. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 26) 原國哲也, 菊池三穂子, 奈良武司, 宮田 健, 平山謙二, 新川 武: 日本住血吸虫パラミオシン抗原を用いた粘膜ワクチンに関する研究. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 27) Del Puerto Florencia, 菊池三穂子, Nishizawa Eiki, Iihoshi Keiko, Velarde Freddy, Renjel Luis, Roca Jelin, 三浦左千夫, 肥後廣生, 平山謙二: Identification of lineages of *Trypanosoma Cruzi* in patients with chagas disease from Bolivia. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 28) Shuaibu M Nasir, 菊池三穂子, 柳 哲雄, 神原廣二, 平山謙二: Selection and identification of a novel malaria DNA-based vaccine candidate using bioinformatics. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 29) Helegbe Gideon Kofi, Nguyen Huy Tien, 柳 哲雄, Shuaibu Mohamed Nasir, 山崎朗子, 菊池三穂子, 安波道郎, 平山謙二: Modelling red blood cell loss at low parasitaemia in different strains of *Plasmodium berghei* ANKA infected mice. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 30) 曾根敏雄, 大城 聡, 松下 祥, 平山謙二: *Trypanosoma cruzi* Iと*Trypanosoma cruzi* II間で差異のあるタンパク質のプロテオーム解析による同定. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 31) Abdel-Hafeez Ekhlas Hamed, 菊池三穂子, 渡部幹次, 伊藤 敬, 平山謙二: Proteome approach for identification of Vaccine Candidate Antigens for *Schistosoma Japonicum* infection. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 32) Huang Mingguo, Nguyen Huy Tien, 内藤真理子, 亀井加恵子, Smalley John W, 菊池三穂子, 安波道郎, 中山浩次: Using Porphyromonas HA2 hemagglutinin to explore the mechanism of malarial pigment formation. 第77回日本寄生虫学会大会, 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 33) Atsushi Maeda, Nguyen Tien Huy, Keisuke Mizunuma, Yusuke Shima, Dinh Thanh Uyen, Nguyen Thanh Thuy Nhlen, Shigeharu Harada, Kaeko Kamei: HLA-DNAタイピングから個人の全ゲノム情報解読の時代へ. 第77回日本寄生虫学会大会, マラリア色素形成における脂質の役割. 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 34) Dinh Thanh Uyen, , Nguyen Tien Huy, Dai Thi Xuan Trang, Atsushi Maeda, Motohiro

- Sasai, Nguyen Thanh Thuy Nhlen, Tatsuo Oida, Shigeharu Harada, Kaeko Kamei : 第77回日本寄生虫学会大会, Effect of amino acids and saturated fatty acids on malarial heme crystallization. 長崎ブリックホール, 長崎, 2008年4月3-4日.
- 35) 田中健之 : アポトーシス細胞貪食除去(efferocytosis)における Monocyte Chemoattractant Protein-1 (MCP-1/CCL2)の役割. 第28回気道分泌研究会, 東京, 2008年4月12日.
- 36) 中野貴司, 宮城 啓, 石崎有澄美, 市村 宏, 庵原俊昭, 岩田 敏, 岡田賢司, 金川修造, 高山直秀, 西山利正, 萩原敏且, 濱田篤郎, 春田恒和, 宮津光伸, 渡邊 浩, 尾内一信 : 渡航者に対する未認可ワクチン接種の臨床研究～腸チフスと髄膜炎菌ワクチン. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 37) 渡邊貴和雄, 江原雅彦, 千馬正敬, 一ノ瀬昭豊, 土橋佳子, 黒木麗喜, 古本朗嗣, 宮城啓, 森本浩之輔, 有吉紅也 : *Streptococcus sanguis* 培養ろ液の緑膿菌に対する殺菌作用. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 38) 秦 亮, 真崎宏則, 渡邊貴和雄, 古本朗嗣, 渡邊 浩 : Genetic Analysis of *Streptococcus pneumoniae* Isolates Indicating Possible Nosocomial Transmission Routes in Japan. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 39) 山領 豪, 小山和彦, 川上健司, 木村由美子, 森本浩之輔, 有吉紅也 : 当院における過去5年間の中心静脈カテーテル感染症例についての検討. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 40) 古本朗嗣, 延末謙一, 小笠原徹, 齊藤信夫, 山田晃嗣, 田中健之, 寺田真由美, 本田章子, 黒木麗喜, 宮城 啓, 土橋佳子, 渡邊貴和雄, 森本浩之輔, 有吉紅也 : 当科がコンサルトを受けた感染性心内膜炎12症例の検討. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 41) 小山和彦, 山領 豪, 川上健司, 森本浩之輔, 有吉紅也 : 当院における過去8年間の脊椎カリエスの検討. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 42) 齋藤玲子, 鈴木康司, 小熊妙子, 菖蒲川由郷, 佐藤 勇, 西村秀一, 川島 崇, 日比成美, 生嶋 聡, 藤原史博, 綱本健太郎, 橋田哲夫, 星野和彦, 麻生憲史, 出川 聡, 石川秀文, 松木 啓, 真崎宏則, 鈴木 宏 : 2005-06, 2006-07年シーズンの本邦におけるアマンタジン耐性A型インフルエンザ頻度. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 43) 宮城 啓, 大石和徳, 渡邊 浩 : 長崎大学COE熱帯感染症臨床研修－フィリピン研修5年間の総括. 第82回日本感染症学会総会, 島根, 2008年4月17-18日.
- 44) 渡邊貴和雄, 江原雅彦, 千馬正敬, 一ノ瀬昭豊, 土橋佳子, 黒木麗喜, 古本朗嗣, 宮城啓, 森本浩之輔, 有吉紅也 : *Streptococcus sanguis* 培養ろ液の緑膿菌に対する殺菌作用. 第82回日本感染症学会, 島根, 2008年4月17-19日.

- 45) 森本浩之輔：COPDにおけるapoptotic cell clearanceの意義。第60回日本呼吸器学会日本結核病学会九州地方会春季大会，宮崎，2008年4月26日。
- 46) 小笠原徹，本田章子，黒木麗喜，森本浩之輔，有吉紅也，田川 努，永安 武，林徳真吉，山領 豪：肺原発 MALT lymphoma の1例。第60回日本呼吸器学会日本結核病学会九州地方会春季大会，宮崎，2008年4月26日。
- 47) 一ノ瀬昭豊：細菌，小型ウイルスの為の代替えネガティブ染色剤。第24回医学生物学電子顕微鏡技術学会学術講演会，横須賀，2008年5月16-18日。
- 48) Takagi M：Global Warming, Environment and viral Infections, Vector infestation and environmental change。第42回日米合同ウイルス専門部会長崎会議良順会館，2008年5月26日。
- 49) 吉川 亮，井上真吾，吾郷昌信，森田公一：長野県におけるイノシシの日本脳炎抗体保有率調査。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 50) 鍋島 武，井上真吾，住吉 誠，春田泰弘，Phan Thi Nga, Hyunh Thin Kim Loan, Vu Thi Que Huong, Maria del Carmen Parquet, 長谷部 太，森田公一：東アジア，東南アジアにおける日本脳炎ウイルス遺伝子型の遷移。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 51) 井上真吾，福家 巧，石川豊数，Guillermo Posadas Herrera, Maria del Carmen Parquet, 長谷部 太，森田公一：西ナイルウイルス不活化ワクチンの開発と最少有効投与量の評価。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 52) 村木優子，松浦正明，福家 巧，真鍋貞夫，石川豊数，奥野良信，東 擁，森田公一：ウエストナイルウイルスワクチンのマウス及びイスにおける免疫原性について。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 53) 左 一八，在原雅貴，杉浦信夫，木全弘治，鈴木康夫，森田公一，鈴木 隆：硫酸化糖鎖分子に対するフラビウイルス結合性の解析。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 54) 長谷部 太，木下一美，Vu Thi Que Huong, Michael O. Baclic, Ronald R. Matias, Filipinas F. Natividad, 井上真吾，森田公一：Viral quasispeciesと媒介蚊体内における優勢なウイルス準種の置き換わり，デング患者の末梢血中における優勢なウイルス準種。第43回日本脳炎ウイルス生態学研究会，香川県観音寺市，2008年5月30-31日。
- 55) 春原光宏，長村 航，田代尚樹，渋谷英樹，原 啓，鈴木丈夫，是永建雄，久田哲哉：当院における胸部領域病変に対する超音波ガイド下経皮針生検施行例についての検討。第48回日本呼吸器学会学術講演会，神戸，2008年6月15-17日。
- 56) 土橋佳子，松木 啓，田中健之，寺田真由美，古本朗嗣，本田章子，黒木麗喜，森本浩之輔，有吉紅也，山下嘉郎，田中 光：当科で経験した肺胞蛋白症9例の検討。第48回日本

呼吸器学会学術講演会，神戸，2008年6月15-17日。

- 57) 森本浩之輔，寺田真由美，田中健之，土橋佳子，有吉紅也：びまん性肺疾患における気管支肺胞洗浄液中肺胞マクロファージのアポトーシス細胞貪食率。第48回日本呼吸器学会学術講演会，神戸，2008年6月15-17日。
- 58) 宮城 啓：渡航者に対する未認可ワクチン接種の臨床研究～腸チフスと髄膜炎菌ワクチン。第12回日本渡航医学会学術集会，岡山，2008年7月18-19日。
- 59) 氏家無限，草開俊之，宮城 啓，有吉紅也：当院海外旅行外来における4年間の実績と問題点。第12回日本渡航医学会学術集会，岡山，2008年7月18-19日。
- 60) 久恒順三，中山真彰，磯本 一，河野 茂，平山壽哉：*H. pylori* が産生する VacA 毒素の毒性発現機序の解析－VacA による単球系細胞からの IL-8 産生機構について－ 第2回細菌学・若手コロッセウム，湘南国際村センター，2008年8月3-5日。
- 61) 矢幡一英，前島一博，今本尚子，今本文男，金子 修：マラリア原虫への外来遺伝子の導入と制御に向けて。第16回分子寄生虫学ワークショップ，群馬県吾妻郡草津町，2008年8月3-6日。
- 62) Morakot Kaewthamasorn，矢幡一英，Jean Seme Fils Alexandre，中澤秀介，鳥居本美，Jetsumon Sattabongkot，Rachanee Udomsangpetch，金子 修：マラリア原虫感染赤血球表面分子に対する選択圧。第16回分子寄生虫学ワークショップ，群馬県吾妻郡草津町，2008年8月3-6日。
- 63) 寺尾 徹，S. M. Shah-Newaz，中山由美，加藤丈朗，橋爪真弘，村田文絵，林 泰一：Bangladesh, Sirajganj 付近で発生した大規模な河岸侵食。水文・水資源学会2008，東京大学，2008年8月26-27日。
- 64) 有吉紅也：日常に遭遇するHIV感染症について。第22回日本臨床内科医学会，長崎，2008年9月14-15日。
- 65) 安波道郎：HLA-DNAタイピングから個人の全ゲノム情報解読の時代へ。HLA-DNAタイピングから個人の全ゲノム情報解読の時代へ。第17回 日本組織適合性学会大会(認定制度講習会)，大阪国際会議場，大阪，2008年9月19-21日。
- 66) 安波道郎，Nguyen T P Lan，菊地三穂子，Vu T Q Huong，Vu T T Ngu，Hoang N Dao，Do Q Ha，Tran T Thuy，Ha M Tuan，Vo V Tuong，Cao T P Nga，Tran V Dat，奥田尚子，堀江仁美，森田公一，平山謙二：VietnamのKinh 民族集団に見出されたDRB1アレルの解析。第17回 日本組織適合性学会大会，大阪国際会議場，大阪，2008年9月19-21日。
- 67) 後藤健介，米家克彦，上田 憲，後藤恵之輔：日本海沿岸県におけるナラ類集団枯損被害の衛星リモートセンシング調査。第27回日本自然災害学会 学術講演会，福岡，2008年9月25-26日。

- 68) 安波道郎, Nguyen T P Lan, 菊池三穂子, Vu T Q Huong, Vu T T Ngu, Huong N Dao, Do Q Ha, Tran T Thuy, Ha M Tuan, 柴田宏樹, 堀江仁美, 森田公一, 平山謙二: デング出血熱重症例における遺伝子発現プロファイルの動的解析. 日本人類遺伝学会第53回大会, パシフィコ横浜会議センター, 横浜市, 2008年9月27-30日.
- 69) 安波道郎, 山崎朗子, 菊池三穂子, Bar-tholomew D Akanmori, Michael Ofori, Gideon K Helegbe, 堀江仁美, 平山謙二: ガーナ民族集団におけるABO遺伝子座多型の解析. 日本人類遺伝学会第53回大会, パシフィコ横浜会議センター, 横浜市, 2008年9月27-30日.
- 70) 江原雅彦, Nguyen Dong Tu, 岩見 守, 一瀬休生: 2007-2008年にベトナムで分離されたコレラ菌の性状について. 第61回日本細菌学会九州支部総会, 熊本, 2008年10月3-4日.
- 71) 一瀬休生, 江原雅彦, 越智定幸, 辻 孝雄, 嶋田雅暁, Mohamed Karama, Carolyne Wahome, Angela Makumi, Guyo Huka Sora, Soti David, Njeri Wamae: 西ケニアで流行した01コレラ菌株の性状について. 第61回日本細菌学会九州支部総会, 熊本, 2008年10月3-4日.
- 72) 江原雅彦, 岩見 守, Nguyen Dong Tu, 一瀬休生: 2007-2008年にベトナムで分離されたコレラ菌の性状について. 第61回日本細菌学会九州支部総会, 熊本, 2008年10月3-4日.
- 73) 中島悠次郎, 磯本 一, 久恒順三, 中山真彰, 河野 茂, 平山壽哉: *Helicobacter pylori* 感染胃粘膜における CCL20, CXCL13 発現の検討. 第61回 日本細菌学会九州支部総会, 熊本大学付属病院 山崎記念館, 2008年10月3-4日.
- 74) 菊池三穂子, エクラス・ハメド ハーフィズ, 渡部幹次, 伊藤 敬, 奈良武司, 平山謙二: 日本住血吸虫の放射線照射セルカリアに誘導される感染防御機構の解析. 第7回分子寄生虫・マラリア研究フォーラム, 松山市男女共同参画推進センター(コムズ), 松山市, 2008年10月10-11日.
- 75) Masahiko Ehara, Nguyen Dong Tu, Ngo Tuan Cuong, Tran Huy Hoang, Le Thanh Huong, Nguyen Hoai Thu, Mamoru Iwami and Nguyen Binh Minh: Vibriophages in the northern provinces in Vietnam. Forum of the network of research Centers on Infectious Diseases, Hanoi, Vietnam, October 16, 2008.
- 76) 氏家無限, 有吉紅也, 一瀬休生, 嶋田雅暁: 長崎大学熱研内科での国際医療活動実施のための取組み—ケニア・ナイロビでの臨床医療活動の経験を通して— 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会大会, 東京, 2008年10月25-26日.
- 77) Puerto Rodas Del Fioresencia, 菊池三穂子, Nishizawa J Eiki, Iihoshi Keiko, Velarde U G Freddy, Renjel A Luis, 三浦左千夫, 安波道郎, 平山謙二: 慢性シャーガス病発症に關与する宿主免疫応答關連分子の解析. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 国立国際医療センター, 東京, 2008年10月25-26日.

- 78) 上地玄一郎, Le Thi Quynh mai, 山城 哲: H5N1インフルエンザウイルス感染回復者からのヒト型Fabライブラリーの構築とファージディスプレイ法を用いた中和モノクローナル抗体の単離 Construction of a human Fab library using lymphocytes from a volunteer who recovered from H5Ni infection. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 国立国際医療センター, 東京, 2008年10月25日-26日.
- 79) Ngwe Tun Mya Myat, Kyaw Zin Thant, Parquet Maria del C., 井上真吾, Yee Yee Lwin, Pe Thet Khin, Tin Myint, Khin Htwe, 鍋島 武, 森田公一: ミャンマー北部におけるデングウイルス感染症の分子疫学的および血清学的調査 Molecular epidemiological and serological surveillance on dengue virus infection in Upper Myanmar. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 国立国際医療センター, 東京, 2008年10月25日-26日.
- 80) 山城 哲, Nguyen Binh Minh, Ngo Tuan Cuong, Quach Thi Huong, Nguyen Hoai Thu, Le Thanh Huong, Nguyen Dong Tu, 江原雅彦: 07年10月から08年4月にかけて北部ベトナムで発生したコレラアウトブレイクに関する報告 Vibrio cholerae outbreak occurred in northern Vietnam between October 07 and April 08. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 国立国際医療センター, 東京, 2008年10月25日-26日.
- 81) 鍋島 武, Hyunh Thi Kim Loan, 井上真吾, 住吉 誠, 春田泰宏, Phan Thi Nga, Vu Thi Que Huong, Parquet maria del Carmen, 長谷部 太, 森田公一: 東アジア, 東南アジアにおける日本脳炎ウイルス遺伝子型の遷移 Japanese encephalitis virus travelling from Southeast Asia to East Asia. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 国立国際医療センター, 東京, 2008年10月25日-26日.
- 82) 阿部朋子, 砂原俊彦, 本田純久, トゥオン チン ディン, トゥアン レ カン, 中澤秀介, 門司和彦, 高木正洋, 山本太郎: 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, ベトナム南部の少数民族居住地域におけるマラリア感染のリスクファクター. 東京, 2008年10月25-26日.
- 83) Pandey Kishor, Mallik Arun Kumar, Pandey Basu Dev, 金子 修, 柳 哲雄: Diagnosis of visceral leishmaniasis by polymerase chain reaction of DNA extracted from Giemsa stained slides from Nepal. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 東京, 2008年10月25-26日.
- 84) 金子 修, Kaewthamasorn Morakot, 矢幡一英, Alexandre Jean, 中澤秀介: マラリア原虫感染赤血球表面分子に対する選択圧. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 東京, 2008年10月25-26日.
- 85) 橘 裕司, 柳 哲雄, 小林正規, 神原廣二: 長崎市の飼育ニホンザルから分離された *Entamoeba nuttalli* の性状解析. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 東京, 2008年10月25-26日.

術大会，東京，2008年10月25-26日。

- 86) **Xangsayarath Phonepadith, 金田英子, Pongvongsa Tiengkham, Bouphe Bounnong, 門司和彦**：ラオスセボン郡における蚊帳使用と熱帯熱マラリアの感染。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 87) **大田えりか, 野内英樹, 春名めぐみ, 鈴木 基, Anh DD, Thiem VD, Tho LH, 有吉紅也, 村嶋幸代**：ベトナム人妊婦の屋内受動喫煙が早産および低出生体重児出産のリスクに及ぼす影響。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 88) **谷村 晋, Thiem VD, 後藤健介, 鈴木 基, Tho LH, Kilgore P, 有吉紅也, Anh DD, 野内英樹**：区域人口を行政界で集計することにより生じる誤差の検討。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 89) **氏家無限, 有吉紅也, 一瀬休生, 嶋田雅暁**：長崎大学熱研内科における国際医療活動実践のための取組み。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 90) **三島伸介, 西山利正, 天野博之, Phounsavath S, Sylavanh P, 宮城 啓, Xaypangna T, Phanmanivong V, 神田靖士, Lamaningao P**：ラオス人民民主共和国における僻地農民に対する健康実相調査-カムワン県ボラパー郡の住民を対象に。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 91) **Thiem VD, 鈴木 基, 後藤健介, 谷村 晋, Tho LH, Kilgore P, 溝田 勉, 有吉紅也, Anh DD, 野内英樹**：ベトナム国中部カンホア省における高い家畜の頻度と小児下痢症の関連についての地理情報システム分析。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 92) **後藤健介, Vu Dinh Thiem, 都築 中, 比嘉由紀子, 谷村 晋, 鈴木 基, 高木正洋, 溝田 勉, Dang Duc Anh, 野内英樹**：リモートセンシングによるベトナム・ニャチャン市における疾病対策データのための都市化解析。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 93) **谷村 晋, Vu Dinh Thiem, 後藤健介, 鈴木 基, Le Huu Tho, Kilgore Paul, 有吉紅也, Dang Duc Anh, 野内英樹**：区域人口を行政界で集計することにより生じる誤差の検討。第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日。
- 94) **Vu Dinh Thiem, 鈴木 基, 後藤健介, 谷村 晋, Le Huu Tho, Kilgore Paul, 溝田 勉, 有吉紅也, Dang Duc Anh, 野内英樹**：ベトナム国中部カンホア省における高い家畜の頻度と小児下痢症の関連についての地理情報システム分析。第49回日本熱帯医学会大会・第

- 23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日．
- 95) 依田健志, Quanasri Orawan, 松山章子, 峰松和夫, 後藤健介, 楽得康之, 溝田 勉：タイ中央部におけるエイズ遺児のケアシステムとサポート体制．第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，東京，2008年10月25-26日．
- 96) 澤邊京子, 比嘉由紀子, Nguyen Thi Yen, Phan Thi Nga, 伊澤晴彦, 星野啓太, 鋤田龍星, 佐々木年則, 高木正洋：2006～2008年ベトナム国内捕集蚊における蚊媒介性ウイルス保有状況．第49回日本熱帯医学会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，国立国際医療センター，東京，2008年10月25-26日．
- 97) 砂原俊彦：ベクター対策の数理モデルとコミュニティーへの応用．第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会，国立国際医療センター国際医療協力局，東京，2008年10月25-26日．
- 98) 木下一美, Huong Vu Thi Que, Hung Nguyen Thanh, Michael Baclig O, Corazon Buerano C, Ronald Matias R., Filipinas Natividad F, 井上真吾, 森田公一, 長谷部 太：第56回日本ウイルス学会学術集会，デング患者の末梢血中におけるウイルス準種(viral quasispecies)と細胞向性．岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 99) 左 一八, 森田公一, 鈴木 隆：第56回日本ウイルス学会学術集会，フラビウイルスー硫酸化糖鎖分子間相互作用の解析．岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 100) 余福勲, 長谷部 太, 井上真吾, 森田公一：JEV NS3 protein inhibit RNA polymerase activity of JEV NS5 protein in vitro．第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 101) 長谷部 太, Mai Le Thi Quynh, Thuy Nguyen Thi Thu, Thach Nguyen Co, Cuong Vuong Duc, Dhin Bui Thi, Phuong To Thanh, Ba Nguyen Van, 井上真吾, 余福勲, Thong Vu Dhin, 森田公一：ベトナムに棲息するコウモリにおける新興再興ウイルス感染症の調査．第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 102) 鍋島 武, 井上真吾, Maria del Carmwn Parquet, 長谷部 太, 森田公一：日本脳炎ウイルスの東南アジアから日本への移動経路について．第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 103) 久保 亨, 井上真吾, 鍋島 武, 森田公一：デングウイルスの4血清型の全てを同時に検出可能なデングウイルス共通 RT-LAMP法の確立．第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 104) 久保 亨, 森田公一：黄熱病ウイルスに対するRT-LAMP法の確率．第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日．
- 105) 久保 亨, 井上真吾, 岡本健太, 森田公一：精製黄熱病ウイルスを用いた間接ELISA法

- による黄熱病血清疫学診断系の確立と、そのケニア共和国における応用。第56回日本ウイルス学会学術集会，岡山コンベンションセンター，2008年10月26日-28日。
- 106) 久保嘉直，神山陽香，吉居廣朗，佐藤裕徳，山本直樹：日本ウイルス学会，HIV-1ウイルス粒子に取り込まれたエズリン・ドミナント・ネガティブ変異体による感染抑制。岡山，2008年10月26-28日。
- 107) 吉居廣朗，神山陽香，佐藤裕徳，山本直樹，久保嘉直：日本ウイルス学会，CD4非依存性HIV-1細胞内侵入におけるカテプシン群蛋白質分解酵素の関与。岡山，2008年10月26-28日。
- 108) 神山陽香，吉居廣朗，田中勇悦，佐藤裕徳，山本直樹，久保嘉直：日本ウイルス学会，X4-tropic HIV感染におけるCXCR4のラフト局在の重要性。岡山，2008年10月26-28日。
- 109) Ekhlash Hamed Abdel-Hafeez, 菊地三穂子，渡部幹次，伊藤 敬，奈良武司，新川 武，青木克己，平山謙二：プロテオーム解析による日本住血吸虫症感染防御ワクチン候補分子の探索。第61回日本寄生虫学会南日本支部大会・第58回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会，沖縄産業支援センター，沖縄，2008年11月1-2日。
- 110) 川田 均，比嘉由紀子，Nguyen Thi Yen, Tran Hai Son, Nguyen Thuy Hoa, 駒形 修，葛西真治，富田隆史，高木正洋：ベトナム全土における古タイヤに発生する蚊類の生態調査(3) ネットアイシマカのピレスロイド抵抗性に関する要因解析とkdr遺伝子頻度の解析(予報)。第61回日本寄生虫学会・第58回日本衛生動物学会南日本支部合同大会，那覇市，沖縄産業支援センター，2008年11月1-2日。
- 111) 比嘉由紀子，川田 均，高村典子，大田黒嵩伸，Nguyen Thi Yen, Tran Hai Son, Nguyen Thuy Hoa, 高木正洋：ベトナム全土における古タイヤに発生する蚊類の生態調査(4) 幼虫発生源としての古タイヤの重要性。第61回日本寄生虫学会・第58回日本衛生動物学会南日本支部合同大会，那覇市，沖縄産業支援センター，2008年11月1-2日。
- 112) 依田健志，依田健志，峰松和夫，溝田 勉：衛星データ解析による黄砂の飛来量と気管支喘息との関連調査研究。第67回日本公衆衛生学会総会，福岡，2008年11月5-7日。
- 113) 依田健志，峰松和夫，後藤健介，樂得康之，溝田 勉：メキシコシティの精神病院における赤痢アメーバの感染について。第67回日本公衆衛生学会総会，福岡，2008年11月5-7日。
- 114) 山田康一，高木理博，田代尚樹，天野秀明，藤田紀代：急性膿胸に対する内科的胸腔鏡の有用性について。第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会，沖縄，2008年11月6-7日。
- 115) 中岡大士，古本朗嗣，高木理博，森本浩之輔，有吉紅也：急性呼吸不全を呈したルミエール症候群の一例。第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会，沖縄，

2008年11月6-7日.

- 116) 齊藤信夫, 吉嶺裕之, 鹿島清隆, 有吉紅也: Oxaliplatinによって発症したと考えられた慢性好酸球性肺炎の一例. 第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 沖縄, 2008年11月6-7日.
- 117) 松木 啓, 土橋佳子, 森本浩之輔, 有吉紅也, 山下嘉郎, 田川 努, 永安 武: 不可逆的な肺線維化が進行し, 最終的に肺移植が必要となった治療抵抗性肺胞蛋白症の一例. 第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 沖縄, 2008年11月6-7日.
- 118) 田川 努, 中村昭博, 山崎直哉, 土谷智史, 宮崎拓郎, 持永浩史, 永安 武, 松木 啓, 土橋佳子, 森本浩之輔, 有吉紅也: 肺胞蛋白症に対する本邦初の生体肺葉移植術. 第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 沖縄, 2008年11月6-7日.
- 119) 石田正之, 草開俊之, 島崎貴治, 松木 啓, 小山和彦, 古本朗嗣, 黒木麗喜, 宮城 啓, 土橋佳子, 森本浩之輔, 有吉紅也: 当科におけるガイドシース併用気管支内腔超音波検査(EBUS-GS)の使用経験. 第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 沖縄, 2008年11月6-7日.
- 120) 泉田真生, 石田正之, 力富真惟子, 黒木麗喜, 森本浩之輔, 林徳眞吉, 有吉紅也: ガイドシース併用下気管支内腔超音波内視鏡による肺生検(EBUS-GS-TBB)により確定診断に至った肺クリプトコッカス症の一例. 第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部秋季学術講演会, 沖縄, 2008年11月6-7日.
- 121) 菊池三穂子, 余 伝信, 陳 紅根, 平山謙二: 日本住血吸虫のゲノム解析 ―何が何処までわかる?― 第2回蛭研究会, 青島サンクマール, 宮崎市, 2008年11月7-8日.
- 122) 山下嘉郎, 星野和彦, 黒木麗喜, 森本浩之輔, 有吉紅也, 真崎宏則, 安倍邦子, 林 徳眞吉: 非小細胞肺癌の長期生存と思われる1例. 第283回日本内科学会九州地方会, 熊本, 2008年11月16日.
- 123) 川田 均: 日本環境動物昆虫学会創立20周年記念大会, 感染症媒介蚊が変化していくーヒトと環境が生態系におよぼす影響ー. 京都市, 京都大学百周年時計台記念館, 2008年11月16-17日.
- 124) Nguyen Tien Huy, Gideon Kofi Helegbe, Tetsuo Yanagi, Mohammed Nasir Shuaibu, Mihoko Kikuchi, Michio Yasunami, and Kenji Hirayama: Role of auto-antibodies in malarial anemia. GCOE Research-in-Progress Seminar Nagasaki, Japan, Bauduin Lecture Hall, Ryojun Hall 2F, Nagasaki, Japan, 2008年11月18日.
- 125) 森内昌子, 森内浩幸, 有吉紅也: GB virus-C (GBV-C)感染は如何にしてHIV感染を抑制するか?: タイ北部ランパーン県コホート調査とin vitro感染実験による検討. 第22回日本

エイズ学会学術集会・総会，大阪，2008年11月26-27日．

- 126) 土屋菜歩, Pathipvanich P, Rojanawiwat A, Sawanpanyalert P, 有吉紅也：HAART療法普及前の北タイにおいてHIV/HBV・HCV重複感染が生存率に与えた影響についての研究．第22回日本エイズ学会学術集会・総会，大阪，2008年11月26-27日．
- 127) 吉居廣朗, 神山陽香, 佐藤裕徳, 山本直樹, 久保嘉直：アフリカにおける“日本発”疫学研究展開の場の構築．カテプシン群蛋白質分解酵素のCD4非依存性HIV-1感染における役割．第22回日本エイズ学会学術集会・総会，大阪，2008年11月26-28日．
- 128) Yasunami Michio, Nguyen T P Lan, Kikuchi Mihoko, Vu T Q Huong, Tran Thuy, Ha M Tuan, Vo V Tuong, Tran V Dat, Okuda Naoko, Horie Hitomi, Morita Kouichi, Hirayama Kenji：Chemokine gene polymorphism in severe dengue virus infection in Vietnamese．日本免疫学会総会・学術集会，国立京都国際会館，京都，2008年12月1-3日．
- 129) 濱田佳寿, 中間貴弘, 石田正之, 青野 礼：Chryseobacterium meningosepticum敗血症を合併した市中肺炎の一例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 130) 五十棲理恵, 吉嶺裕之, 諸角美由紀, 生方公子, 有吉紅也：Macrolide-resistant Mycoplasma pneumoniae (MRMP)による成人市中肺炎の1例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 131) 川上健司, 山領 豪, 山田晃嗣, 延末謙一：当院の医療職における麻疹，風疹，水痘，ムンプスの抗体価の保有状況に関する検討．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 132) 近澤悠志, 中間貴弘, 石田正之：Listeria 髄膜炎の治療中に Chryseobacterium indologenes 腹膜炎および敗血症を合併した一例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 133) 石田正之, 中間貴弘, 葛籠幸枝, 森本浩之輔, 有吉紅也：剖検にてCMV再活性化を証明したDrug-induced hypersensitivity syndrome (DIHS)の1例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 134) 島崎貴治, 古本朗嗣, 森本浩之輔, 出川 聡, 有吉紅也：Mycobacterium intracellulareによる皮膚・軟部組織感染症を呈した健常人の1症例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 135) 中間貴弘, 石田正之：急激な気道狭窄により心肺停止し，心肺蘇生した口腔底蜂窩織炎の一例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，2008年12月5-6日．
- 136) 小山和彦, 森本浩之輔, 有吉紅也, 山田晃嗣, 山領 豪, 川上健司：肺炎球菌による右膝関節炎，右大腿筋炎を呈した一例．第78回日本感染症学会西日本地方会学術集会，広島，

2008年12月 5 - 6 日.

- 137) 白井恵実, 井上有香, 鈴木桂子, 川瀬千晶, 水上民夫, 和田昭裕, 西矢芳昭, 白井伸明, 長谷川 慎: 蛍光相関分光法の遺伝子多型診断への応用. 第31回日本分子生物学会年会・第81回日本生化学会大会 合同大会, 神戸, 2008年12月 9 -12日.
- 138) 長谷川 慎, 川瀬千晶, 白井恵実, 井上有香, 和田昭裕, 西矢芳昭, 白井伸明: 蛍光相関分光法を用いた細菌毒素とガングリオシドの結合親和性の評価. 第31回日本分子生物学会年会・第81回日本生化学会大会 合同大会, 神戸, 2008年12月 9 -12日.

10. 3 国際会議における研究発表

- 1) **Mihoko Kikuchi, Kanji Watanabe, Ekhlas Hamed Abdel-Hafeez, Daniel Boamah, Honggen Chen, Yu Chuangxin, Kenji Hirayama** : Analysis of protective immunity induced by gamma-irradiated cercaria immunization with *Schistosoma japonicum* infection in miniature pigs. The 43rd Annual U.S.-Japan Joint Conference on Parasitic Diseases, International Medical Center of Japan, January 7-8, 2008, Tokyo, Japan.
- 2) **Takagi M** : Infestation of dengue vectors in used tires and gradient of environmental factors in Vietnam. US-Japan Parasitic Disease Panel meeting and Workshop on vector biology, January 16-18, 2008, California, USA.
- 3) **Kenji Hirayama, Abdel-Hafeez E. Hamed, Mihoko Kikuchi, Kenji Watanabe, Takashi Itoh** : Proteome approach for searching schistosomiasis vaccine candidates. 42nd Annual Meeting of the US-Japan Parasitic Disease Joint Panels, University of California, Davis, Buehler Alumni & Visitor Center, January 16-17, 2008, USA.
- 4) **Dinh Thanh Uyen, Nguyen Tien Huy, Dai Thi Xuan Trang, Atsushi Maeda, Motohiro Sasai, Nguyen Thanh Thuy Nhen, Tatsuo Oida, Shigeharu Harada, Kaeko Kamei** : Effect of amino acids and saturated fatty acids on malarial heme crystallization. 42nd Annual Meeting of the US-Japan Parasitic Disease Joint Panels. 42nd Annual U. S. -Japan Parasitic Diseases Panel Meeting University of California, Davis, Buehler Alumni & Visitor Center, January 16-17, 2008, USA.
- 5) **Michio Yasunami, Nguyen Thi Phuong Lan, Mihoko Kikuchi, Vu T Q Huong, Vu T T Ngu Huong, N Dao, Do Q Ha, Tran T Thuy, Vo D Tham, Vo V Thuong, Cao T P Nga, Tran V Dat, Naoko Okuda, Hitomi Horie, Toshifumi Oyama, Kouchi Morita and Kenji Hirayama** : Influence of host genetic variation on susceptibility to severe dengue virus infection. MEXT "Program of Founding Research Centers for Emerging and Reemerging Infectious Disease" Asian Research Forum on Emerging and Reemerging Infections. Kansai Airport Conference Halls, Hotel Nikko Kansai Airport, January 28-29, 2008, Osaka, Japan.
- 6) **Otsuki H, Kaneko O, Tachibana M, Iriko H, Takeo S, Tsuboi S, Torii M** : Erythrocyte-Binding-Like molecule and Virulence of Plasmodium yoelii. SINGAPORE malaria network meeting, January 31-February 1, 2008, Singapore.
- 7) **Hisatsune J, Masaaki Nakayama, Hajime Isomoto, Joel Moss, and Toshia Hirayama** : *Helicobacter Pylori* VacA Enhances PGE2 production through induction of COX-2 expression via a p38 MAP kinase/ATF-2 cascade in AZ-521 cells. 7th China-Korea-Japan Joint Conference on Helicobacter Infection, Kyouto, February 21-22, 2008, Japan.

- 8) **Y Kubo, H Yoshii, H Kamiyama, C Tominaga, Y Tanaka, H Sato, N Yamamoto** : Ezrin, radixin, and moesin (ERM) proteins function as pleiotropic regulators of human immunodeficiency virus type 1 infection. Keystone Symposia, March 26-April 1, Banff, Canada.
- 9) **Edward G. Mathenge, Masaru Nawa, Akitoyo Ichinose, Kouichi Morita** : Evidence that post-attachment conformational changes in flavivirus' surface E protein can be hindered by epitope-targeting monoclonal antibodies. 35th Annual Meeting 2008, May 20-23, 2008, Montreal Canada.
- 10) **山本太郎** : 3 大感染症制圧へ向けてー沖縄から洞爺湖へ。国際シンポジウム, 2008年 5 月 22-23日, 東京.
- 11) **Hirayama Toshiya, Junzo Hisatsune, Kayo Matsushima, Hajime Isomoto, Shigeru Kohno, Hisao Kurazono, and Joel Moss** : *Helicobacter pylori* VacA-induced IL-8 production in U937 cells is mediated by an increase in intracellular Ca²⁺, followed by activation of ATF-2, CREB and NF- κ B. 108th General Meeting of The American Society for Microbiology, June 1-6, 2008, Boston, USA.
- 12) **Kawada H** : Topic: Advances in Human Vector Control (Organizer). 4th Pan Pacific Conference on Pesticide Science, June 1-5, 2008, Honolulu, USA.
- 13) **Kawada H** : Distribution Analysis of Pyrethroid Resistance of Dengue Vectors, *Aedes aegypti* and *Ae. Albopictus* in Vietnam. 4th Pan Pacific Conference On Pesticide Science, June 1-5, 2008, Honolulu, USA.
- 14) **Ekhlas Hamed Abdel-Hafeez, Kenji Hirayama** : Proteome approach for identification of Schistosomiasis vaccine candidate antigen. 第一回日本・エジプト科学技術シンポジウム, 早稲田大学 早稲田キャンパス(大隈記念タワー, 井深大記念ホール), June, 8-10, 2008, 東京.
- 15) **Suzuki M, Thiem V D, Yanai H, Matsubayashi T, Yoshida L, Tho L H, Minh T T, Anh D D, Kilgore P, Ariyoshi K** : Environmental tobacco smoking exposure is associated with an increased risk of hospitalized pneumonia among children under 5years old in Vietnam. 6TH International Symposium on Pneumococci and Pneumococcal Diseases. June 8-12, 2008, Reykjavik, Iceland.
- 16) **Yoshida L, Vu T T H, Nguyen T H A, Thanh H PL, Anh D D, Kilgore P, Suzuki M, Yanai H, Ariyoshi K** : Is there any association of bacterial load in Nasopharynx with the severity of paediatric acute respiratory tract infection? 6TH International Symposium on Pneumococci and Pneumococcal Diseases. June 8-12, 2008, Reykjavik, Iceland.
- 17) **Anh NTH, Anh DD, Khanh N C, Nyambat B, Kilgore P, Vu TTH, Watanabe K, Yoshida L,**

- Ariyoshi K** : Antimicrobial resistance and serotype distribution of *Streptococcus pneumoniae* isolates among children under 5 years of age, Hai Phong City, Vietnam, July 2006– October 2007. 13th International Congress on Infectious Diseases. June 19–22, 2008. Kuala Lumpur, Malaysia.
- 18) **Vu HT, Yoshida L, Watanabe K, Nguyen HA, Dang DA, Nguyen CK, Ariyoshi K** : Antibiotic resistance and its molecular mechanisms among pneumococci from children with acute respiratory tract infections in Haiphong City, northern Vietnam. 13th International Congress on Infectious Diseases. June 19–22, 2008. Kuala Lumpur, Malaysia.
- 19) **Kenji Hirayama** : Introduction to the workshop. Presentation of participants. 7th Nagasaki International Course on Research Ethics, Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, June 30–July 2, 2008, Japan.
- 20) **Kenji Hirayama** : Ethical considerations in the community based study. Introduction to the workshop. Presentation of participants. 7th Nagasaki International Course on Research Ethics. Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, June 30–July 2, 2008, Nagasaki, Japan.
- 21) **Minakawa N, Sonye G, Dida GO, Futami K & Kaneko S** : Recent increase of water hyacinth of in Lake Victoria and reduction of lake water level increased breeding habitats for *Anopheles funestus*. 23th International Congress of Entomology, July 6–7, 2008, Durban, South Africa.
- 22) **Kishor Pandey, Shisir Pant, Hiroji Kanbara, Mohammed Nasir Shuaibu, Arun Kumar Mallik, Basu Dev Pandey, Osamu Kaneko and Tetsuo Yanagi** : Molecular detection of Leishmania parasites from whole body of sandfly collected in Nepal. 2008 ASP & ARC/NHM-RC Research Network for Parasitology Annual Conference, Stamford Grand Hotel, Glenelg, July 6–9, 2008, South Australia. (Programme and Abstracts, pp95, 2008)
- 23) **山本太郎** : 世界における結核の征圧に向けて：アジアからアフリカまで。国際シンポジウム, 2008年7月24–25日。東京。
- 24) **Hirayama T, Hisatsun J, Kurazono H, Isomoto H, Moss J** : *Helicobacter pylori* VacA increases IL-8 production by p38 MAPK activation via intracellular Ca^{2+} -release, leading to ATF-2, CREB and NF-kB activation. IUMS 2008, XIII, International Congress of Bacteriology and Applied Microbiology, August 5–9, 2008, Istanbul, Turkey.
- 25) **Kaewthamasorn M, Yahata K, Alexandre J, Nakazawa S, Torii M, Sattabongkot J, Udomsangpetch R, Kaneko O** : Positive diversifying selection on *Plasmodium falciparum* SURFIN4. 2. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
- 26) **Esmaili Rastaghi AR, Assmar M, Nateghpour M, Keshavarz H, Mohebbi M, Razavi MR, Kanbara H, Uemura H** : Molecular survey of chloroquine resistance in *Plasmodium falciparum*

- isolates from Iran. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
- 27) **Sunahara T, Trung HD, Nam ND, Hung VV, Chinh VD, Thuan LK, Nakazawa S, Moji K, Takagi M, Yamamoto T** : Heterogeneity in risk of malaria vector's attack: Empirical data from Vietnam and its implication in malaria control. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 28) **Uemura H, Dao LD, Hanh TV, Giang ND, Vien HV, Phuc BQ, Tuan NV, Thuong NT, Cong LD, Thuan LK, Isozumi R, Nakazawa S** : Polymorphism in *pfprt* and *pfmdr1* genes of malaria parasite populations in Binh Phuoc, Vietnam. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 29) **Abe FT, Tuong TD, Sunahara T, Thieu NQ, Hung LX, Nakazawa S, Honda S, Thuan LK, Moji K, Takagi M, Yamamoto T** : Risk factors for malaria infection among ethnic minorities in Binh Phuoc, Vietnam. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 30) **Tsumori Y, Ndounga M, Tanabe K, Kaneko O, Culleton RL** : Urbanization and malaria epidemiology in West Africa. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 31) **Culleton R, Ndounga M, Zeyrek FY, Yadava A, Tsuboi T, Carter R, Tanabe** : Evidence for the transmission of *Plasmodium vivax* in the Republic of Congo, West Africa. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 32) **Watanabe K, JM Carter J.M., Neely-burman M., Colley D.G** : Relative imbalance between regulatory T cells and effector T cells in chronically *Schistosoma mansoni* infected mice. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 33) **Tsuchiya N, Rojanawiwat A, Sawanpanyalert P, Pathipvanich P, Ariyoshi K** : Changes in incidence of major opportunistic infections among HIV-infected patients before and after initiation of highly active antiretroviral therapy in northern Thailand. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria. September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 34) **Tsuchiya N, Pathipvanich P, Rojanawiwat A, Sawanpanyalert P, Ariyoshi K** : Survival in patients with HIV and viral hepatitis B co-infection before HAART era in northern Thailand. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria. September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
 - 35) **橋爪真弘, 寺尾 徹, 皆川 昇** : Indian Ocean Dipole and malaria risk in the highlands of western

- Kenya. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 36) 砂原俊彦 : Heterogeneity in risk of malaria vector's attack: Empirical data from Vietnam and its implication in malaria control. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 37) 阿部朋子 : Risk factors for malaria infection among ethnic minorities in Binh Phuoc, Vietnam. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 38) **Sengchanh Kounnavong** : Vertical malaria control in a newly decentralised health delivery system: The example of Lao Peoples' Democratic Republic. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 39) **Takagi M** : Vector Infestation and Environmental Change. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 40) **Tsuzuki A, Tran Huynh, Tsunoda T, Luu Loan, Kawada H, Takagi M** : Impact of knowledge and practices on the infestation of pre-adult *Aedes aegypti* in key containers in Ho Chi Minh City, Vietnam. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 41) **Minakawa N, Sonye G, Dida GO, Futami K, Kaneko S, Horio M, & Shimada M** : Recent reduction in the water level of Lake Victoria has created more habitats for malaria vectors. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 42) **Futami K, Omondi J, Shombua M, Akweywa P, Kaneko S, Horio M, Shimada M & Minakawa N** : Non-larvicidal effects of *Bacillus thuringiensis* var. *israelensis* on *Anopheles arabiensis*. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 43) **Dida GO, Horio M, Sonye G, Futami K, Kaneko S, Shimada M & Minakawa N** : Bed nets for capturing and drying fish in villages on the shore of Lake Victoria. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 44) **E Abdel-hafeeza, M Kikuchi, K Watanabe, T Ito, C Yu, H Chen, T Nara, T Arakawa, Y Aoki, K Hirayama** : Proteome approach for identification of schistosomiasis japonica vaccine candidate antigen. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.
 - 45) **R Del Puerto Rodas, M Kikuchi, N Eiki, K Iihoshi, F Velarde, L Renjel, J Roca, S Miura, H Higo, K Hirayama** : No association between subgroups of lineage II of *Trypanosoma cruzi* and 3 different clinical forms of chronic Chagas' disease in Bolivia. 17th International Congress for

Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.

- 46) **NTP Lan, M Yasunami, M Kikuchi, VTQ Huong, DQ Ha, TT Thuy, VD Tham, TM Tuan, VV Tuong, CTP Nga, N Okuda, H Horie, T Oyama, K Morita, K Hirayama** : Microsatellite analysis for candidate susceptible genes to severe dengue virus infection. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 47) **Gideon Kofi Helegbe, Nguyen Tien Huy, Tetsuo Yanagi, Mohammed Nasir Shuaibu, Akiko Yamazaki, Mihoko Kikuchi, Michio Yasunami, and Kenji Hirayama** : Do host genetic factors influence the outcome of autoimmune mediated destruction of RBC in *Plasmodium berghei* -ANKA infected semi-immune mice? 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 48) **Mohammed Nasir Shuaibu, M Kikuchi, T Yanagi, H Kanbara, K Hirayama** : Selection and identification of a novel malaria DNA-based vaccine candidate using bioinformatics. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 49) **P Tippawangkosal, S Duangchanda, R Ubalee, R Ruengweerayut, K Hirayama, K Na-bangchang** : Identification of HLA-A24 restricted pre-erythrocyte stage specific T-cell epitopes using *Plasmodium falciparum* synthetic peptides. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria, International convention Center Jeju, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 50) **H Kamiyama, H Yoshii, Y Tanaka, H Sato, N Yamamoto, Y Kubo** : Raft localization of CXCR4 is primary required for X4-tropic human immunodeficiency virus type 1 infection. 17th International Conference of Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
- 51) **HG Chen, ZJ Li, DD Lin, XJ Zeng, YM Liu, M Kikuchi, K Hirayama** : Some ecological factors impacting the habitat of Oncomelania snail in Poyang Lake, China. 17th international Congress for Tropical Medicine and Malaria, September 29–October 3, 2008, Jeju, Korea.
- 52) **Satoshi Kaneko** : Bed nets and under-five mortality in a malaria endemic rural area of Kenya: do bed nets work with uncontrolled distribution? 17th International congress for tropical medicine and malaria, September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 53) **Yoshio Ichinose, Mohamed Karama, Masahiko Ehara, Carolyne Wahome, Angela Makumi, Guyo Huka Sora, Hillary Limo, Aajiwara Mathew, Emmanuel Mushinzimana, Satoshi Kaneko, Masahiro Horio, Samuel Kariuki, Soti David, Njeri Wamae and**

- Masaaki Shimada** : Phenotypic and molecular typing of *Vibrio cholerae* O1 isolated in Western Kenya. 17th International congress for tropical medicine and malaria. September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 54) **N Ohta, T Kumagai, R Shimogawara, T Taniguchi, N Nihei, HS Kim, Y Wataya, K Hirayama** : Research on schistosomiasis after the era of disease eradication in Japan. Forum Cheju-14, Parasitology Network in East Asia : from Bench to Field. International Convention Center Cheju, September 29–October 3, Cheju, Korea.
- 55) **Kazuo Minematsu, Takeshi Yoda, Kensuke Goto, Tsutomu Mizota** : The relationship between the shift of nutrition balance and the change of obesity rate in East-Asian countries. 17th International Congress for Tropical Medicine and Malaria (ICTM 2008), September 29–October 3, Jeju, Korea.
- 56) **Higa Y, Nguyen T Y, Kawada H, Goto K, Tran H S, Nguyen T H, Takagi M** : Spatial analysis of dengue vector breeding Environment by using satellite data and Geographical information system (GIS). The Forum of the Network of Research Centers on Infectious Diseases, October 6, 2008, Hanoi, Vietnam.
- 57) **Kawada H, Higa Y, Nguyen T Y, Nguyen T H, Takagi M** : Do Pyrethroids have a promising future? Distribution analysis of pyrethroid resistance in the dengue vectors, *Aedes aegypti* and *Ae. Albopictus* in Vietnam. The Forum of the Network of Research Centers on Infectious Diseases, October 6, 2008, Hanoi, Vietnam.
- 58) **Takano K, Nguyen T H, Nguyen T H B, Nguyen D M, Takagi M** : Molecular and morphological evidence of new Species of the Leucosphyrus Group of Anopheles (Diptera : Culicidae) from northern Vietnam. The Forum of the Network of Research Centers on Infectious Diseases, October 6, 2008, Hanoi, Vietnam.
- 59) **Tsuzuki A, Trong V D, Higa Y, Nguyen T Y, Takagi M** : Effect of housing characteristics on repeated infestation of urban premises with pre-adult *Aedes aegypti* in Nha Trang City, Vietnam. The Forum of the Network of Research Centers on Infectious Diseases, October 6, 2008, Hanoi, Vietnam.
- 60) **Masahiko Ehara, Nguyen Dong Tu, Yoshio Ichinose, Ngo Tuan Cuong, Le Thanh Huong, Nguyen Hoai Thu, Tran Huy Hoang, Nguyen Binh Minh, Nguyen Tran Hien, Thai Van Dieu, Truong Minh Sang** : Vibriophages in the northern provinces in Vietnam. Joint Forum, October 6, 2008, Hanoi, Vietnam.
- 61) **Culleton R** : Identifying the genetic factors controlling the replication rate of *Plasmodium yoelii*. The 3rd Nagasaki Symposium on Tropical and Emerging Infectious Diseases, The 9th

- Nagasaki-Singapore Medical Symposium, October 10-11, 2008, Nagasaki, Japan.
- 62) **Kaneko O** : Erythrocyte ligand of the malaria parasite and virulence. The 3rd Nagasaki Symposium on Tropical and Emerging Infectious Diseases, The 9th Nagasaki-Singapore Medical Symposium, October 10-11, 2008, Nagasaki, Japan.
 - 63) **Kenji Hirayama** : Gcoe Program, Nagasaki University. The 3rd Nagasaki Symposium on Tropical and Emerging Infectious Diseases The 9th Nagasaki-Singapore Medical Symposium, Ryojun Hall, Nagasaki University Sakamoto Campus Nagasaki, Octorber10-11, 2008, Nagasaki, Japan.
 - 64) **Takeshi Yoda, Orawan Quansri, Akiko Matsuyama, Osamu Kunii, Kazuo Minematsu, Kensuke Goto, Yasuyuki Rakue, Tsutomu Mizota** : Comparative study about take care systems of AIDS orphans and vulnerable children in Thailand and Tanzania. Joint International Tropical Medicine Meeting 2008, Octorber13-14, Bangkok, Thailand.
 - 65) **Kazuo Minematsu, Yoshinori Kaneko, Takeshi Yoda, Kensuke Goto, Tsutomu Mizota** : The Comparative Study of Human Body Composition Between Palauan and Thai. Joint International Tropical Medicine Meeting 2008, Octorber13-14, Bangkok, Thailand.
 - 66) **Kawada H. Higa Y, Nguyen T Y, Nguyen T H, Takagi M** : Do Pyrethroids have a promising future? Distribution analysis of pyrethroid resistance in the dengue vectors, *Aedes aegypti* and *Ae. Albopictus* in Vietnam. The 2nd International Conference on Dengue and Dengue Haemorrhagic Fever, Octorber15-17, Phuket, Thailand.
 - 67) **Hisatsune J, Hajime Isomoto, Toshiya Hirayama** : Molecular Characterization of *Helicobacter pylori* VacA Induction of IL-8 in U937 Cells Reveals a Prominent Role for p38 MAPK in ATF-2, CREB Protein, and NF-kB Activation. 9th Korea-Japan International Meeting of Microbiology, October, 16-17, 2008, Seoul, Korea.
 - 68) **Yoshida L, Suzuki M, Harada Y, Anh NTH, Vu TTH, Anh DD, Kilgore P, Yanai H, Ariyoshi K** : Viral etiological agents of childhood acute respiratory infection in Vietnam. Keystone Symposia on Molecular and Cellular Biology, October 22-27, 2008, Bangkok, Thailand.
 - 69) **山本太郎** : 保健システム強化に向けたグローバル・アクション. G8 北海道洞爺湖サミット・フォーローアップ国際会議, 2008年11月 3-4 日, 東京.
 - 70) **Michio Yasunami, Nguyen T Lan, Mihoko Kikuchi, Vu T Huong, Vu T Ngu, Hoang N Dao, Do Q Ha, Tran T Thuy, Tran M Tuan, Kouichi Morita, Kenji Hirayama** : Characterization of gene expression in severe forms of dengue virus infection. American Society of Human Genetics, 58th Annual Meeting, Pennsylvania Convention Center, Philadelphia, November 11-15, 2008, Pennsylvania, USA.
 - 71) **Masahiko Ehara, Nguyen Dong Tu, Ngo Tuan Cuong, Tran Huy Hoang, Le Thanh Huong,**

- Nguyen Hoai Thu, Mamoru Iwami and Nguyen Binh Minh** : Epidemiological study on cholera in northern Vietnam between 2006–2008. *Cholera & Other Bacterial Enteric Infections*, 43rd Annual Joint Panel Meeting, United States–Japan Cooperative Medical Science Program, November, 17–19, 2008, Fukuoka, Japan.
- 72) **Ngo Tuan Cuong, Nguyen Dong Tu, Tran Huy Hoang, Le Thanh Huong, Nguyen Hoai Thu, Mamoru Iwami, Nguyen Binh Minh, and Masahiko Ehara** : Vibriophages in the northern provinces in Vietnam. *Cholera & Other Bacterial Enteric Infections*, 43rd Annual Joint Panel Meeting, United States–Japan Cooperative Medical Science Program, November, 17–19, 2008, Fukuoka, Japan.
- 73) **Nguyen Dong Tu, Nguyen Binh Minh, Ngo Tuan Cuong, Tran Huy Hoang, Le Thanh Huong, Nguyen Hoai Thu, Mamoru Iwami, and Masahiko Ehara** : Characterization of *Vibrio cholerae* o1 strains isolated in northern Vietnam in 2007–2008. *Cholera & Other Bacterial Enteric Infections*, 43rd Annual Joint Panel Meeting, United States–Japan Cooperative Medical Science Program, November, 17–19, 2008, Fukuoka, Japan.
- 74) **Kenji Hirayama** : Use of Appropriate Design in Clinical Trial For Better Safety Management. Clinical evaluation of a product : vaccines as an example. 8th FERCAP Conference An International Conference on Empowering Stakeholders in Health Research : Towards Developing an Ethics of Accountability and Responsibility, アジア西太平洋地域の倫理審査委員会フォーラム, Rama Gardans Convention Center, November 24–25, 2008, Bangkok, Thailand.
- 75) **Futami K, Lutiali P, Syombua M, Gordon M, Kobia F, Owino G, Omondi J, Sonye G, Minakawa N** : Distribution of malaria vector in Kenya. JSPS AA Science Platform Seminar, November 27, Nairobi, Kenya.
- 76) **Cao J, Kaneko O, Thongkukiatkul A, Tachibana M, Otsuki H, Tsuboi T, Torii M** : A complex formation of Rhoptry Neck Protein 2 with a microneme protein, AMA1, in *Plasmodium falciparum*. American Society of Tropical Medicine and Hygiene 57th Annual Meeting, December 7–11, 2008, New Orleans, LA, USA.
- 77) **Minakawa N, Futami K, Kaneko S, Sonye G, Dida G** : Fluctuation in water level of Lake Victoria affects abundance of *Anopheles funestus*. American Society of Tropical Medicine and Hygiene 57th Annual Meeting, December 7–11, New Orleans, USA.
- 78) **Nguyen T. Lan, Michio Yasunami, Mihoko Kikuchi, Vu T. Huong, Vu T. Ngu, Hoang N. Dao, Do Q. Ha, Tran T. Thuy, Tran M. Tuan, Vo V. Tuong, Tran V. Dat, Naoko Okuda, Hitomi Horie, Toshifumi Oyama, Kouichi Morita, Kenji Hirayama** : Candidate gene approach to identify host genetic factors for severe forms of dengue virus infection. American Society of Tropical

Medicine and Hygiene 57th Annual Meeting, December 7–11, New Orleans, Louisiana USA.

- 79) **Michio Yasunami, Nguyen T Lan, Mihoko Kikuchi, Vu T Huong, Vu T Ngu, Hoang N Dao, Do Q Ha, Tran T Thuy, Tran M Tuan, Hiroki Shibata, Hitomi Horie, Kouichi Morita, Kenji Hirayama** : Dynamic host gene expression profiling of severe forms of dengue virus infection. American Society of Tropical Medicine and Hygiene 57th Annual Meeting, December 7–11, New Orleans, Louisiana USA.
- 80) **Kawada H, Higa Y, Nguyen T.Y, Nguyen T.H, Takagi M** : Do pyrethroids have a promising future? –Distribution analysis of pyrethroid resistance in the dengue vectors, *Aedes aegypti* and *Ae. Albopictus* in Vietnam-. Asian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections, December 15–16, 2008, Sapporo, Japan.
- 81) **Takano K, Nguyen T.H.N, Nguyen T.H.B, Nguyen D.M, Takagi M** : Molecular Evidence of a New species of the Dirus Complex of Anopheles (Deptera : Culicidae) from Northern Vietnam. Asian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections, December 15–16, 2008, Sapporo, Japan.
- 82) **Tsuzuki A, Trang H, Tsunoda T, Loan L, Kawada H, Takagi M** : Impact of appropriate cover use on reducing *Aedes aegypti* pre-adults infestation in key containers in Ho chi Minh City, Vietnam, Asian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections, December 15–16, 2008, Sapporo, Japan.
- 83) **Michio Yasunami, Nguyen Thi Phuong Lan, Mihoko Kikuchi, Vu T. Q. Huong, Vu. T. T. Ngu, Hoang N. Dao, Do Q. Ha, Tran T. Thuy, Ha M. Tuan, Hiroki Shibata, Hitomi Horie, Kouichi Morita and Kenji Hirayama** : Transcription profile analysis of host response to acute dengue virus infection. MEXT "Program of Founding Research Centers for Emerging and Reemerging Infectious Diseases" Asian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections, Conference Hall, Hokkaido University, December 15–16, Sapporo, Hokkaido, Japan.
- 84) **Nguyen Thi Phuong Lan, Michio Yasunami, Mihoko Kikuchi, Vu T. Q. Huong, Vu T. T. Ngu, Hoang N. Dao, Do Q. Ha, Tran T. Thuy, Ha M. Tuan, Vo V. Tuong, Tran V. Dat, Naoko Okuda, Hitomi Horie, Kouichi Morita and Kenji Hirayama** : Candidate gene approach to identify host genetic polymorphism predisposing to severe dengue infection. MEXT "Program of Founding Research Centers for Emerging and Reemerging Infectious Diseases" Asian-African Research Forum on Emerging and Reemerging Infections, Conference Hall, Hokkaido University, December 15–16, Sapporo, Hokkaido, Japan.
- 85) **Masahiro Hashizume, Yukiko Wagatsuma, Taiichi Hayashi, Abu S. G.** : Climate, climate change and incidence of diarrhoea in Bangladesh. Guwahati University. International Workshop in

North East INDIA "Agricultural Ecosystem and Sustainable Development in Brahmaputra Basin",
December 19-20, Assam, INDIA.

10. 4 報告書等印刷物

- 1) **一瀬休生**：新興・再興感染症とは？国際貢献―医療に携わる人たちのために― HYOURON
大塚吉兵衛編 pp.121-132 2008年1月
- 2) **橋爪真弘**：バングラディシュ・地球温暖化に翻弄．報道ステーション（テレビ朝日）2008
年1月10日
- 3) **橋爪真弘**：Bangladesh to bear the brunt of global warming as climate change heats up. The Asahi
Shinbun p. 27, 2008年2月7日
- 4) **後藤健介**：リモートセンシングの保健医療分野における応用の可能性と適用事例．平成
19年度長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「共同研究会」リモートセンシングおよびGIS
を用いた社会環境要因に帰する感染症対策への適用研究 pp. 1-10, 2008年2月21日
- 5) **金子 修**：感染赤血球表面に発現する新規マラリア原虫分子のマラリア重症化への関与．
平成17年度～平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 2008年3月
- 6) **溝田 勉**：リモートセンシングおよびGISを用いた社会環境要因に帰する感染症対策への
適用研究．リモートセンシングおよびGISを用いた社会環境要因に帰する感染症対策への
適用研究(長崎大学熱帯医学研究叢書)pp. 1 -85, 2008年3月31日
- 7) **Kawada H**：Photoperiodic host-seeking behavioral patterns and the eye parameters of mosquitoes
SP World―The latest technology from Japan -Sumitomo chem.- pp. 7 -10, 2008年3月
- 8) **平山謙二**：寄生虫疾患の病態解明及びその予防・治療をめざした研究．厚生労働科学研究
補助金社会保障国際協力推進研究事業 H19-国医-指定-004) 平成19年度総括・分担 研
究報告書．pp. 1 -72, 主任研究者 平山謙二, 2008年3月1日
- 9) **平山謙二**：住血吸虫症の病態解明及びその予防・治療をめざした研究―寄生虫疾患の病態
解明及びその予防・治療をめざした研究 厚生労働科学研究補助金社会保障国際協力推進
研究事業 H19-国医-指定-004) 平成19年度総括・分担研究報告書．pp. 28-30, 2008年3月
1日
- 10) **平山謙二**：住血吸虫の感染コントロール法の研究．厚生労働科学研究費補助金 振興・再
興感染症研究事業，新興・再興感染症研究事業，動物由来感染症のコントロール法の確立
に関する研究 平成19年度研究成果報告書，pp. 211-213 主任研究者 吉川泰弘，東京大
学大学院農学生命科学研究科，2008年3月1日
- 11) **橋爪真弘**：四川被災地で新型インフルの可能性!? 読売ウィークリー pp. 21-23, 2008年
6月8日
- 12) **平山謙二**：長崎大の「新興感染症」研究など新COEに29大学68件～文科省採択 世界的教育
拠点づくり支援～長崎新聞 p. 24, 2008年6月19日

- 13) 平山謙二：COE採択 東大，最多10件～朝日新聞 2008年 6 月19日
- 14) 平山謙二：GCOEについて，NIBニュース 2008年 6 月19日
- 15) 平山謙二：日本の西端で存在感示す(論説)～長崎新聞 p. 2，2008年 6 月22日
- 16) 平山謙二：長崎大の熱帯病・感染症研究 グローバルCOEに 文科省採択～西日本新聞2008年 6 月19日
- 17) 山本太郎：今を読む「現在・過去・未来の混在」～中国新聞 p.17，2008年 9 月14日
- 18) 山本太郎：「気候変動と健康影響」について解説 KTN長崎テレビ，2008年 9 月12日，19日，26日放送
- 19) Kawada H. & Takagi M：Photoperiodic host-seeking behavioral pattern of mosquitoes of medical importance. Insect Physiology New Reserch (Chapter 7)，pp 1 -28，2008年 9 月
- 20) 平山謙二：聞きたい 感染症克服へ人材育成～読売新聞 p. 34，2008年 9 月28日
- 21) 後藤恵之輔，後藤健介：暮らしと地球環境学. 暮らしと地球環境学，2008年10月
- 22) 山本太郎：うず潮 「林檎の木を植える」～長崎新聞 p. 24，2008年11月11日
- 23) 山本太郎：今を読む 「環境再び国際課題に ローマクラブから40年」～中国新聞 p 17，2008年11月 9 日
- 24) 川田 均：ピレスロイドの忌避性について，日本衛生動物学会 殺虫剤研究班のしおり pp. 17-24，2008年11月
- 25) 山本太郎：人類史から見た，感染症とパンデミックの起源 プレジデント 2008. 12. 29，p. 182，2008年12月
- 26) 山本太郎：うず潮 「奄美と島原の子守唄」～長崎新聞 p. 9，2008年12月11日
- 27) 山本太郎：今を読む 「正しい知識こそ防波堤 インフルエンザとの闘い」～中国新聞 p.16，2008年12月28日
- 28) 平山謙二：熱帯医学研究所を中心とする長崎大学グローバルCOEの獲得. 長崎大学熱帯医学研究所 同門会誌 第37号，pp 8 - 9，2008年12月
- 29) 平山謙二：和文論文の出版開始に際して. Tropical Medicine and Health, 36(3) 47, 2008.

11 講 演 会

11. 1 熱帯医学研究所における所外講師による講演

1) Framework for research ethics

Reidar K. Lie (Bergen Univ., NIH)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

2) Informed Consent.

Kenji Matsui (The University of Tokyo)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日 - 7 月 2 日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

3) Research on stored tissue samples.

David Wendlerr (NIH)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日 - 7 月 2 日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

4) Research on stored tissue samples.

Kenji Matsui (The University of Tokyo)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日 - 7 月 2 日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

5) Evaluation of risks and benefits.

Kenji Matsui (The University of Tokyo)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日 - 7 月 2 日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

6) Research on children or vulnerable persons

Hidefumi Nakamura. (National Center for Child Health and Development)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年 6 月30日 - 7 月 2 日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

7) Research on children or vulnerable persons

David Wendlerr (NIH)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

8) Research vs. clinical care

Shimon Tashiro. (Tohoku University)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

9) IRB regulations regarding clinical trials in Japan.

Eiji Uchida. (Showa Univ.)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

10) Payments and inducements

Young Mo Koo (Ulsan University)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

11) Pharmacogenetics and ethics.

Kiichiro Tsutani (The University of Tokyo)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

12) Issues in international research ethics.

Reidar K. Lie: (Bergen Univ., NIH)

7th Nagasaki International Course on Research Ethics

2008年6月30日 - 7月2日

Pompe Hall in Sakamoto Campus, Nagasaki University, Nagasaki, Japan

13) リスクコミュニケーショントレーニングー危機時の対応を中心としてー

田崎陽典

2008年12月19日

熱帯医学研究所・大会議室

14) 世界の感染症と日本

倉根一郎

シンポジウム～めぐる，感染症そして研究の今

2008年12月21日

長崎大学良順会館

15) 鳥インフルエンザから新型インフルエンザへー危機管理はいかにあるべきかー

大槻公一

シンポジウム～めぐる，感染症そして研究の今

2008年12月21日

長崎大学良順会館

16) 長崎の医学史と感染症

平岡隆二

シンポジウム～めぐる，感染症そして研究の今

2008年12月21日

長崎大学良順会館

11. 2 熱帯医学研究所教員による講演

- 1) 熱帯地におけるHIV/AIDS臨床研究の最前線

有吉紅也

第10回九州感染症・化療フォーラム

2008年1月12日-13日, 福岡市

- 2) 教育の再生と国際協力人材の育成

溝田 勉

放送大学公開講座

2008年1月12日

- 3) 近隣諸国の結核事情

宮城 啓

2008年1月13日, 長崎市

- 4) リモートセンシングの基礎と衛星リモートセンシングの展望

リモートセンシング・GIS実利用講演会

2008年1月18日, アクロス福岡

- 5) 教育の再生と国際協力人材の育成ー初等・中等教育を中心に

溝田 勉

放送大学セミナー

2008年1月19日, 放送大学長崎学習センター

- 6) 教育の再生と国際協力人材の育成ー高等教育と大学院を中心としてー

溝田 勉

放送大学セミナー

2008年1月26日, 放送大学長崎学習センター

- 7) Erythrocyte Invasion of Malaria Parasite

金子 修

2008年1月28日, 江蘇省血吸虫病防治研究所, 無錫 中華人民共和国

- 8) リモートセンシングの保健医療分野における応用の可能性と適用事例

後藤健介

平成19年度長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「共同研究会」

リモートセンシングおよびGISを用いた社会環境要因に帰する感染症対策への適用研究

2008年2月21日, 長崎大学熱帯医学研究所

- 9) アフリカの陰茎癌・タイの陰茎癌・日本の陰茎癌

千馬正敬

熱研同門会助成金報告

2008年2月23日，京華園，長崎市

- 10) ケニア研究拠点の研究教育活動 ―フィールドからP3ラボまで―

一瀬休生

微生物学セミナー

2008年2月28日，藤田保健衛生大学医学部

- 11) アジアにおけるKominkanと保健・教育

溝田 勉

日本国際保健医療学会第26回西日本地方会

2008年3月1日，岡山大学創立五十周年記念館

- 12) 国際緊急援助隊医療チームにおける洪水災害後の疫学調査

橋爪真弘

平成19年度国際緊急援助隊医療チーム第3回中級研修講師

2008年3月2日，JICA国際協力総合研究所

- 13) 感染症総論

依田健志

日本国際保健医療学会学生部会トレーニングセミナー

2008年3月13日-16日，国立オリンピック記念青少年総合センター，東京都渋谷区

- 14) NPOと私達の暮らし

溝田 勉

放送大学公開講座

2008年4月1日，長崎大学学習センター

- 15) ピレスロイドの忌避性

川田 均

第60回日本衛生動物学会大会，殺虫剤研究班集会

2008年4月17日，下野市

- 16) Japan's International Cooperation

溝田 勉

(財)国際交通安全学会春期フォーラム(英語による外国人対象)セミナー

2008年4月29日，国際地域開発センター・鈴鹿サーキット

- 17) The hidden weapons of the malaria parasite : Rhoptries and their protein complexes.

金子 修

2008年6月9日, ベルンハルト・ノッホ熱帯医学研究所, ハンブルク, ドイツ

- 18) Erythrocyte-Binding-Like molecule and Virulence of Plasmodium yoelii.

金子 修

2008年6月11日, カロリンスカ研究所, スtockホルム, スエーデン

- 19) 疾病媒介蚊の発生を左右する環境の変化

高木正洋

2008年6月12日, 大村市

- 20) ねずみ, 昆虫等の防除

堀尾政博

建築物環境衛生管理技術者講習会

2008年6月13日, 九電ビル(福岡市)

- 21) Rhoptry : Hidden Weapon of Malaria Parasite.

金子 修

2008年6月28日, 北京協和医科大学, 北京, 中華人民共和国

- 22) 中央ケニアの小学校でのトイレ建設

衛生環境改善プロジェクト(2004-2006年)ワークショップ

2008年7月6日, 京都・総合地球環境学研究所

- 23) Erythrocyte-Binding-Like molecule and Virulence of Plasmodium yoelii.

金子 修

2008年7月11日, 在タイ米国陸軍医学研究所, バンコク, タイ

- 24) Heterogeneity in the risk of malaria vector's attack : empirical data from Vietnam and its implication in malaria control.

砂原俊彦

NEKKEN Research-in-Progress Seminar

2008年7月15日, 長崎大学熱帯医学研究所

- 25) 熱帯感染症重症化とヒト感受性遺伝子

平山謙二

2008年7月31日, 畜産大学 原虫病研究センター原虫進化生物学研究分野

- 26) 新型インフルエンザと国際協力

山本太郎

長崎市立市民病院内講演会

2008年8月6日, 長崎市立市民病院

- 27) 感染症国際協力最前線：新型インフルエンザを例として

山本太郎

2008年8月23日, 島原市

- 28) Spatial heterogeneity in malaria vector's attack : empirical data from Vietnam and its implication in malaria control.

Sunahara T

Asosiasi Pengendalian Nyamuk Indonesia (APNI) Simposium & Seminar Nasional "Dampak Pemanasan Global Terhadap Bionomik Nyamuk dan Pengendalian Penyakit Yang Ditularkan Nyamuk."
August, 23, 2008, ハサヌディン大学(マカッサル市)

- 29) What is P3 lab. and why is it necessary?

一瀬休生

A seminar for training P3 staff, Maintenance and Operation of P3 Laboratory System organized by NUITM-KEMRI Project.

September, 9 -10, 2008, NUITM-KEMRI, Nairobi, Kenya

- 30) NUITM-KEMRI, Nairobi, Kenya

高木正洋

長崎大学ハノイ公開講座「ハノイで暮らすには：感染症から身を守るにはどうすればいいの？」－微生物から媒介昆虫対策まで－

October, 5, 2008, Hanoi DAEWOO Hotel

- 31) 日本の国際協力

溝田 勉

(財)国際交通安全学会秋期フォーラム(英語による外国人対象)セミナー

2008年10月8日, 国連地域開発センター, 名古屋

- 32) 開発途上国における水と健康をめぐる問題

橋爪真弘

国際保健医療学会・学生部会 総会・ユースフォーラム

2008年10月26日, 国立国際医療センター研究所, 東京

- 33) 感染症国際協力最前線：新型インフルエンザを例として

山本太郎

第394回長崎医師会例会

2008年11月8日, 佐世保市

- 34) 新型インフルエンザ－歴史・対策・課題－ 国際協力の視点から

山本太郎

長崎透析医会

2008年11月11日，長崎市

- 35) 衛星データを用いた疾病対策データに資する都市の定量化の検討.

平成20年度 長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「共同研究会」健康開発政策と実践事例
ー感染症対策における社会技術的アプローチー

後藤健介

2008年11月17-18日，長崎大学熱帯医学研究所

- 36) Climate and Diseases in Tropical Monsoon Asia : Study of Diarrhea in Bangladesh and beyond.

Masahiro Hashizume

"Lao-Japan leadership on study of global environmental change and health in tropical Asia"

November, 28, 2008, Research Institute for Humanity and Nature (Kyoto)

- 37) 高病原性トリインフルエンザー基本から予防対策までー

依田健志

長崎市中央公民館 市民講座

2008年12月 3 日ー24日，長崎市中央公民館

- 38) 日本における熱帯医学推進のための共同利用と連携協力

青木克己

第72回中央教育審議会大学 分科会 事例報告

2008年12月5日，東京・文部科学省

- 39) 日本の風土病，世界の熱帯病制圧への挑戦

文部科学省科学技術振興調整費シンポジウム～めぐる，感染症そして研究の今

青木克己

2008年12月21日，長崎大学良順会館

12 主要な研究設備

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1 回転電動万能ミクロトーム | 25 コロニーアナライザー画像解析装置 |
| 2 反射型蛍光顕微鏡 | 26 熱帯性病原体成分機能解析システム |
| 3 ウルトラミクロトーム | 27 多機能ぜん虫行動解析システム |
| 4 落射蛍光位相差顕微鏡 | 28 熱帯性ウイルス感染症診断試薬作成システム |
| 5 分離用超遠心機 | 29 蛋白質精製システム |
| 6 真空高速冷却遠心機 | 30 病原性ウイルス遺伝子及び蛋白質機能解析システム |
| 7 クリオスタット | 31 自動炭酸ガス細胞培養装置 |
| 8 万能倒立顕微鏡 | 32 超遠心機 |
| 9 走査電子顕微鏡装置 | 33 核酸オリゴマー感染症治療薬開発システム |
| 10 プロテインシステム | 34 生物顕微鏡 |
| 11 生態機能解析装置 | 35 細菌毒素活性測定解析システム |
| 12 病理組織標本作製システム | 36 DNAシーケンサー |
| 13 超高速ビデオ | 37 デジタル画像電子顕微鏡システム |
| 14 細胞自動解析分離システム | 38 耐腐食構造棚式真空凍結乾燥装置 |
| 15 原虫遺伝子DNA解析システム | 39 マイクロビーズアレイシステム |
| 16 レーザースキャン顕微鏡 | 40 リアルタイム定量PCRシステム |
| 17 医用サーモグラフィ装置 | 41 高圧蒸気滅菌装置 |
| 18 蛋白細胞相互作用解析システム | 42 DNAアナライザ |
| 19 白血球機能解析システム | 43 タンパク 2 次元分画システム |
| 20 核酸蛋白質解析合成システム | 44 液体クロマトグラフ質量分析計 |
| 21 宿主・寄生体相互作用解析システム | 45 自動焦点維持装置付長時間観察システム |
| 22 プラスミド自動分離調整システム | 46 マルチラベルカウンターシステム |
| 23 遺伝子検出システム | 47 生体分子精製システム |
| 24 感染症病原性解析システム | |

13 刊 行 物

1) Tropical Medicine

当研究所が発行した機関誌で、熱帯医学の原著論文のほかに短報や総説などが掲載される。本誌は長崎大学風土病紀要として昭和34年に創刊されたものであるが、昭和42年に研究所名が改められたときにTropical Medicine（熱帯医学）と変更され、さらに平成元年からは英文のみの雑誌となった。毎年4号分を1巻として平成12年度には第42巻が発行されたが、平成13年度から休刊中である。

2) 長崎大学熱帯医学研究所年次要覧

昭和39年3月、当研究所の沿革および研究活動をまとめた最初の「長崎大学風土病研究所年次要覧、昭和38年度」が刊行された。その後、昭和42年の研究所名改称に伴う標記表題への変更はあったが、昭和45年度まで毎年刊行された。昭和46年度から54年度までの分はまとめて昭和56年3月に発行された。昭和55年度から再び毎年発行されることになり現在に至っている。平成19年度年次要覧は一部がカラー印刷となり、平成21年7月に発行された。

3) 長崎大学熱帯医学研究所 Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University

国内及び外国からの来訪者に対する当研究所の紹介パンフレットとして、長崎大学熱帯医学研究所案内（A Guide to the Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University）が昭和55年12月に最初に発行された。その後一部改訂されたものが随時発行されてきた。平成元年10月には、当研究所が共同利用研究所に改組されたのを機会に、標記のように表題を改めカラー印刷として発行され、その後は毎年発行されることになった。平成6年度に研究所の機構が大部門制に改組されたのを機に、このパンフレットはB5判からA4判に改められ、また和文版と英語版を別々に作成することになった。平成21年度版は、平成21年8月に発行された。

4) 長崎大学熱帯医学研究所共同研究報告集

この報告集は、当研究所が平成元年に全国共同利用研究所に改組されたのに伴い、毎年実施される共同研究と研究集会の概要をまとめたものである。平成20年度の報告集は、平成21年9月に発行された。

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧
平成20年度（2008）

平成22年2月発行

編集者：長崎大学熱帯医学研究所
附属熱帯感染症研究センター

発行者：長崎大学熱帯医学研究所
〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4
☎(095)819-7800（総合案内）

印刷所：株式会社クイックプリント
〒850-0034 長崎市樺島町8-12
☎(095)827-1318